

# ソ連抑留と日本回帰

元 亜細亜大学教授・教養部長

宮脇昌二 著

国文研叢書

No.34

ソ連抑留と日本回帰

社団法人 国民文化研究会

## 「はしがき」に代へて

国民文化研究会理事・亜細亜大学名誉教授 夜久 正 雄

『ソ連抑留と日本回帰』といふ書名は、考へやうによつては、不思議な書名である。

「ソ連抑留」といふ言葉は、最近日ロ平和克服の交渉に際してよく取り上げられるから若い人にも知られてゐるだらう。五十年前の大東亜戦争―第二次世界大戦とも太平洋戦争とも呼ばれてゐる―の終戦時、むかしの満洲国（昭和七年―二十年、一九三二―一九四五）―いまの中華人民共和國東北三省（黒竜江、吉林、遼寧三省）ならびに内蒙古自治区―に、極東ソ連軍が侵入して来て、満洲国に駐留してゐた関東軍を撃破した。ために満洲国在留邦人は、迫害暴行至らざるなき悲惨な運命に陥つた。さらに終戦後、ソ連は関東軍將兵六十万を捕虜としてソ連に連行、捕虜収容所に抑留して、苛酷な労働に使役した。そのため六万の死者を出した。

本書の「ソ連抑留」とは、著者の抑留の体験をいふのである。通常この抑留期間は、二、三年であつたが、著者は非転向（共産主義に転向しない反動）共産主義に対する反

動)の理由で、五年間に及んだ。

著者の「ソ連抑留と日本回帰」の「日本回帰」とは、「日本への回帰」の意味で、「外国文明に対する一方的な礼讃・心酔から目が覚めて、日本文化文明の伝統への回帰」といふ意味である。

「ソ連抑留」といふ苛酷な運命に陥し入れた原因は日本の敗戦である。だから「ソ連抑留」から「日本への反乱」とか「日本放棄」とかとなることの方が自然であるかも知れない、戦後の日本人の多くが敗戦の苦しみから日本の伝統文化を否定したやうに。事実、抑留の結果、共産主義に洗脳されて日本革命へと走った人も少くはない。占領軍の軍事裁判である「極東軍事裁判」の判決を金科玉条として自国の戦争を犯罪視する見方などもこの部類であらう。

著者はしかしさういふ道を辿らなかつた。逆に「ソ連抑留」——社会主義の体験——から「日本への回帰」の道を、生涯にわたって歩みつづけることになったのである。その心の足跡を丹念に綴ったのが本書である。そこに本書が万人の共感を呼びうる普遍性がある、国際性もあると、言へよう。



それで、本書は、著者の最終の考へでは、はじめに「ソ連抑留日記抄」を出すといふ構成だった。

この「日記抄」といふのは、非転向組、つまり共産主義に転向しない反動分子の烙印ろういんを押されて、一般の帰国組から除外された著者が、いつ帰れるかわからない抑留捕虜收容所の中から、待ちに待った帰国（ダモイ）を許されて先に帰った同村の友人将校に托した「日記」の抜き書きである。

著者は書いてゐる。

「この歌稿・日記抄は、昭和二十二年（一九四七）晩秋、ソヴィエト連邦タタール自治共和国にあつたエラブカ（ボルガ河の支流カマ川沿岸の地）にあつた日本軍将校捕虜收容所から帰還した、わたしと同村の田村博君が、32 cm×40 cmの方眼紙二枚と $\frac{1}{3}$ （裏表全部）にわたしが細書したものを、自製タバコ入れの二重底に秘して携行し、わが留守宅に届け置いてくれたものである。」（写真・地図参照）

吉田松陰が最期を前に獄中から同囚の沼崎某に托して同志に伝へた「留魂録」を思はしめる、著者の生の証あかしである。

著者は人知れず異境に死ぬ身の心の一端を、せめては家郷友人故国の人に知ってもらいたいと、万感をこめて日記から方眼紙に書き写したのである。しかも発見された場合の危険を用心して、文章は極度に切りつめなければならぬ、一語一語どんな思ひで書いたか、と思ふと、私など同じやうに戦争を経験したものは涙なくしては読めない。

そしてこれが「日記抄」であることについても一言解説が必要であらう。といふのは、「日記」は著者生涯の友であるから。

著者と一緒に旅行した折々、宴会のあとでみな床に就く頃、著者が日記をつけるのをよく見かけた。相当飲んでゐるのに、と感心したものである。今度改めて聞いてみたら、驚いたことに中学の一年の時からだといふ。さうすると著者の日記は昭和のはじめから昭和六十四年、昭和のほとんど全期間にわたり、さらに平成元年を経て今日に至る、約六十数年に及ぶことになる。これは大変なことである。

それだから、「抑留捕虜日記抄」といふのは、中学の一年からつけはじめ、軍隊入隊後もつけつづけ、抑留後もつけつづけた「日記」の抜き書きなのである。捕虜になったから付けたといふものではない。著者の生きてゐることの証しなのである。

しかし、「抑留日記抄」は昭和二十二年三月十四日をもって終つてゐる。同年の晩秋、日本への帰還が始まつて、「日記抄」が前述のやうに帰還する同村の友人に托されたのであるが、その後のことについて著者は次のやうに書いてゐる。

「昭和二十二年の十月ごろか、わたしを含めて、いはゆる反動組ぐみの凡そ三、四十名の尉官（大尉・中尉・少尉）は佐官（大佐・中佐・少佐）の方へ隔離移転させられ、翌二十三年夏、われら洗脳足らざる反動組は佐官の一行と共にシベリアに転送されたが……そこには兵隊上あがりのアクチーブ（共産主義に転向してソ連の洗脳政策に積極的に協力したもの）の手耳てみみるところで、毎日ラポータ（強制労働）わたしの仕事は主に建築用のブロック作りであった）から帰つてくると、はげしい反動うつるしあげ（個人を集団で弾劾すること、人民裁判）が待つてゐるところであつた。文字通り心身を磨り減らす日が重なつたのである。」つまり、「日記」をつけることのできない地獄の二年間となるのである。日記をつけることができなるといふことが著者にとってどんな意味を持つてゐるか、正に生地獄だったに違ひない。その一端を語るのがソルジェニーチンの『収容所列島』『イワン・ディーン・ヴィッチの一日』などであらう。著者は辺見じゅん氏の『収容所から来た遺書』をあげて

ある。

(平成四年十月十二日NHKテレビニュースは、悲惨な抑留捕虜収容所生活を描いた吉田勇氏の絵画展が、ウラジオオストックその他極東ソ連都市で行はれたことを伝へた。その際の絵画も衝撃的であつたが、それを見たロシア人の一人一人が、"人類は二度とかうした全体主義の犠牲を出してはならない"と言つた言葉が印象的であつた。「全体主義」とはいふまでもなく、共産主義社会主義の意味である。)

「抑留日記抄」について思はず長々と書いてしまつたが、この「日記抄」が著者のいちであり、著者の思想と戦後の歩みの根底をなすものであることは、戦争の直接経験を持つものには一語一語同感できるとしても、当時の経験を持たない若い人たちには、さらに長い長い解説が必要だらうと思はれる。さうした解説をつけるとしたらこの「日記抄」の解説だけで一冊の書物となつてしまふだらう。

さう思つて、著者にお願ひをして、著者予定の構成を変へて「日記抄」を第一編「わたしにおける抑留体験」の中にあげることとさせて頂いた。そして総説編には、云はば「ソ

連抑留と日本回帰」の総論ともいふべき、抑留の経験から日本への回帰を経て五十年後のソ連の崩壊に及ぶ著書のソ連観——をかけたことにした。

第二編は、抑留の体験から日本への回帰を語る「風土への関心・日本の自然と古典」とした。日ロ風土の比較を介して日本の自然風土への没入が年代の順序にまとめられてゐる。

第三編の「俳句文学としきしまのみち」については次のやうな解説が必要かも知れない。

著者は、国民文化研究会の源流ともいふべき第一高等学校昭信会（黒上正一郎先生を師とし、聖徳太子の思想信仰と日本文化創業の御偉業を偲び、明治天皇御製に人生の指標を仰ぎ、東西文明の融合による新文明の創造に参ずることを目標にした研究団体・昭和四年創立）の、昭和八年入会の会員である。同学年同窓（著者は文甲）に、小田村寅二郎（文丙Ⅱフランス語専攻、国文研理事長）・今井善四郎（文丙・会員）・南波怒一（文甲Ⅱ英語専攻）・齋藤信房（理甲）・夜久正雄（文甲、国文研理事）などが生き残つてゐて、五十数年の交友である。

一高昭信会時代の著者は、一高の文芸誌に万葉ばりの短歌を発表してゐたが、東大の国

文科に進むと、ロシア文学を耽読するやうになった。もちろん翻訳ではあるが、トルストイ全集とかドストエフスキー全集なども読破してみた。そこで私などは、著者は将来、郷土の先輩島崎藤村のあとをついで長編小説の作家になるのではないかと思つてみた。大学の卒業論文は「国民文学論」であつた。昭和十四年に卒業した。

当時、大学生は徴兵猶予の恩典に浴してゐたので、卒業と同時に徴兵検査があり、著者はこれに合格となり、翌昭和十五年一月に当時の満洲国牡丹江省東寧の関東軍自動車第四連隊に入営し、以後軍隊生活を送り、昭和二十年、第二軍司令部参謀部附（牡丹江のち吉林省延吉）陸軍中尉として終戦を迎へる。以後のことは「日記抄」その他によつて本書に見ることが出来る。著者の帰国は昭和二十五年一月であるから、著者の軍隊生活は、まるまる十年間といふことになる。年齢にして二十五才から三十五才までである。

昭和十八年夏ごろか、著者は婚約するために一時満洲国から帰国したが、その折著者を迎へて壮行の宴を設けたことがあつた。へべれけに酔つた軍装凛々しい陸軍中尉を、発車する汽車の窓から友人みんなで押し込んだが、軍刀が窓枠に引っかかつて中へ入らず、さかさまになつた著者が足をばたばたやつてゐた姿が目につく。それが、まさか、満洲国で



敗戦を迎へ、五年もの捕虜抑留にならうとは、誰も予想しなかつた。

それにロシアの長編小説を耽読してゐた著者が、五年に及ぶ抑留生活のあと帰国して、後、高校の教員生活をつづけ、地方に定着して、俳句・俳諧の研究家として大成しようとは、誰も思はなかつたであらう。

著者の家庭は、長野県上伊那郡中沢村（現駒ヶ根市中沢）の神職の家である。長兄は小學生のとき死亡、次兄は蒙疆新聞の通信部長として将来を嘱望されたが、チブスのため張家口で客死した。弟は予料練の航空兵で戦病死した。三男の著者が家を継いで郷里に定着したのである。

著者たちによる『一茶全集』全九巻の編集とか、『井月真蹟集』の著述などには長編作家の面影がある。創作集『権兵衛峠』は短編小説家としての著者のすぐれた作品である。さういふ意味ではいい意味での地方作家となつたのである。しかし将来「宮脇日記」がものを言ふ時があるだらう。やはり著者は長編作家だつたのだ。

著者は現在生まれ故郷の駒ヶ根市文化財団理事などとして活躍してゐて、長野県では名

士であるが、他の地では知る人が少いと思つて、紹介の筆をとつたわけである。私は著者には青年時代から、随分厄介になつてゐて、「はしがき」など書ける柄ではないが、著者に頼まれてはことわれない。言ひ足りないことが沢山あるやうで、尽しがたいが、これをもつて「はしがき」に代へさせていただく。蕪辞をお許し願ふ。

なほ、本書の編集・校正には、国民文化研究会・常務理事・事務局長の長内俊平氏、並びに講談社・広告部長・磯貝保博氏に絶大な御協力を得たことを感謝し、また奥村印刷株式の担当・佐藤幸雄氏にも謝意を表したい。

平成四年十二月八日

## 目次

「はしがき」に代へて

国民文化研究会理事・亜細亜大学名誉教授 夜久正雄

### 総説篇 わたくしにおけるソ連体験と日本への回帰

- (一) わたくしにおけるソ連体験——平成三年三月の時点において……………17
- (二) ソ連邦崩壊……………30
- (三) CIS・ロシアの出現と日本……………41

### 第一篇 わたくしにおける抑留体験

- (一) 敗戦・捕虜日記抄……………69
- (二) 捕虜読書録……………143
- (三) 邂逅……………153

## 第二篇 日本の風土・自然と文化

- (一) 草の露にも通ふところ——古歌・連歌・俳諧を通して……………195
- (二) 自然の声を聞く文化……………207
- (三) 歳時記を読む——日本の四季と季語の美しさ……………219

## 第三篇 俳句文学としきしまの道

- (一) 俳句文学を尋ねて
  - (1) 高校教育を去るに当って……………231
  - (2) 加舎白雄全集発刊に際して……………236
  - (3) 一茶全集編集を顧みて……………242
  - (4) 時代と俳人……………250
- (二) 連句・連歌の道（たど）を辿る
  - (1) 「レンガ」と連歌……………271
  - (2) 俳諧精神における人生随順——芭蕉紀行より……………284

|     |                     |     |
|-----|---------------------|-----|
|     | (三)                 |     |
|     | 再顧しきしまのみち           |     |
| (3) | 芭蕉俳諧と禪              | 296 |
| (1) | 帝王と詩歌——日本皇室としきしまのみち | 306 |
| (2) | 歌人 宗良親王             | 311 |
| (3) | 親王余芳と遺蹟             | 324 |

総説篇

私におけるソ連体験と日本への回帰





(一) わたくしにおけるソ連体験

——平成三年（一九九二）三月の時点において——

一、新たなソ連への関心

ソ連のゴルバチョフ大統領のペレストロイカ（再建）・グラスノスチ（公開）政策によつて、東欧諸国は、ソ連への半隷属状態のやうな共産主義態勢を脱し、西欧諸国に追随しようとして居り、また従来ソヴェット社会主義共和国連邦に包含されてゐた異民族共和国は、逐次独立への機運を示してゐることは、周知のところである。

わたしは、一昨年即ち平成元年（一九八九）夏ごろだったか、バルト三国の内リトニアが、はげしい独立の氣勢をソ連当局者につきつけた新聞記事を見て、衝撃といつてもいいほどの感動を受けたことであつた。

それは、もう四十数年前のこと、忘却の底にあつた次のやうな記憶が、右の記事に触発されて蘇つてきたからである。

昭和二十年（一九四五）の夏、満州における日本敗戦のあと、わたしどもは、間島省延

吉においてソ連軍に部隊ごと監禁され、やがて十一月初旬、雪のシベリアを、貨物車を下二段に区切った捕虜輸送車で、ウラル山脈を越えてヨーロッパ・ロシアまで輸送される途中、西から来たバルト三国のシベリアへ連行される一団と行き遭った。

かれらは、われらと違って、その貨車は、見る目にもわかる嚴重な警戒監視下にあつた。

貨車には、明りとり天井に近く小さな窓がある。その窓と窓とが相向かって停車するとき、西からきた連中が、ソ連のコンボーイ（警戒兵）を警戒しながら必死の声でわめくのである。

われら一行には、大学でドイツ語を習った幹候あがりの者もゐるので、かれらは何を言つてゐるのかと聞くと、先方はドイツ語を使つたらしく、おれらはバルチックの国の者だが、これからシベリアへ送られていく、日本の兵隊さんたちよ、どうか日本へ帰ったら強くなくて、おいらを助けてくれ、と言つてゐるんだよと言ふ。

こちら自体どこへ送られるのか、明日はどうなるのか皆目わからぬ身の上、何を言つてゐるんだと思つたが、雪深い荒野の中のこの一シーンは妙に頭腦の一角に焼きついてゐて、

リトアニアの独立決議などのニュースを聞いたとたん、記憶がよみがへってきたのである。

バルト海沿岸に位置する三国、北からエストニア・ラトビア・リトアニアの、いはゆるバルト三国は、地理的に古くからヨーロッパ文明の影響を受け、ソ連邦一般より民度も高く、第一次大戦とロシア共産革命（一九一七）のあと、暫く独立の機会を得たが、ソ連（スターリン）とドイツ（ヒットラー）が不可侵条約を結んだとき、その「秘密追加議定書」によって、やがて間もなくソ連に併合されたのである。

この併合時以後、事あるごとに、ソ連は不平分子、あるいは有力者を、見せしめのため、シベリアへ送りこんだのである。その数、数十万人に及ぶと言はれる。人口およそ七〇〇万とすれば、一割近くが極北の地で死んだわけである。

わたしどもが、一九四五年の暮れ、バイカル湖畔を経て、ウラル山系で出会ったバルト三国人（どの国かはわからない）は、この数十万の一部だったわけである。

ルーマニアのチャウシェスク大統領夫妻の銃殺にまで立ち到った、ポーランド始め東欧諸国のその後の状況、またバルト三国より次第にソ連傘下の民族共和国に及ぶ独立の機運

に關するニュースは、長らく忘れてみたわたしのソ連捕虜（抑留）生活に思ひを馳せさせ、わたしの抱いてきたソ連觀をはげしく揺さぶりかつは力づけてくれたのである。

## 二、わたしのソ連捕虜生活

周知のやうに、昭和二十年（一九四五）八月、ソ連軍は満州の地に侵攻すると、降伏する日本軍を、先づその建制を破壊して兵と將校とを分離し、下士官・兵をおよそ一千名の大隊に編成し、逐次シベリアへ、また一部はヨーロッパ・ロシアの各地へ送りこんで、勞役に従事させたのであった。

ソ連領内に拉致した日本人数は、樺太の文官・地方人をも含めておよそ六十万、数年の勞役の間の死者は六万人に及び、また不具廢疾者もおよそ六万人に達したと推定せられる。死者の大部分は、ろくに収容施設もないシベリアの各地において、拉致されて間もなく襲来した、零下三、四十度に達する寒氣と、栄養不足によって生じたものであった。

わたしは、当時ずっと勤務してゐた第三軍司令部（第十一部隊）（終戦の年の五月、牡丹江より間島省延吉に移）各部將校とともに、前述のやうに、昭和二十年十一月初旬、延吉停車場より貨車輸

送され、雪のシベリアを経て車中一ヶ月、十二月初旬、ロシア連邦共和国タンポフ州ラーダの、これまた雪に埋もれる收容所ラッゲツルに收容されたのであった。

わたしには、幸ひに「敗戦捕虜日記抄（第一篇（一）所載）」として、当時したためたままの日記が残つてゐる。その中に、十一月中旬、雪しまくバイカル湖畔を通つたときの短歌数首が見える。

#### バイカル湖畔

吹雪するバイカル湖畔に夕げたく水掬ひつつあはれこの時

バイカルの湖上小暗く吹雪つつ家辺いはべをはなれ行き果てなく

バイカルの波の音高き汽車の扉とよ雪はだれ入る寒き夕べを

はるばると来つるものかなバイカルの湖畔をゆくと人の知らなく

命あらん限り忘れじ囚とらはれてバイカル湖畔を凍こえゆく日を

このラーダ日本軍将校捕虜收容所には、およそ日本軍将校八千名が收容され、なほ生き残りのドイツ軍二、三千名と同居生活で、私どもの第三軍司令部はそのまま日本軍捕虜集団シユクタイフの司令部となり、右の残留ドイツ軍の本部と同一バラツケに起居せしめられ、わたしも



その一員として諸連絡に当たったのである。

この收容所生活は、それから凡そ八ヶ月、その間始めて起居を共にしたドイツ人の、幾多の苦辱を経てきた、凄いほどのドイツ魂、生命力に驚嘆する場面に出会ったのであったし、さまざまの憶ひ出があるが、その一つはやはり本付となつた通訳臼杵喝郎君（故人）のことで、氏の面影はいまも折に触れてわが脳底より蘇よみがへってくる。

臼杵氏は、終戦までハルピン学院の助教授だった人で、そのロシア語は、間違ひなく拔群で、かれとともに、ごく稀であるが、ソフホーズ（国営農場）や、あるときはタタール人といふ寡婦の家庭を訪れた折の印象はいまだに鮮やかである。そして、かれと二人、夜遅くまで、暗い半地下バラツケの二階で、わたしも入営前好んで読んだ、十九世紀のロシア文学のことを話し合ったものである。かれは特にチエホフやツルゲネフが好きで、わたしはまた翻訳での感想を多少恥ぢらびながら、プーシユキン・ゴーゴリ・ドストイェフスキーのことなどで、相応じたものであった。

翌昭和二十一年八月、日本ラーダ集団全員は、ロシア共和国内のタタール自治共和国エラブカに移動を命ぜられ、わたしも今度は一般中隊の中に入って、多少の労働にも従ふや

うになった。わたしの断片的捕虜日記は、翌二十二年九月までで、その末尾に「注」として、次のやうなことで書きが記してある。

この年の晩秋から日本への帰還が始まったが、わたしは、翌昭和二十三年（一九四八）夏、シベリア・ハバロフスクに輸送され、ここでさらに二度の冬越しを強ひられるはめとなった。あまつさへ、そこにはまさに心身を磨り減らす労働と民主化運動が待ってゐたのである。

監禁された檻をりの中のやうな生活で、それこそ「葭よしの髓ずいから天井を覗のぞく」のそしりは免れないが、あしかけ五年に及ぶソ連収容所生活は、わたしにわたしなりのソ連観を与へてくれたのである。

### 三、ソ連捕虜体験が与へてくれたもの

わたしは、昭和二十五年一月、兵役・ソ連捕虜あはせて満十年を経て日本に帰還するを得て、その年四月より故郷の新制中学校に奉職し、その年「上伊那教育」といふ、教育会の雑誌に「捕虜読書録」（第一篇（二）所載）といふ一文を寄せた。

その冒頭に次のやうに記した。――

ロシアの冬は長い。常冬をゆく雪の国である。わが信濃教育が、寒さに鎖された冬の夜長の炉辺に発達したといはれるやうに、われわれが親しむ十九世紀ロシアの小説における果てしない饒舌は、凡そ一年のうち七ヶ月は深々と雪に埋れて、ペーチカとサモワールのほとりにすこす人々によって生まれたものとうなづかれるのである。

この一文は、シベリア以前のヨーロッパ・ロシア収容所において、われわれ捕虜の仲間がリュックサックの中に入れてソ連まで携行した、哲学・宗教・文学（特に古典類）などの書を、廻し読みで貪るやうに読んだ状況を記したものであるが、その末尾は次のやうに結んでゐる――

和辻博士の『風土』『日本古代文化』等に触発され、異国の丘のほとりで読んだ『万葉集』、日本の空気の中にあつては、かつて気のつかなくつたやうな日本の風物の一つ一つが、このやうな「ヨーロッパ的風土」のさ中にあつて、いかに痛烈に身をさいなんだか、そのやうな感懐について尚多くの語りたいた事があるが、もはやこの辺で十九世紀のロシアの貴族の如き饒舌は切上げねばなるまい。ソヴィエト同盟は本年既

に革命第三十三周年記念日を迎へるほどに成長したのだから。

この「風土」的関心は、その後、わたしに数回にわたる日本の風土―われわれの情操を遠き祖先以来数千年にわたって裁<sup>つちか</sup>つてきたところの―にかかはる隨筆を書かせたのである。そして更に日本の風土の美しい表現である季語とともに祖先の残した俳句文学に没頭するやうになつたのである。

しかし、何よりも貴重な体験と言つていいのは、人類が、この地球上に始めて実現したところの共産主義態勢の真唯中にゐて、その空気を吸つたことであつた。当時は、独ソ戦に勝利し、一週間にして満州の日本軍を制圧した、スターリン完全独裁下のソ連であつた。物資は極度に逼迫してゐることは、われわれの外での労働<sup>ツギイタ</sup>の黒パンの昼食を、隠れて見てゐる子どもたちのそぶりでも明らかであつたが、ソ連政治態勢の破綻は、いまだ露呈するに到らなかつた時期である。

しかしながら、たとへ葭<sup>はし</sup>の髓<sup>すい</sup>からの観察であつても、四年有余の歲月は、この社会主義態勢下の人民の暮らしが、われわれの経験してきたいかなる社会よりも暗く陰気で、かつてのスラブ・ロシア民族の持つてゐた人情の厚さの片鱗もなく、すべて薄暗い政治的人間

ばかりであることを、いやでも気づかせられたのである。

日本に帰ってから、ソ連に関する書物の若干は読んだが、これは本当だ、いやこれは上への観察に過ぎないと、妙に判断できる自分を顧みるのである。政治経済に疎いわたしの、ソ連再認職の参考書は、鈴木俊子氏の『誰も書かなかったソ連』であり、また袴田茂樹氏の『ソ連―誤解をとく25の視角』（中公新書）などであった。

徹底した外部情報遮断と思想教育統制下の、当時のソ連に在って、その空気を吸ったわたしは、一九八七年（昭和62）十一月、ミャンマー（旧ビルマ）南方海上における大韓航空機爆破事件が起きたとき、わたしは、いち早く、これはもう間違ひなく北朝鮮の所業であることを確信できたのであった。「南は軍事ファッショの独裁国であり、米帝の植民地であり、その国におけるオリンピックを不成功に終らせることは、正義であり愛国的行為である」といふ荒唐無慙な思想が信ぜられ、実行される地球上の一角があり得ることを体験上知ったからである。

#### 四、ソルジェニーツインの近著から

わたしは、本稿にとりかかって間もなく、いはば天恵とも言ふべき、『収容所群島』の著者ソルジェニーツインの近著『甦れ、わがロシアよ』（木村浩訳）に接する機会を得たのであった。

革命後七十有余年を経たソヴィエット社会主義共和国連邦に対し、わたしの発言はきめて無力なこととはわかつてゐても、他国人としての多少の遠慮を覚えてゐたときに、スラブ系ロシア人として、ソルジェニーツインは、舌頭火を吐くがごとく自国に対する「私なりの改革への提言」を述べるのである。

その冒頭の章の書き出しは、――

欺瞞にみちた統計によって隠されてはいるものの、今やわが国の惨状は知らない者がいるだろうか。盲目的な状態のなかで生まれた悪質なマルクス・レーニン主義のユートピアに七十年間も追いついてられ、われわれは自国民の三分の一を断頭台に送った、無駄な自己破壊的とさえいえる「祖国」戦争の犠牲にしたりしてきたのだ。



以下「二十世紀は、はじめから終わりまで、わが国にとって惨めな敗北であったと認めざるをえない。これまで吹聴されてきた成果は、すべて虚像であった。…わが国は今や廃墟のなかにある。」「墮落した支配階級が、つまり、何百万人にも及ぶ党と国家の特権階級（インテリゲンチヤ）が、自分が獲得した特権の一つでもみずからの意志で手放すことがおそろしいのである。」など、かれの断腸の声がつづくのである。

この書の中の表現には、ソ連現代史の中で注釈を加へねば正解できない部分も多々あるやうで、たとへば右の「『祖国』戦争」もさうである。この「祖国」は、共産主義勢力を世界に拡め、同時に自己の保身を計ったスターリンが、独ソ戦において、ロシア民族の祖国愛に乗じて、「祖国防衛戦争」を大声呼号したことを指すのである。

これらの表現を含め、大ロシア人・ウクライナ人・白ロシア人などの民族の歴史などにはわからない点もあるが、ソルジェニーツインの訴へんとする所は、大かた身にしみて納得されるのである。

これもまた、わたしのソ連体験——五年にわたる捕虜（抑留）生活——の致すところかと、幸ひ命保って故国に帰り、数十年後今日この稿を草するに到ったことを、感慨深く回

想するのである。

(平成三年三月中旬稿)  
〔国民同胞〕平成三年四月十日号)

## (二) ソ連邦崩壊

わたくしが、バルト三国の独立運動に刺戟されて、久しぶりにかつての抑留（捕虜）生活を思ひ出し、ソ連那（ソヴィエット社会主義共和国連那）を骨がらみにしてゐるマルクス・レーニズムに思ひを馳せたのは、平成三年（一九九二）三月のことであつた。

それからは、前にも増してソ連関係のニュースに敏感になり、新聞記事も目に触れるものは必ず切り抜いて手もとに保存するやうになつた。いま手許には、ソ連の変貌Ⅰ（昭和63〜平成1）、同Ⅱ（平成2）、ソ連の崩壊（平成3）、CISの動向（平成4）がある。

平成三年（一九九二）は、新年に「ゴ大統領、改革路線揺り戻し、強権で連邦維持」（1・31朝日）、「独立願望・連邦の危機」（2・17信濃毎日）、「ソ連経済さらに悪化」（3・9読売）、「6共和国の離脱権承認、共同宣言、エリツイン氏が説明」（4・27読売）、「エリツイン氏、大統領令で共産党活動禁止へ、ロシア内の軍やKGB」（6・21読売）、「ソ連経済改革案、9共和国と合意、ゴ大統領サミットへ足場」（7・10信毎）、「エリツイン大

統領就任、党中央支配を否定、大胆な民主化へ改革」(7・11信毎)、「ロシア共産党分裂、改革派が新党創立を決意」(8・4信毎)、「党活動禁止のロシア大統領令発効、共産党の妨害に警告、軍は断固拒否(アフロメーエフ元師)」(8・6読売)とつづき、このあと八月十九日と二十三日のクーデターとなるのである。

ホワイトハウス(ロシア共和国大統領役所)の前で、戦車の上に立ちはだかつて演説するエリツイン大統領、これを取りまく大統領派の市民、特に若者たち、——いっどこでエリツイン派になったのであらうか。モスクワから送られる映像にわたしも釘づけになったことであつた。

次の日か、次の次の日か、クリミヤの別荘から空港に着いたゴルバチョフの、着のみ着のままの、やつれた姿、とぎれとぎれの発音。かれは、このクーデター(未遂に終わったのであるが)にどこまでかかづらつてゐたのか、いまもってわからぬ奇怪さ。

かくて、この年の暮、ゴルバチョフ・エリツイン会談で、ソ連は、六十九年の歴史を閉ぢることになつたのであつた。

わたくしが、昭和二十年(一九四五)の年の暮、ソ連に輸送され、最初ロシア共和国タ

ンボフ州ラーダ、ついでタタール自治共和国エラブカ、ついで昭和二十三年（一九四八）秋、シベリアのハバロフスクに輸送され、そこで一年有半、ただ帰国（タモイ）の日のみを念じて暮らしてゐたころ、この強固な城塞のやうな国が姿を消すやうなことがあらうなどとは、つひぞ思ったこともなかつたのである。

○

個々の新聞記事といふものは、映画のフィルムのも、精々数十コマのやうなもので、連続した事象の変化や発展を見ることができない。たとへば、エリツイン大統領が、クーデター鎮圧のためと覺しい戦車のとり巻く中で、自らも戦車の上になつて演説するのを、仲間意識でこれを護りながら、聞き入る群集はどのやうにして発生したのか、かれの人氣はどのやうにして養はれたのかを、ビビットに表現することは、新聞ではまづ不可能である。

さういふ意味で、最近のソ連の社会状況を知る上で大いに役立ったのは、本年（一九九二）の三月に出版されたばかりの、松浦信子氏の『女の見た終末ソ連』（岩波書店・同時代ライブラリー99）である。著者は、夫君が民放テレビのモスクワ支局に赴任するに従つてモスクワに来て、幸ひにもソ連側の記者章を与へられ、事件の第一線において取材する

権利を得て、活躍するのである。

記事は、一九八九年（平成元年）五月より九一年（平成三年）十二月に到つてゐる。一八八〇年代の中頃より始まったゴルバチョフのペレストロイカやグラスノスチが共産社会にもゆきわたり、たとへばソ連史上初めてミスコン（美人コンテスト）が行はれたのは一九八八年で、しかもその主催者は、ソ連の若者にとつて登竜門とされてゐる共産青年同盟（コムソモール）で、これもペレストロイカのおかげを蒙つてゐると著者はいふ。

○

一九九一年（平成三年）七月十日、先に六月のソ連ロシア共和国大統領選挙に当選したエリツイン共和国最高会議議長は、クレムリン大会官殿で、大統領就任式を行った。

松浦信子氏の前掲『女の見た終末ソ連』中の「ロシア大統領エリツイン誕生」の記事によると、――

宣誓したエリツインに対して、ロシア正教の最高位者アレクシー二世総主教が連邦大統領ゴルバチョフに先じて、まず祝福演説を行った。ミサのときに着るきらびやかな祭服ではなく、平素の黒い僧服であつたが、総主教はエリツインと同じように中央の赤

いカーペットを踏んで舞台上った。彼の祝辞は堂々たる宗教的説教で、会場を圧倒した。

それだけではない。演説を終えた総主教は舞台中央でエリツインと握手したあと、結婚するカップルや出征する兵士にするように、エリツインに対し大きく十字を切ったのだ。国の議会において、代議員の目前で宗教界代表が宗教的行為を行ったが、これこそ革命後初めての、ロシアの今後を象徴する見逃すわけにいかない歴史的瞬間だった。

と記してゐる。そのあとの就任演説については、――

エリツインの就任演説はわかりやすかった。「いまの私の心境を言葉で表わすことはとてもできない」と、共産党の指導者にはない型破りの正直な告白から、彼は始めた。

「この国では長いあいだ人間の価値より国家の利益が上におかれていた。他の文明国に比べ、国力は民の幸福によって計られるという原則に気づくのが遅かった。しかしロシア国民はいま、大統領制を選択しただけでなく、国のシステムが人間の尊厳にもとづいたものとなることを選択した。私は神でも君主でも魔法使いでもない。同胞から大きな権力を委託された一市民だ。困難なときにあたり、良心の自由と公開性とを法治主義に



もとづく抜本的民主化を、わが国の方針としたい。」

エリツインは、ロシアの帝國的野望を否定し「文明国として世界共同体に参加する」と強調した。これは世界全般に向けての発言であると同時に、ロシアの近隣共和国を意識したアピールと考えられる。過去の領土拡張主義やロシア言語文化の押しつけを伴う帝国支配を繰り返さない約束だ。さらにエリツインはロシアにおいては宗教のしめる役割が重要であるとも指摘した。

いまここに、右のやうなエリツインの就任演説について長く引用したのは、わが日本もいま、目前に四島返還要求の問題をかかへてみて、エリツインの思想、考へ方が大いにこれに関係すると考へられるからである。

共産主義国家たることを示すソ連（ソヴィエツト社会主義共和国連邦）の名が、その実体とともに消滅するのが、このあと数ヶ月後のことであるが、このロシア共和国大統領の就任式が、ロシアの名の復活といひ、ギリシア正教最高聖職の祝福儀式といひ、何やら旧ロシア皇帝の即位式を思はせるのである。

なほこの就任式で行はれたアレクシー二世総主教の演説は、抽象的な言ひ方ではある



が、六十九年にわたるソ連共産主義政治が、人心に与へた凄じい破壊のさまを述べてゐるので、これもやや長文であるが掲げたい。(前掲書による)

あなたがこれから責任をとる国ロシアは、七〇年の重い病で精神を破壊された国だ、外から強いられた国家体制が内的統一をうちこわし、人々は三代代にわたつていかなる欲求も労働能力も殺され、精神活動をせぬよう、ものを考えぬよう、祈らぬよう、真理の探求をせぬよう、命じられた。イニシアチブなしに労働すること―これこそいまの社会だがそこから脱出しようともがいてゐる生き方だ―を余儀なくされ、国は経済的にも破産した。今世紀初めに生きていた人々といまの国民はもう同じでない。

宗教者として私は言う、国民の心には邪悪が住みついていると。

人間の魂を癒すことこそもっと難しい。

ロシアの共産主義者たちは言った。「悪かったのは帝国ロシアの政治体制だ。美しい社会が到来すればすべては解決する。我々は新しい人種を作り出すのだ。」

結果はどうだったか。人間性からの逸脱と社会墮落。その真の原因がどこにあるのかを理解する能力は奪われた。

ボリス・ニコラエヴィチ、寛容と智慧があなたの上につねにありますように！ あなたの直接の政敵だけではなく全ロシアをも、寛容の眼で見るように。我々の社会は深く病んでおり、一晩で、いやそれどころか五〇〇日でさえ、完治することはできない。長く苦しい試練を経験した国民は、理解と愛と寛容を必要としているのだ。（後略）

これに対する著者のこの演舌に対するエリツイン反応の予想も参考になるので、つけ加へたい。

エリツインは教会とどうつきあい、どこで一線を引くか。彼に与えられた課題は、民主主義と民族主義を均衡させ、革命で一度死んだロシアを復活させるといふ、矛盾をはらんだ難題だ。自伝『告白』を読むと、涙もろいところがある反面、また生来のおつむじ曲り屋であるエリツイン個人は、既存の教会にきわめて醒めた目を持っていることがわかる。国民の精神的立ち直りの中心的役割を教会に期待しつつも、同時に教会批判を許す複数主義・民主主義を、エリツインの率いる新ロシアは今後どこまで社会に根づかせることができるだろうか。

ソ連の共産主義態勢の中で、数十年の積み重ねによってできた特権階級のノイメンクラッティアトップたちの最後のあがきにも似た、一九九一年八月十九日～二十三日のクーデターが、エリツインを中核とする民主的改革派と一般庶民によって挫折させられた経過は、やはり『女の見た終末ソ連』の「熱い三日間」にヴィヴィットに精細に述べられてゐる。

クーデター派の動きは乏しいが、エリツイン派は、四十名に及ぶ政治家・軍人・各種団体役員などが、登場し、主張し、エリツイン派を護るのである。中にもエリツインが育ててきたと覚しい民主派や、「アフガンツイ（アフガン戦争出征者）がコマンダーであるかぎり、決して自国の兵士を撃たない、これはアフガンの地獄を経験した者の共通心理だ」と言つてクーデター派による戦車の前に立ちはだかるアフガン戦争従軍兵士全国連盟員たち、また長年共産態勢下政下にこれまた地獄を見てきた一般民衆（特に年輩の女性たち）も、出動してきた兵らに身を挺して話しかけ、発砲を控へさせたのであった。

幸ひにも計画杜撰で、見通しも決断力もなく、武力行使も不徹底だったクーデターであり、これに対するにエリツイン以下指導部の、群集のただ中に入つて所信を披瀝する勇氣と、これに応じた庶民の団結力によって危機を脱したのであった。若しこのときロシア共

和国側が崩れたならば、ソ連共産態勢の暗黒状況は、なほ何年かは続いたことであらう。

やがてこの年十二月、スラブ三国、ロシア・ウクライナ・ベラルーシによって独立国家共同体（CIS）が結成され、ここに一九一七年十一月結成されたソビエト社会主義共和国連邦は、その成立以来六十九年にしてつひに消滅する運命を迎へるのである。

このソ連邦が由つてもつて立ったマルクス・レーニズムは、大正期より昭和にかけて、わが日本の学界思想界を席捲し、特に青年学生に影響し、その前途生涯を誤らしめた事例は、大正四年（一九一五）生まれの筆者の周辺にも尠くないのである。

このソ連の壊滅といふ現前の事件をもつてしても、いまなほこれをマルキンズムの誤用悪用と強弁しかねない頭腦の存在さへ予想されるほどに日本の学会は汚染されてゐるのである。

前記ロシア共和国クーデター騒乱のとき、経済学者で、エリツインの実質的指導者となつてゐたシャターリンは、かつて、「レーニンは犯罪者だ。ソ連共産主義ほど多くの自国民を人殺しした支配制度はない」と言つて、そのとき除名処分を受けた、と筆者は記してゐる。

ソ連崩壊は、マルクス・レーニズムの巨大にして凄惨な実験を通して、その本質を証明したと言ひ得るのである。

## (三) C I S ・ ロシアの出現と日本

ソルジェニーツィンは、その著『甦れ、わがロシアよ』（木村浩訳）において、一九九〇年、「ロシアとは何であるか」の項で、

さて、私の見解では、今ただちに一声で、しかも明確なかたちで、次のごとく宣言すべきである。すなわちバルト三国（注・エストニア・ラトビア・リトアニア）、外コーカサスの三国（グルジア・アルメニア・アゼルバイジャン）中央アジアの四共和国（タジク・キルギス・ウズベク・カザフの各共和国）、さらにルーマニアとの統一を求めているならばモルダビアを含む十一共和国を、間違いなく、しかもあと戻りしないように分離すると宣言することである。

さらに、このあと、――

さて、この十二の民族を差し引けば、古代からの呼び名であるルーシと呼べるような土地が残ることになる（「ルースキー」（注・ロシア人）といふ言葉は、何世紀にもわた

つて小ロシア人と大ロシア人と白ロシア人を指して使はれてきた)。あるいは、この土地をロシア（十八世紀からの名称）あるいは、より正確に今はロシア連邦と呼ぶことができる。

そして、このあと「大ロシア人への言葉」では、最初に、

すでに今世紀の初頭に、わが国の偉大な政治家であったS・E・クルイジャノフスキは次のごとく予言していた。「本来のロシアには、周辺民族を同化するだけの文化的な力も精神的な力もない。それはロシアの民族的中核を弱めるものである。」  
以下、所要の部分を摘記すれば、――

今や目覚めようとしているロシアの民族意識が多くの場合、大国的な思考、帝国のまやかしの虜とりことなつて、本来ありもしない大げさな「ソビエト愛国主義」を共産主義者たちから受けつぎ、「偉大なソビエト大国」を誇りに思っているのを見ると、私は憂慮にたえない。

今やわれわれはきつぱりとした決断を迫られている。すなわち、誰よりもまずわれわれを死に追いこんでいる帝国を選ぶか、それともわが民族の精神的・肉体的救済を選ぶ

か、そのいずれかである。

われわれが努力しなければならぬことは、この大国を広くすることではなく、その残った部分の民族精神を高めることである。一見犠牲にみえる十二の共和国を切り離すことによって、ロシアはかえってその貴重な内部発展のためにみずからを解放し、自身に注意を払い、自分自身に再会することができるのである。いや、今日のような民族議会の状態のなかで、はたしてロシア文化の保存と発展を期待することができるだろうか。

『われわれはロシア人であることを誇りに思う』『われわれは果てしない祖国を誇りに思う』『われわれは……を誇りに思う』といったせりふをおうむ返しに繰り返すことをやめるべきである。われわれはこれらすべてを誇りに思い、しかもそれが当然だと考えているうちに、わが国民は一九一七年（もっとも広くいえば一九一五年から一九三二年まで）の精神的な破滅に陥ってしまったことを理解しなければならぬのだ。

われわれは「誇りに思ったり」他人の生命いのちに手をかけたりすることをやめて、自国民が重い病いにあえいでいることを率直に認め、その回復のために、またそのための知性



の働きを神に祈らなければならぬのである。

さらに、ソルジェニーツィンは、「ウクライナ人と白ロシア人への言葉」として次のやうに言ふ――

私はウクライナ人に対しても、白ロシア人に対しても、部外者としてではなく、同胞として呼びかけるものである。

それにしても、わが民族が三つに枝分かれしたのは、あの蒙古来襲というおそろしい災難のためと、ポーランドの植民地になったためである。

共産主義とは、ロシア人もウクライナ人も一九一八年から非常委員会チエ・エ・カ（注、ソ連秘密警察の名称。のち国家保安部ヤイ・ベ・ウ、さらに国家保安委員会カシ・ゲ・ベ・ウとなる）の監獄の中でわが身で体験した神話である。その神話が、一九二一年から二二年にかけて、ボルガ地方では種蒔き用の穀物までも供出させ、ロシアの二十九県を干ばつにし、多くの人命を奪った飢餓を引き起こした。こうして、その同じ神話が、裏切るようなかたちで、一九三二年から三三年にかけては、ウクライナで同じような容赦ない飢餓を引き起こしたのである。このようにわれわれはともに共産主義たちから鞭打ちと銃殺を伴った農業集団化を経験さ

せられてきたが、この血のにじむ苦悩の体験によってわれわれは結ばれているといえないだろうか。

もちろん、もしウクライナ民族が実際に分離を望むなら、それを無理に抑えることは誰もできない。地元の住民は自分たちの地方、自分たちの州の運命を決めることができる。

以上述べてきたことは、そのまま白ロシアにも当てはまることである。

最後に一言。われわれは、出世主義者たちやソビエト体制の愚かな連中によって引き起こされたチェルノブイリ原発の大惨事に対して、白ロシアとウクライナにふかく謝罪し、できるかぎりのことをして、事態の改善に努めなければならない。

○

右のソルジェニーツインのソ連改革の意見は、共感を禁じえないところであるが、ソ連のその後の動向を見ていくと、先づバルト三国は、一九九一年九月、独立を承認され、十二月、スラブ三共和国は、それぞれ分離独立の上、C I S（独立国家共同体）を結成。こ

ここに一九二二年以来のソ連は事実上解体され、また一方、ソルジェニーツインが即時即刻分離を宣言すべきだと奨揚した小共和国は、アルメニアとアゼルバイジャンが戦闘状態にあり、その他の共和国は、本来の人種にその後次第にロシア人が定住するに到り、独立か C I S 従属かの紛争が絶えず、新たなバルカン戦争の危機をはらんでゐる。

一方、C I S の紐帯もゆるく不安定で、かつてソ連書記長として、スターリンが、右のソルジェニーツインの文にあるやうに、全国的な凶作に際して、ウクライナに強制的な穀物供出を命じ、何百万といふ餓死者を出したやうな絶対的命令権を行使することは、到底不可能になつたのである。

C I S 各国が、これから行なふべき政策のうち、最優先課題は、言ふまでもなく経済の再建であらう。生産部門における産軍複合体解体のごときは早晩解決を要する難題の一つであるが、現在ではむしろこれと妥協し温存するがごとくである。

わたしくの抑留体験からして、先づ気にかかり思ひつく要改革の第一は、農業生産の自由化、つまり自作農の全面的創設である。

旧ソ連態勢から引きついでゐる C I S における農業生産の非能率かつ非人道性は、言ふ

までもなく、コルホーズ（集団農場）・ソフホーズ（国営農場）制度にある。

公けの農場用地の外に、個人に許されてゐる自留地は、全農地の3%に過ぎぬが、そこで生産される野菜や家畜などは、国の全需要の四十数%をまかなつてゐるといふ統計がある。いかに公営農場が非能率であるかがわかるのである。

わたしもかつてソ連抑留中、一九四六年の春かと思ふが、親しかった通訳の臼杵喝郎君とあるコルホーズにいったことがある。数十人の、若者のみない集団が就業中のはずなのに、農場近くの丘の下に固まって談笑してゐた。そのうちに見張りに立ってゐたと覺しい一人が飛んできて合図をすると、お休み連中は一斉に立ってかいがいしく仕事を始めた。

すると間もなく農場の幹部らしい人物がやってきて一同の仕事ぶりを見た上で、満足さうに去つてゆく。姿が見えなくなると、一人の男が何とか言ふと、一同はまたさつきと仕事を止めて集まつてきてもとのやうにおしゃべりを始める。わたしはあつけにとられて臼杵君に、あの男はさつき何と言つたのかと聞くと、にやりと笑つて「『わが敵は去れり』と言つたんだ。」と言ふ。

ソ連における農民が、今日のやうな集団農場において労働意欲を失ない不本意な逼塞生

活をせざるを得ぬやうになつた経過については、故山本勝市博士の著『計画経済の根本問題』（昭和十四年三月刊）中「共產治下に於けるロシア農民の生活」に詳しい。

農産物においても、市場価格を無視して、あるいは市場価格を抹殺した組織において強制的な生産を行ふことがいかに悲惨な結果を招くものであるかを、この書はソ連の集団農場の歴史を通して実証してゐるのである。

一九二八年十月、五ヶ年間の経済建設計画に当り、その主目的の工業化のための資本に当てるため農産物の輸出を考へ、そのため富農を倒し、機械化による生産力の増強を計るといふ一石二鳥を目標にして、一九二九—三〇年冬にかけて、二万五千人の若い党员と出先の官憲を使って、一斉に襲はしめ、数十万の家族をクラークとして処分したのであった。その総指揮をとつたのはスターリンであつた。

一九三二年、即ち五ヶ年計画の最終年度に当り、ロシア農業の集団化強行は、農民の反抗によるサボタージュを招き、はげしい食糧難となつて現れ、約五百万の餓死者を出した。

前記の、わたしが見たコルホーズにおけるサボタージュと、いはゆる特権階級（ソビエト階級）に属する

コルホーズ管理員の姿は、集団農場が出来て十数年後、独ソ戦争従軍兵士ははまだ占領地にあつて帰らぬコルホーズの、荒れはてた風景の一齣ひとまじであつた。

ソ連崩壊の今日、C I S は先づもつてこの農業制度の刷新改革が必要と思はれるけれども、当事者始めジャーナリズムの紙面にも、その声の聞かれぬのは、いかなる事情であらうかと思ふのである。

## ○

ソ連共産党の書記長であつたスターリンは、一九四五年（昭和二十年）九月二日、対日戦勝を祝ふ花火の下で、「一九〇四年の日露戦争の敗北はわが国に汚点を残した。わが国民は日本が撃破され、汚点が拭われる日がくるのを信じて待っていた。遂にその日が到来した」と演説した。グルジア人のスターリンにとつても、「ソ連」の対日攻撃は「露日戦争」であり、「ソ連＝ロシア」であつた。

右は『戦争の21世紀・蘇よみがえるロシア帝国』（中川八洋著一九九二・六・一発行）に寄せた、曾野明氏（戦後初代の外務省ソ連担当課長・元西ドイツ駐劄ちゅうけんさつ大使）の序文にある一節

である。

わたくしも、前々から右の趣旨のスターリンのことは聞いてゐて、極めて不審の思ひをしてゐたのである。

その理由は、日露戦争の敵方当事者はロマノフ王朝であり、『ソビエト大百科辞典（一九五八年版）』に「ニコライ二世はペトログラードの労働者の要求により（一九一七年）三月八日に逮捕された。ウラル州ソビエトの決定により、ニコライ二世とその家族員は射殺された」（パーヴェル・バガヌツイ著『ロシア皇帝一家暗殺の真相』進藤義彦訳）とある通り、スターリンも関係ある革命党の一味がロシア王朝を倒したのだから、敵の敵は味方といふわれわれの通念をよそに、日露戦争敗戦を「汚点」と言ふのである。そこで曾野氏は、ロシア人ならぬグルジア人スターリンも対日戦争ではロシア人となり、王朝を倒したボルシェビキの一員たるかれも、日露戦争敗戦の汚点が拭はれたと述べたと言ふのである。

ついで、曾野氏は言ふ――

ロシアは、「冷戦の敗戦国」にもかかわらず、今後も「核大国」として残り、大規模



な軍備を保有し続けそうである。そのうえ、もともとロシアは鉱産資源が豊富で、農産物の輸出国でもあった。そのロシアでは今後かなり長く政治的、経済的、民族的混乱が続くことは避けられないが、いずれは帝政末期（十月革命初期）と同じように、ロシア人を中核にスラブ民族が結集し、カフカスと中央アジアの諸民族の多くを従えた「大ロシア」（エリツイン）が復活するであろう。しかも、そのロシアでは西歐的な民主主義が育ち難いので、強権的、民族主義的で膨張力の強い前近代的国家が存在するものと覚悟せねばなるまい。——

と記してゐる。

わたくしがソ連抑留（捕虜）およそ五年のあと、一九五〇（昭和二五）年一月日本に帰還してからもはや四十一年経過した一九九一（平成三）年の年の暮、わたしにとつてもあつといふ間に、ソ連は崩壊しC I Sといふ名の国家共同体となった。

それこそ葦あしの髄から天井をのぞくやうな体験しか持ちえなかった、私のその追憶から、集中豪雨を浴びたやうなソ連の変動の実態を捉へようと苦闘を始めてみた今年（平成四年）六月の始め、手許もとに集めた数種の出版物の中に、六月一日第一刷発行といふ、前記の



『戦争の21世紀・蘇えるロシア帝国』（中川八洋著）にめぐり遭へたのは、まこと幸運なことであった。

この書は、ロシアをモンゴルの植民地から解放したイヴァン三世以下のリューリク王朝を第一ロシア帝国前期とし、ついでロマノフ王をその後期と呼び、レーニン以下のソ連を暗黒王朝と名づけて第二ロシア帝国とし、一九九一年末に今度できたエリツィン暫定王朝を第三ロシア帝国誕生と言ひ、レーニン以後七十年の、まさに帝国主義的侵略膨張の歴史を、それこそパノラマのごとく全面的に、快刀乱麻を断つごとく展開するのである。

曾野氏は「前近代的国家が存続するものと覚悟」せよと述べたあと、つづいて「旧ソ連に見られた巧妙で強引な外交術も、もとはといえばロシア社会で育ったものであった。現に全世界も日本も、旧ソ連時代と同じく、おどし、だまし、すかし、ごまかし、といったロシア的手法に振り回されている。ロシア人は『冷戦』の達人で、いつまでも続ける。」と述べてゐる。

わたしくの、檻の中の、<sup>た</sup>葦の髄からの観測も、この先達の言のとほりで、これをわたしくし流の四字の漢語で表現すれば、ソ連（ロシア）はあらゆる「権謀術数」を用ひて領土財

産を奪ひ、奪った上これを「貪欲搾取」する。凡そ事をなさんとするときの「宣伝謀略」にかけてはソ連人は天才ではないかと、心底痛感するのである。

○

ソ連（ロシア）が、その政体や国是にも拘はらず、その本性が何であるかをつとに明示したのは、畏友たりし故倉前盛通氏であったことを、このごろ改めてその著『悪の論理』（昭和52年10月初版発行）で知り、生前の、氏の透徹せる識見に今更のやうに畏敬を覚えたことであつた。

その著の「東ローマ帝国の継承国家、ロシア」の項に、「ソ連はロシアである」と結語を示して次のやうに述べてゐる——

最近の北洋におけるソ連の傲慢無礼（筆者注、昭和52年ごろの状況）は、今さらのやうに日本国民の憤激をかつてゐる。いったい、ソ連は何をたくらんで、あのような一方的な高圧的態度を示すのであろうかという疑問は、ふつうの日本人なら誰しも抱くところであらう。

われわれ日本人が、今日の事態に直面して、まずやらなければならぬことは、簡単

な事実の確認である。

それは、「ソ連はいぜんロシアであり、その遺伝情報は少しも変わっていない。十月革命によってソ連と名を変えたからといって、別な国が生れたなどと毛頭考えるべきではない」ということである。

欧米の新聞はソ連のことを、常に「ルシア」と書いている。ソビエト・ユニオンなどと書いているような迂闊うかつな新聞はほとんどない。ここにヨーロッパ人やアメリカ人のロシア認識と日本人の対ソ認識の差がはつきりとあらわれている。連中はあくまで「ルスキー（ロシア人）」なのであって、「ソ連人」ではないのである。（筆者注——前記『蘇えるロシア』でも著者は全く同じことを述べてゐる）

現代中国が、いぜん『三国志』の世界であることも、毛沢東死後の江青逮捕騒ぎをみて、心ある日本人は明確にさつたはずである。政治革命ぐらいで人間の本质が簡単に変わるものではない。人間の持っている動物的行動様式は、一種の条件反対のようなもので、長い文化の伝統に根ざしたものであるから、政治的スローガンをいくら掲げてみても、エモーショナルな人間の情動にまでは容易に達しないものである。

ソ連は、あくまで「ロシア」であるという徹底した認識によって、対ロシア政策を長期的に講じておれば、今日のような苦境には陥らずにすんだと思われる。

なほ、氏はつづいて言ふ――

東ローマ教会系のギリシャ正教、もしくはロシア正教のほうは、西ローマ教会のような宗教改革を経験していない。とくにロシアは、宗教改革も文芸復興も、産業革命も、議会制度も、近代社会も、いっさい経験していない。中世的というより、古代帝王制ともいふべき「ツアー制」が二十世紀のはじめまで読いていたのである。そこに一九一七年の十月革命が起こり、現在のソ連という名の新しい「ロシア帝国」が生まれたのである。

それゆえ、「キリスト教徒と非キリスト教徒との距離は無限である。」（筆者注、非キリスト教徒は、ほとんど動物と同じ低位の存在であるとの意）というドグマがいちばん強く残っていたのがロシアであり、ユダヤ人迫害もロシアが一番凄かった。革命以後は、「マルクス主義者と非マルクス主義者の距離は無限である」というドグマにすりかえられた。スターリンが極北のラーゲリ（強制収容所）で二千万人を粛正したのも、こ

のドグマに立つてのことであり、彼らはこのような大量虐殺に何ら良心の苛責を感じないのかもしれない。

いま、ロシア人はソ連の崩壊によって、マルキシズムの衣をぬいだが、しかしながら今度は、特に政治家はマルキシズムの鉄火の中で鍛<sup>きた</sup>へられた手練<sup>れん</sup>手管<sup>てくだ</sup>の、いはゆる海千山千のロシア人として現れて来るであらう。

○

前記『蘇えるロシア帝国』の記事は、われわれの常識を超える、ソ連人（＝ロシア人）の習性<sup>しせい</sup>性<sup>せい</sup>行<sup>こう</sup>を挙げてわれわれを驚かすのであるが、その一つに「債務不履行とロシア伝統」の項がある。その最初の部分を摘記すると、――

この「感謝しない」「恩は仇で返す」「ロシア文化（風土）と関連するもう一つの文化（風土）として、われわれが知るべきロシアの特性は、債務履行といふものがロシア人にとって死ぬより辛いということである。

つまり、ロシア人は債務を履行しないために、あらゆる卑劣な策を弄することを恥としない。ロシア人には「恥」の概念などまったくなく、他国（他民族）のものを合法で

あれ非合法であれ、ひたすら奪うことに全智全能をかたむけ、同時にこの奪ったものをいかにして返済（返還）をしないで済むかに全力を投入する。

ロシア（ソ連）の債務不履行の例を少しあげよう。ソ連は一九一七年に継承したロシア帝国の債務をほぼすべて履行しなかったし、そればかりかソ連自身が負ったその巨額の債務すらうやむやにしてしまった。

第二次大戦中に、レンド・リース法（武器貸与法）によって米国から援助を受けた戦車一万一千輛、航空機一万九千機の代はほとんど返済せず踏み倒している。なほ、これらの援助について、後年ソ連は、これらがなくともソ連はドイツに勝利できたのであって、余計なお世話だったといわんばかりの言葉をしばしば吐いている。

日本政府も第一次世界大戦中に、日本の同盟国であったロシアに三億八千万も融資したが、結局一円も戻ってはこなかった。外交的にはソ連はロシア帝国を継承しているにもかかわらず、その債務を頭として履行しなかった。

右のレンド・リース法の一部をなすものと思はれるのであるが、われわれ関東軍の将兵がソ連国内に連行輸送され、やがてラーゲリ（収容所）外の作業に従事させられるやうに

なつた時、われわれの目を驚かしたのは、アメリカ製といふ巨大な六輪車輛の貨物自動車の大量な存在であつた。

われわれ捕虜作業隊は、これらのトラックを仰ぎ見ながら、ソ連ではとてもこれだけの輸送車を大量に作ることはできない、それにしてもアメリカは利口で、部品は渡さなかつたやうだから、一旦故障を起せば、たちまちこの車も使へなくなるに違ひない、などと陰口をきいてうさをはらしてゐた。實際、何のためか、この巨大な車がしばしば野末などに放置してゐるのを見たことであつた。

つづいて筆者は言ふ――

ところが、ロシア人は債権のほうについては、これを放棄することはない。たとえば、一九〇五年（筆者注、明治38年、日露戦争中）に日本の対島沖で沈んだロシアのナヒーモア号（約八千トン）のプラチナ塊について、まだその引き揚げがなされてもいなく、うちにはソ連は、大声でその返還を主張した（一九八〇年一〇月）。わざわざ駐日ソ連代理大使が外務省の欧亜局長を訪ねて「ソ連に所有の権利がある」と、口頭ではあつたが公式に申し入れたのである。



○  
日本とロシアとは、これから、先づ四島返還交渉を始めとして長いつきあひを持たねばならない時に当って、先づ第一に考へねばならぬことは、相互に相手の国民性、氣質を知ることではなからうか。と言つてもロシア民族に日本民族の特性を知れといふことは、当面不可能であるので、日本の正しい要求を通すためにも、日本の方から彼らロシア民族の性行をできるだけ理解することを必要とするであらうと思はれる。

本項においていままで述べたことも、これから記すことも、そのための極めて徹々たる提言に過ぎないが、あへて思ひつきを述べることにするのである。

その第一は、先づ風土による氣質の相異である。そのために、最初に自らを知るためにわれら日本人の氣質を、和辻哲郎博士の『風土』より引用概括すれば、――

（日本人の属する）モンスーンの受容性は日本の人間に於て極めて特殊な形態を取る。第一にそれは熱帯的・寒帯的である。即ち単に熱帯的な、単調な感情の横溢でもなければ、また単に寒帯的な、単調な感情の持続性でもなくして豊富に流れ出でつつ変化に於て静かに持久する感情である。四季折々の季節の変化が著しいやうに、日本の人間



の受容性は調子の早い移り変りを要求する。だからそれは大陸的な落ちつきを持たないと共に、甚だしく活発であり、敏感である。活発敏感であるが故に疲れ易く持久性を持たない。

右のような風土による影響の他に、対外的な民族精神形成がある。

日本民族は、東海に浮かぶ島国として、第二次大戦あと数年アメリカ合衆国の支配を受けたことがあるが、それまでかつて異民族の占領統治を経験せず、米国の施政も、皇室への尊重ぶりと言ひ、敗戦後の食糧の供給と言ひ、先づは敗戦国として幸運と感ずべき望外の処置であつた。(極東軍事裁判などについては、国民として将来に期すべき顧慮を内包するものであるが)

これに対してヨーロッパ・ロシアの、その風土的性格については、「第二編 日本の風土・自然と文化」の中でも折々触れるところであるが、故和辻博士の言ふ牧場的風土でも、北緯45度より70度に至る地域で、モスクワ・カザン・サンクトペテルブルグ(レニングラード改称)などの都市はすべて北緯55度以北のいはば極北に近い地であることに注意する要がある。

その地の風土的特徴は、言ふまでもなく凡そ半年に及ぶ長い冬の季節と、ごく短い夏と、その間に挟まれる春と秋の、日本に比べれば、ゆたかな花鳥の賑はひを欠いた、文字どほり単なる中間期で、一年が過ぎるのである。

このやうな地帯で形成される気質は、ちやうどモンsoon型と対蹠的で、生活も感情も、単調な持続に耐へ、強度な持久力を發揮するのである。

この性格の上に加へられた民族的歴史的影響について、前記『蘇えるロシア帝国』より引用すれば――

「タタールの軛くびき」(注、一五〇年間にわたるモンゴル人による征服)のもとでの奴隷状況の二五〇年間の体験は、ロシア民族が正義と不正義(善悪)を区別する道徳的規範の根本をもつことが許されないことであるから、ロシア人の正義感が発達せず、正義・不正義の峻別を前提とする「法の支配」の土壤が育たなかった。考えられる将来において、ロシアが法治国家になる可能性が全くないのはこのゆえである。

これからのロシアにおいて法治主義が根本において拒否されるとすれば、ロシアの「民主化」はわれわれの一般通念上の民主主義とはまったく別のものである。

う。

さらにつづいて、——

新しいロシアに民主主義がこれからもうまく育つことがありえない理由のもう一つは、ロシア人の土着的な政治思想としての無政府主義アナキズムの強さであり、この無政府主義の裏返しとしての専制的体制の受容と許容が、これからも変りえぬほどの政治文化となっているからである。

これを要するに、ロシア人の風土による忍従性は、「タタールの軛」によって恒常化され、さらに土俗となって無政府主義の基磐を作りなしたと言へるであらう。

一方、マルクス・レーニズムの七十年間に鍛へられたソ連ロシア社会上層部の、処世的ひいては政治的権謀術数は、如上のやうな日本の風土的性格を持つ、お人よして長年月の忍従に堪へぬ日本人の、四島返還交渉から始まるさまざまな問題に対して、今後長らくわれらを翻弄して止むところを知らないと覚悟すべきを思ふのである。

○

幕末以降、わが日本はロシアとさまざまな交渉を重ねてきた。

いま年表を繰ってみれば、「文化三年（一八〇六）九月、ロシア人樺太に上陸、松前藩会所を襲う」「翌四年四月、ロシア人蝦夷に侵入、幕府、仙台会津二藩に命じ出兵」など見えて、また文化元年にはロシア使節レザノフが長崎に、嘉永六年（一八〇一）七月、使節プチャーチンが同じく長崎にきて通商を求め、幕府も安政五年（一八五八）オランダ・イギリスと共にロシアとも通商条約を結んでゐる。また明治新政府になってからその八年（一八七五）五月、ロシアと千島、樺太交換条約を結んでゐる。

ロシアとの交渉の最大なる事件は、言ふまでもなく、明治三十七、八年（一九〇四、〇五）の日露戦争であつた。乃木希典將軍とロシア軍ステッセル將軍との旅順港攻防戦は、つひに日本軍の勝利となり水師營の会見となるのであるが、戦後旅順敗戦の責めを負うて軍事裁判にかけられたステッセルの資金援助など、乃木將軍は熱心にこの敵將に対し友情を注いでゐる。ステッセルもこの乃木のかつての敵味方を超えた至誠に感謝したと言ふ。

戦費底について、これ以上の戦争続行は不可能といふ土壇場におけるポーツマスポーツマスの、小村寿太郎対ロシア代表ウイットとの交渉・談判も、困難を極め、ほとんど破談にならうとして、償金と樺太全讓渡案を日本側が諦める（半部あかしらのみの讓渡）といふ日本側の妥協によ

って辛うじて成立したのであった。

戦後、小村は駐英大使となり赴任してゐたが、明治四十一年七月、桂太郎内閣成立に際し外相親任を承知し、帰路、ロシアの首都バテルスブルグに赴き、駐露代理大使落合謙太郎の案内で、かつての談判相手ウイッテを訪問してゐる。

最近再読した『ポーツマスの旗』（吉村昭著）によれば、――

ウイッテはポーツマスから帰国後、首相に就任、憲法の制定につとめたが、皇帝に忌避されてわずか半年間で解任され、失意の状況にあつた。

かれは、小村を喜んで迎え入れた。

小村は、

「ポーツマスでは互いに祖国のために全力をつくしたが、全く夢のようだ。今は日露両国は友好国であり、嬉しく思っている」

と述べた。

ウイッテは、

「ポーツマス条約成立の時、世人は私が大成功したと言ひ、私自身もひそかに誇りをも

った。が、今では私を非難する者が多く、それに反してあなたは、罵声に包まれながらもようやく国民の理解を得られるようになっていて羨しい」  
と言って、外相就任を祝った。

小村が去る時、ウィツテは家の前に立って車が遠ざかるのを長い間見送っていた。――  
この小村寿太郎家は、寿太郎没後、長男欣一が侯爵を襲ったが、欣一逝いたのち弟捷治があとを嗣いだ。

日露戦争後三十有五年を経た昭和十五年（一九四〇）一月早々、わたくしは当時の満洲国東寧に入営することになり、この小村捷治侯爵に招かれて送別の宴に浴することになった。

当時伊藤述之氏（ポーランド公使、のちの内閣情報局総裁）が設けた日本学研究所（所長伊藤氏）で、小村侯爵はその顧問をされてゐた関係で、所員の一人であったわたたくを市ヶ谷の自宅に招いてくれたのであった。

そのとき、一献の間に、小村侯爵は、父君がポーツマスより帰朝して始めて参内したと

き、明治天皇より賜はったといふ、天皇ご自身作られた手芸品（たしかかぼちやの蓆へたを乾し固めて彫られた書の関帽印だったかと思ふ）を見せられた。正式な褒賞の前に陛下が特にその労をねぎらはれるときに賜はるものだと言はれた。その素材の極めて質素なことから、自ら手を下された作品を手づから賜はるといふご親情が身にしみたことであつた。帰りに、励ましのことばと共に、一葉の色紙を頂いた。

送宮脇君

梅近き宵

はなむけはたゞ

雨の声

庚辰春日 素風

この色紙は、それから五十年以上、わたしの古ぼけた土蔵の中に眠つてゐて、いまこの稿を草するとき目の前の机上にあり、満洲の野よりソ連の抑留へとつづいた入営の前の、東京最後の晩、さう、あの晩は雨だったかと、素風（捷治）先生の面影と温情を偲ぶのである。

（平成四年八月末日稿）



第一篇

わたくしにおける抑留体験



## (一) 敗戦捕虜日記抄

この歌稿・日記抄は、昭和二十二年（一九四七）晩秋、ソヴィエット連邦タタール自治共和国にあったエラブカ（カザン市の東方およそ一〇〇km、ボルガ河の支流カマ川沿岸の地。）日本軍将校捕虜収容所から帰還した、わたしと同村の田村博君が、32cm×40cmの方眼紙二枚と1/3にわたしが細書したものの（口絵写真参照）を、自製タバコ入れの二重底に秘して携行し、わが留守宅に届け置いてくれたものである。

わたしの帰国は、そのあと二年有余、昭和二十五年（一九五〇）の一月のことである。

この二枚と三分の一（裏表とも）に記した文字は凡そ三〇、〇〇〇字、原稿紙にして七五枚の分量である。「抄」とあるのは、原文が既に最小限の選択によってあるか

らである。

なお（注）とあるのは、読者の了解を助けるための、あとからの注記であるが、その他はすべて当時書かれたままの文字・記録である。

もとの記録は、昭和十六年よりの、短歌や俳句を主とした日記をも含んでゐるが、本稿では昭和二十年（間島敗戦前後）よりを収載した。

なほ本稿は、長い間、わたしの土蔵書庫の一隅に眠ってゐたのを、ずっとのち昭和五十七年（一九八二）八月、わたしの始めての創作集『邂逅』を出版するに当り、ふと思ひ出して、三十数年ぶりで活字にしたのである。

田村博君は、その後名古屋屋に出て、最近やうやく確め得たところでは、平成元年に病没された由である。生前、一言の御礼も申さず、このごろわが怠慢非礼について改めて後悔のほぞを噛みしめてゐるところである。

(注) 昭和十五年(一九四〇)一月、満洲国牡丹江省東寧の第四四七部隊(関東軍自動車第四連隊、東寧県河沿駐屯。)に入營したわたしは、その年九月、甲種幹部候補生となり、十二月東京目黒の陸軍自動車学校に入校した。同十六年六月、独ソ戦勃発を聞いて、いよいよ日本も、ひいては自己自身も多難ならんことを覚悟しつつ、同年七月自動車学校卒業、見習士官となって原隊に復帰した。

その後、わたしは、昭和十七年八月、初年兵教官を一期済ましたあと、東寧県河沿(かえん)の自動車連隊より牡丹江第一一部隊―第三軍司令部―参謀部へ後方班V付となり転属した。

昭和二十年(一九四五)

(間島敗戦前後)

(注) 昭和二十年、関東軍司令部は、関東軍の極端な兵力減少のため、防衛前線の収縮計画を樹て、牡丹江の第三軍司令部は間島省延吉へ、第五軍司令部を東安より牡丹江に移駐せしめた。これがため、前年ごろより第一線に近いところに在る軍需物資(食料・弾薬・燃料など)を予想対ソ防衛戦線の内側に偽装貯蔵する施設工事と一部の輸送蓄積が始められてみた。

# 参考專記係圖

— — — 國境  
+ + + 鐵道







八月初旬 張家店に於て

夏草の茂り重たきみ山路にもえさかりたり油とる火の

山深き板葺小屋に松根油煮出すかまどの赤々ともゆ

同時車中にて

ゆく旅路みだるゝ夏草風なびけ事なげなるにみ国の命はや

夏草の咲き揃ひたる日に風たちてあはたゞしき夏のすぎゆかむとす

(注) わたしも、司令部とともに、昭和二十年の五月、延吉に移り、もとの第二軍司令部の跡に入り、参謀部後方の仕事として、右の軍需物資の集積転換作業を担当してゐたのである。

八月八日

朝〇九三〇牡丹江著(注、延吉より)。大鉄牡(注、牡丹江)支部に連絡、軍人会館休憩。

一七〇〇発、一二八師団輜重隊見習士官と同行、二〇三〇穆稜(注、牡丹江東方50km)著。

分(注、第十六野戦貨物廠出張所)の現場下士官を集合、状況を聞く。

八月九日

○六〇〇、爆音、銃撃。ソ連の対日攻勢侵襲を知る。全力、大城廠輸送、特輸車の一つにて牡丹江急行。牡丹江神社参拝、昼食。一方司（注、第一方面軍司令部。当時の司令官失念。前司令官は山下奉文大将。）に連絡。夕刻「若松」（牡丹江の料亭）、つづいて九九〇、〇二〇〇出発（注、意味不詳）一四四八の家族列車なり。

八月十一日

偕行社泊。（注、第三軍司令部は、ソ連開戦とともに、臨時戦闘司令部を、延吉市内の偕行社に移した。）

八月十五日

正午停戦の大詔下る。ラヂオ感度不良、デマ放送と感ず。敵戦車、磨刀石（注、牡丹江東方二〇km）に入れりと。一二七師団の歩・砲の一部、夜間八道河方面より転進せしむべく、在間島の全車輛を集結、二一〇〇出発せしむ。

八月十六日

敵戦車、中坪（間島北方二〇軒）に入れりと。

八月十七日

万事終りぬ。行先のことわからず。加藤とわが官舎に寄り、みつ（注、妻）が心づくしのうどんを食ひて庁舎（注、この時はもとの司令部庁舎に移つてみた）にかへる。詰切となる。

八月十八日

夕方ラヂオ、「軍人に賜りたる勅語」放送。心いささか晴れぬ。日系市民を軍人官舎地帯に集結のため出張る。夕刻かへれば計画変更、司令部庁舎に収容す。

八月十九日

間島各部隊集結の処置、この宵殆んど眠らず。（注、一〇〇部隊は〇〇に集結、そこでソ連の

武装解除を受くべし」の命令起案伝達など。武装解除始る。

八月二十日

八木隊・杉本隊に赴き、プリゴール・ソ連少佐と交渉、両部隊現状のまま残留と決る。  
一五〇〇帰る。夜本庁舎明け渡し。司令官（注、軍司令官。村上啓作中将。）病院に灸するに  
ゆきて会見に間に合はず、敵将を怒らすと。

八月二十一日

早朝より支度、一五二六六（旧六四六）兵舎に移動す。

八月二十二日

下士官兵らを広瀬聯隊に移すと。引離さるゝかれらの健闘を祈るのみ。

八月二十三日

家族をふくめ宿舍の配当。後方（注、参謀部後方班）家族、第四宿舍に入る。大肚子川一同（注、前戦東寧の近くにあった某料亭の女子たち）働く。

#### 八月二十四日

炊事施設また配給方式等、次第に決まる。時折自ら食器洗滌。八道河部隊集結、河野参謀（注、後方主任参謀河野貞夫中佐）郭亮船口・勝関山（注、第一国境守備隊陣地、一部残留兵がゐた。）細川参謀（注、作战主任参謀細川直知中佐。）十里坪（注、延吉市東方六〇km）に出る。各々停戦徹底のため。

#### 八月二十五日

糧秣輸送の自動車獲得のため出でて果さず。（注、このころ既に一切の軍の物資はソ軍の手の中にあつた）洗濯みつにやらす。

#### 八月二十六日

旧杉山隊・八木隊に野菜とり。(注、旧六四六部隊に収容した軍人家族、また流入した日系人のための食糧。)朝陽川部隊家族到る。細川参謀、昨夜遅く帰る。

八月二十八日

河野参謀かへる。勝鬨山停戦を終へ、ノーボ・ゲルジョフカまでゆける由。斉藤大尉以下の奮闘を聞く。関東軍終焉の日なり。(注、のちにドキュメンタリ『邂逅』へ本篇(三)に記す。)

八月二十九日

広瀬聊隊(注、八月二十二日、下士官兵らを分離移動せしめた兵舎)の下士官兵らの給養粗悪あはれなる報しきりに到る。心痛かぎりなし。いかなる運命をたどりゆくか。かれらの宣伝にのせられて魂売りゆくことなきを祈らるゝや切なり。

九月二日

こゝ数日間人員の移動しきりて、東寧方面より四百料を行軍し足ひきずりて到るもの、乳幼児の死亡、市民にて街に出さるゝもの、悲喜紛擾極りぬ。

九月三日

夜ソ軍の戦勝祝賀会か、信号弾・照明弾しきりに打上げられたり。ソ兵酔うて唄ひあるらし。つくづくとわれらが身の上を思ふ。家族より差入れのにぎり飯貪り食ふ。

九月四日

花札苦勞して作りあぐ。午は集合、雨いささか落つ、人員点呼なり。屈辱の思ひ新たなり。夜二〇〇〇頃、全員営庭に集合、注意あり節度保ちて皇軍の威容落さず、内地に凱旋せんと。見渡す間島の風物、青紫色に夕映えて美し。ここにして時数旬を出でず、その境涯はまさに雲泥の差異あり、不思議に堪へざらんとす。

マックアーサー本部、宮城内に設置せらるべしと。まさに断腸の思ひあり。



九月十五日

ソ側の厚意により川辺にてシャワーを浴びぬ。誘導のソ軍少尉よき男の児、また女軍医大尉のあるあり、往復十軒、帰れば久方ぶりの散策に身心や、爽快なり。

九月十六日

第十六野貨（注、野戦貨物廠）より日本酒一本貰ひ来る。河野参謀以下集ひて飲む。夜不寝番、第四宿舎二番立。（注、当時ソ軍兵士、酔うて乱入し、婦女子を出せと脅迫する事例頻繁であつた。）三池田氏と女房にあひて話す。

九月十七日

親切なる衛兵司令、警備司令官、近日交代し、その交代者は俘虜に対し親切ならざるべしとの事にて、現任者のすゝめにより、終日マキ・野菜蒐集。官舎付近にゆく。荒廢して見る影なし。わが官舎にはソ軍将校住むらしき。野菜四四、マキ二三〇車到る。（注、当時自動車なく、すべて手押し荷車である。）

本日始めて電気つく。また夜七時（日本時間）、始めて電信隊にてラヂオをきく。感度必ずしも良好ならざれども、故国の声なつかし。

### 九月十八日

雨天。昨夜のラヂオ放送によれば、マックアーサー司令官、東京進駐の日なり、涙雨か。日本駐屯外国軍一八師、陸四〇万、海一〇万と。あゝ。

### 九月十九日

野菜とり、四〇車来る。

### 九月二十日

驟雨あり。夜、明月。

三十齡今年は配所の月にして

幽囚の窓に月ありて号泣す

九月二十二日

西村大尉の長女ゆき子ちゃん歿す。葬式に出る。夜、参謀室にアルコールあり、一時頃迄さわぐ、非難の声あり。

九月二十三日

市場の満人商人野菜持ちくる。家族全員移動ときまり、夕方荷物など片づけす。五〇〇名につき軍医一名と。幹部に対する不信。夜不寝番、自宿舎に立つ。

九月二十四日

家族出発す。一一三〇ゆきぬ。自動車輸送にて荷物も概ね捌けぬ。大肚子川の作業力たのもし。吉田准尉の一女歿、絃子といへり。

秋風落莫たりき。

日ソ軍、明月溝・茶条溝（注、延吉西方およそ五〇km）の間に尚戦ふと。一二七師広瀬参謀長ゆく。

九月二十五日

昨日運び残れる家族別れゆきて、営庭軍人のみ。些かわびし。ドイツ教会にゆきし家族いかにして飲み食ひあらん。

九月二十七日

(注ドイツ教会にいった妻より、便を求めての手紙。)

お元氣にてお暮しの事でございませうね。こちら河野様奥様、また後方家族と大肚子川の皆にて一部屋となり前の通りに暮してをります。久方ぶり教会に入つて昔の学窓時代を思ひかへしました。(注、妻は名古屋金城学院高等女学校卒。)

美しい庭園も毎日オシメの陳列と交りますが、散歩する時には尼様の姿も見受けられ、一時は実に安らかな気持ちになります。御腹の子供も元氣で、盛んに動いてをりますから御安心下さい。今のところ生れる気配もございませんが、万が一の事を思へば、貴男と別々です。名前の事が氣になります。何といたしたらよいでせうか。皆でお金を出し合つて、トマトの味も見ました。

以前から一度おたよりをと、宮川様(注、後方班同僚、宮川益夫中尉)の顔を見る毎に思

ひましたが、今日は思ひ切つてしたゝめました。今日もトマトがいただけさうです。後方一部屋だけですから、外の方には内緒にして下さいね。部屋は二階ですので、見晴らしは、なかなかよろしく、山もよく見えます。南京虫のみない夜を迎へることの出来るのは、何よりもうれしいことでございます。一日も早く内地に帰れるやうな工夫、お願い申し上げます。

妊婦であつても一番丈夫です。今更始めて身体の丈夫といふ事をしみじみ思ひました。あなたも最後まで、無事で丈夫で、何もいりませんから元気で内地へ帰って下さいね。私も何もいらなくなりました。最後まで子供と自分の身体をまもつて内地の土をふむつもりです。

では今日はこれまで、また書きませう。九月二十六日、今日は坊やの生まれ日です。出産予定日と共に私の誕生日です。何か不思議な気がします。

九月二十六日

みつより

十月八日

片山通訳来たり男子分娩、母子共に無事の報をきく。うれしともうれし。糧秣交付所より乾パン十七名分、魚肉缶若干貰ひくる。夜宴会せむとなり。夕刻、薪を家族宿舎に持ちゆきし機会をみて、急ぎゆく。産室にあり、始めて会ふ。猿の子に似てあらむと思ひしに、仲々愛くるし。うれし。大肚子川、後方家族に厄介かけたり。夜、参謀部一同、盛んに乾パンを食ひて祝しくれぬ。豚小屋・馬小屋（注、各班の宿舎を自嘲しての命名。）より祝儀くれぬ。十七名、馳走乏しけれど、集ひて祝す。現況にてこれよりの喜びなかるべし。昌太郎と命名す。

小春日に産声あげたり高らかに君が家つがむめぐし男の子は  
宮脇が世つぎ生れたり間島に直く生ひ立て強く生ひ立て

（阿久刀川大佐）

（武田中佐）

十月十四日

ふらりと東一病（竜井病院）に芹沢をたづね、彼より英書の童話を借りる。パンの屋敷、馳走となりてかへる。收容所長より日課制限、其の他の禁制事項達せらる。起床七時、朝夕の散歩時間を除き概ね監禁同様なり。営庭も有刺鉄線にて区劃せられ、全く捕虜

生活の様式備れりといふべし。共産党志賀某、天皇政治否認の言説はく旨、ニュースにて聞く。前途を思へば暗きかな。

十月十六日

加藤（注、後方班同僚、加藤金義中尉、親友）の作業隊に加はり家族宿舎にゆく。天気晴朗なり。ソ連兵つかず。炊事移動。午後概ね一時間、みつと昌太郎に会ふ。昌太郎を抱く。むっちゃん（同僚片岡長春中尉の長女）些かわるし。卅九度八分、はしか、肺炎にならざるやう祈る。幼児の死亡相つぎ、介抱の母親もつかれ、些か暗澹たり。高度圧縮収容にて健康気づかはる。夕刻帰る。

十月十七日

雨落つ。雨中を井村大尉と解除建物（注、ソ連軍が、日本人浮虜の薪用として破壊するを許した建物。）を調査す。糧秣受領、一二七D輜重隊長佐伯少佐に指揮して出て貰ふ。第三宿舎柳田少佐をたづね、明日の打合せなど。



日本国内の配給定量九五〇カロリーを基準として制限せられ、また英・ソ・支の一師団夫々内地駐屯のニュース聞きぬ。

十月十八日

十時より柳田少佐指揮し、炊事用燃料充当のため、炊事裏倉庫等を破壊解体す。間食を出す。秋冷、大空澄みたり。夜経理部にて玉沢大尉と、やゝ談判す。

十月十九日

秋冷あり、前庭の樹々黄葉せり。収容所長、警備司令官の巡視もあり、落葉を焚く。ヨハンナ・スピリの『小さきスイスの少年』。ドイツ教会の家族半部、市街の一部に移るとか。風邪気味、頭やゝ痛む。

十月二十日

天気晴朗、颯々の風、逝く秋を思はず。十時より第二回建物解体作業。家族病舎・霊室

に使へるところ、昭和十二年の建築とか、壊すに惜しきしっかりせる構造なり。十三時骨組のみ残し終らす。加藤作業隊に託して、みつに粉ミルクやる、昌太郎の健かさ祈るのみ。

日に十五斤以上の行軍に堪へざるものを調査せらる。行軍による出発間近からむとさわぐ。

在支軍三年の労役に服せしめらるゝとかのニュースあり。この宵も月明らかなり。故郷は野山の実りゆたたく、ともかくとり入れのみはせではと立ち急ぎあらむ。庭に散りゆく落葉を見れば、偲ばるる。

### 十月二十一日

柳田少佐省会館施設にゆくため、解体作業隊は河野大尉指揮す。亀山に見さす。矢木少佐指揮の輸送隊と共に、先づ材木を家族宿舎に運び、ついでに二〇〇名分の移動荷物を運びて憲兵隊に到る。鮮系の警備隊員ら、宿営しあり。みな日本兵の服を着、われら日頃親みなれし小銃軽機を携へあり。それより広瀬隊に到り糧秣受領してかへる。空腹甚し。

十月二十二日

井沢中尉家族、東寧より逃れ来りて寒さ増すに衣類乏しきを聞き、堀内（注、後方先輩堀内元三郎中尉）氏加藤と共に、シャツ類を贈る。久しぶりに洗濯、寒さまさりて手に水の冷たさしみたり。片岡、風邪気味にて臥す。旅次の憩ひ思うてタバコ作り。夜花札遊び、今宵停電、終夜点かず。

陛下御退位の噂到る。驚天動地の事物にも慣れて、むなしく事のなりゆくに任す。あはれむべきかな。

十月二十三日

片岡熱出してひかず、夕方三十九、三度に上る。剩あまつこへ今朝来れる片山の言によれば、むっちゃん再び危篤のよし、危機超克に懸命なる幼児の生命、みとりする人々の真剣さを思ひ、その安泰を祈るのみ。朝より花札弄ぶ。終日風あれて、落葉を飛ばし、時々ちらちらと雪落つ。あはれ、雪舞ふころとなりにかな。何時の日か、国にかへらむ。故国のむかへは何時ならむ、われらにまでその手は伸のびさるゝや。

旧省公署に施設の材料持ちにゆくことを許されて、鴉田少佐指揮してゆく。新たに天主教会より分離される家族は、三九部隊と一一二師の一部なりと。再び停電、ローソク点して花を打つ。

(幽囚行)

十月三十一日

朝〇九三〇出発準備完了。風冷たし、出発なし。二八部隊より防寒被服受領、些か心配なり。

十一月一日

本日出発なし。羅津行の噂高くなり、心明るし。防寒被服半部受領。

十一月二日

朝〇九三〇営庭集合。十二時出発、自動車にて。十号貨車に入る。何処にゆかむとする

か、或いは羅津、或いはハルピンと……汽車出でず。

十一月三日

朝明けて見れば、依然間島なり。昼すぎ出発、一馳半止。朝陽川（注、延吉より吉林・新京の方向へ約一〇km）著、遂に逆の方向にゆきぬ。夜中に汽車出る。

十一月四日

朝銅仏寺・茶条溝を過ぐ。やがて明月溝（注、京図線、延吉より約一〇km）著。天気よし。物を買ふ。夕刻敦化著、一二八師関係の家族のあるところなり。

岡村將軍、旧部下十五万とともに帰化、東北三省に赴くと。東進列車に戦利品数多、連続輸送を散見す。

十一月五日

朝、秋梨溝（注、敦化西北方凡そ二〇km）に着く。弾薬散乱しあり。終日花札。夕刻拉法

(注、拉法站、吉林東方六〇km) に着く。道は長春に通じたり。

十一月六日

黎明吉林通過、十時新京着。用便、物を買ふ。所持金乏し、白酒一本。概ね終日停車、ここにて夕食となる。チチハル説あり。

十一月七日

十時新廟(注、京白線、新京よりおよそ一六〇km)着。この辺一目千里、渺々たり。用便、風漸う冷たし。

十一月八日

朝、五廟子着。白酒にて些かホロリとする。嫩江戦歿五十勇士なる碑、前にありて数時間、夕刻走り出す。

十一月九日

昂々溪こうこうけい（注、チチハル南方凡そ六〇km）を通りしや、朝、人家なき原に止ること数時間、十五時榆樹屯着、チチハルの手前なり。ここにてソビエットの貨車にのりかへ、施設一切、働く。貨車狭小なれば夜までかゝりて、やゝ心地よき住居となる。火たきて乾パンの夕食。これより広軌なり。（注、50屯貨車を上下にしきり、出入りはもぐって入る捕虜輸送用のもの）

十一月十日

榆樹屯にて夜明け。朝より大雪、冷ゆ。昼頃出発、空腹つづく。夕食わづかなり。心細き夜、すき間風終夜、眠りを浅くす。

十一月十一日

朝方札蘭屯じやらん屯着。物あまた買ふ。この日さして走らず。食事三回となる。初更博克ブヘト図着、終夜動かず。夜冷えたり。

十一月十二日

朝方依然プヘト。加藤炊事にゆく。部屋の模様換へ。十一時出る。興安嶺を越えゆくらしき。越ゆればやゝ暖かし。このあたりキャベツ数多買ひ込む。

十一月十三日

○三〇〇海拉爾<sup>ハイラル</sup>発と。この頃不寝番、朝陽射せば砂丘見ゆ。蒙古色なり。十二時満洲里着、国境の町。炊事より肉など貰ふ。夕刻つひにソ連領に入る。

十一月十四日

終日ソ連領を走る。雪あり。風物満洲と異なるなきも、心なしか荒涼たり。あはれなるロシア女の物売り来る。夕刻汽缶車二輛、前後につきて走る。いづこにゆかむとする旅なりや。

十一月十五日



朝ヤブプロスバヤ着。寒冷まさる。馬鈴薯にて作れるパン様のもの買ひて食ふ。うまし。夜明けとみに遅し。チタを過ぎて西走中なりと心落ちぬ。部屋の模様替へ。

十一月十六日

イルクーツクを去る数百料のウランウデ駅着、〇七〇〇。二回に分れて入浴。シャワーを浴びて帰れば二時、やゝに爽快。雪ふりつづく荒野をゆく。バイカル湖畔吹雪せり。ひねもす錦料理（注、「勘太郎星月夜」中の「なりはやくさにやつれてゐても、月を見てくれ心の錦」をもちつた、班ごとの手製料理をいふ。）夜不寝番、さらに物炊きぬ。『多情仏心』読了。そのかみの東京の面影おぼえてなつかしきかな。

吹雪するバイカル湖畔に夕げたく水掬ひつゝあはれこの時

バイカルの湖上小暗く吹雪つゝ家辺をはなれ行きの果てなく

バイカルの波の音高き汽車の扉よ雪はだれ入る寒き夕べを

はるばると来れるものかバイカルの湖畔をゆくと人の知らなく

命あらむ限り忘れじ囚はれてバイカル湖畔凍えゆく日を

十一月十七日

終夜ひた走る。冷えまさる。早朝イルクーツク着。四時間停車雪深し。夕方ザガリア  
駅。

十一月十八日

終日胃腸不良にて臥床、よく眠る。夕刻起きて食事。二十二日頃モスクワ着と。またウ  
ボルナヤ（注、用便）ゆきは夜を選べと。

うつつより夢に悲しき幽囚行

十一月十九日

例により何すともなし。夕刻クラスノヤルスク着。ソ側の兵站給養、パンとライ麦の  
粥。夜一同と話はずみて心ゆきなりき。

十一月二十日

ややむねやけあり。昼食マリンスク。片言のロシア語に興ず。吹雪終日止まず、雪深き国かな。不寝番、荒川（注、第三軍司令部情報班、荒川宏中尉）と支那の話など。

十一月二十一日

早朝出で、久方ぶりに洗面。手切らるゝ如し。汽車昨夜より出でず。正午出発、ツターズカヤ駅に到る。雪出巴と降る。

十一月二十二日

朝〇七〇〇頃（規正時間）ノーボシビリスク着。暫く動かず。暖かし。雪例によりて深し。終日錦料理、腹六分迄九回。

十一月二十三日

〇九〇〇チビリスカヤ。チタまで二〇〇粒以上と、雪あり。片言のロシア語にて群れ寄る子どもらと話せば楽し。新嘗祭の日なり。

十一月二十四日

夕方オムスク着、間もなく出発。一週間になる吹雪をさまり、本日久しぶりに、陽光を見る。雪深し。行先はタンポフカ（モスクワの南一二〇軒と）とか。暖炉周辺の掃除。夕方やゝ下痢気味。不寝番。

十一月二十五日

ゆきゆけど吹雪の荒野なり。穴倉の生活にもなれて久し。長き汽車の旅よ。物くうて寝て、時折狭き扉より空の一角を仰ぎ見るのみ。春來の頃帰国の日あらむと、そのみ祈らる。野糞も雪にさらされたり。

十一月二十六日

朝チエリビヤンスク着。雪降る。北緯六〇度を超えたり。炊事車作る岩オコシを食ふ。あと数軒にてウラル山脈に入り、さらに数日後目的地に着かむ、と聞く。

十一月二十七日

ウラル山中に入れば雪さらに深し。寒冷、車を凍らし、陽光うすし。然れども松、白樺の林続きて内地の風物と異らず。

この頃、日の出四時半、日没午後二時半頃なり。飯三回上る。

十一月二十八日

朝十時ウーファ通過、曇天、洋匙一本、一〇ルーブリにて買ふ。宮川中尉臥床。

十一月二十九日

ウラルを下れば草木なき一望の雪原なり。駅付近にドイツの爆撃の跡らしき所あり。アセキーボを過ぐ。夜二一三〇クイビシエフ着、ソ連給養あがる。

十一月三十日

朝スエヅラ？着。入浴、第二回目。使役に出でありて時間なく、忽卒に飛び込んで、顔

剃り道具ダバイ（注、奪取）され憂鬱なり。一兩日の中タンポフカ着と。思へば長かりし旅なるかな。蠟燭の光も尽きて絶えんとす。

十二月一日

ペンザ駅にて夜明け。明日目的地タンポフ着と。次第に温暖なり。夜ハルテシロ？にて、甘さこの上もなき豆入れキン-tonをこしらへて食ふ。

十二月二日

昨夜より百料あまり走りしのみ。夕刻キルサーノフ着。動かず、到着は明日らし、冷えきたる。

（「ラーダ」の森の記）

（注、ラーダ収容所は、主としてドイツの捕虜を収容した、半地下のバラツケ、畳半畳ほどの板敷が一人前の寢床であった。）

十二月二十一日

思ひ見れば去年の今日の日は、華かなりし挙婚の日なり。一年の变化言ふべからず。再び三度びかへりみて茫々たるかな。

十二月二十二日

洞窟の兵舎のぬくみをたのみにて残れる命よこほろぎの鳴く

吹雪つゞく寒き夜落ちずこほろぎのなきつゝもとな故郷思ほゆ

はかなくも残れるこほろぎとらはれてちりぼふ命にたぐへてぞ思ふ

十二月二十三日

天長節の日かと一般に東天を拝し国歌を唱和す。思ひ新たなり。暖き日にて雨降る。三度（C）に上る。屋根の雪解けて洞窟兵舎に湿気多し。昼寝いささか。夜遅くなりて夕食くはず。ローソクの光の下、いささかの演芸に興じて夜更けたり。

十二月二十四日

クリスマス・イーブの日。IV到着。第四地区に入る。間島の第二梯団到らず。樺太・千島・朝鮮平壤付近の部隊なり。

夜同室のドイツ人ヒレの身につけた写真を見る。わが家、妻子すべて破壊し尽されたりと。あはれ。(注、ラーダ日本軍将校捕虜収容所は、第三軍司令部要員をそのまま捕虜集団の司令部とし、残留ドイツ軍捕虜集団の司令部と、同一バラツケに起居せしめたのである。)

十二月二十七日

この数日温暖なり。春来までにはまた寒波の襲来もあらむ。荷物の預託を促がす。思はぬ境涯にて歳暮新春を送迎せんとす。故国の窮苦はるかに偲びつゝ、思ひはるかなり。夜花札をとる。

十二月二十九日

寒冷、零下二度に下る。朝方、河野参謀とともに炊事にジマイフと会談、夕刻洗濯場に



て下着交換につき協議、埒あかず。夜入浴。本日より炊事全面接收（注、ソ側及びドイツ人が管理経営してゐたものを日本人の手に委譲せしめる。）成る。

十二月三十日

給水に立会。夕方タバコ配給に立会。ソ連の正月の贈物か。本部にては大隊長会同。薪採りのついで、二九号（注、日独本部のバラツケ、八〇m<sup>2</sup>ぐらゐか、真中に土間があり、吹きぬけの二階で、入って左側がドイツ、右が日本の本部要員がゐた。）の入口にも門松を立て、この年の思ひがけぬ正月を迎へんとす。間島の家族たちは、いかなる所にてか、虜囚の行方思はむ。

十二月三十一日

大晦日。夜二〇〇〇入浴（注、バケツほどの容積の木の桶一杯の湯で、顔を洗ひ、からだを洗ひ、ついで下着まで洗濯するのである。）さっぱりする。劇場にてドイツの新年を迎ふる演芸を見る。終夜寝ねず、元旦を迎ふ。〇二三〇ごろ、白飯を炊き、塩魚焼きて、いささか祝

意を表はす。

昭和二十一年（一九四六年）

一月一日

零下に下らざるべし。雪些か解けぬる暖かさ。黎明に起きて東天を拝し、国歌奉唱。暖かき洞窟、その日の食事をおきて何もなき年の始めなれど、さすがに心明るし。全地区業を休む。この年のよき幸せを、国に帰る日のこの年の早きにあらむをのみ切に祈るなり。午前中身辺些かつくろひて、午後8号に堀内氏をたづね話し込む。贈れる若干の白米、この朝け炊きて腹みちて、尚眠りも足りて、この上もなき正月なりと。31号に窪田君をたづねれば、演芸の最中なり。夜二〇〇〇劇場にはハンガリー人主催の演芸を見る。

一月二日

夕刻洗濯場の件に関しハンガリー人と対談。増食の件につき、事些か破れたるに近し。

一月四日

I、(注、第一梯団のことか。以下同じ)一般地区に移動す。夕刻第二梯団到着、片岡なし。この梯団10/11間島を出で駅に到れるも、こゝにて約十日、暉春よりタラスキーに行軍、ここにて約四日間、これより乗車せりと。深更までかかりて荷物の整理、冷えはげし。帰りて飯食ひ走りてⅢ第二演芸団の演芸を見る。間島の家族、いまだ出発しあらざるべし、いかなる年を迎へしや、昌太郎の元気をのみ祈る。

一月十一日

先月十六日より二十六日の間、モスクワにおいて開催せられたる外相会議による対日処理法などのニュース届く。極東委員会・対日理事会の二本立なり。もはや第一次大戦の如き媾和会議はなかるべしと。国に帰る日の遠きを思ふ。このごろ温暖続く。夜麻雀。

一月十四日

45号にてソ側第一回調査。夜劇場にて音楽経験者を集めて協議。点燈なし。

一月十六日

洗濯場主任者横山大尉、工作隊長海江田中佐の任命など。本日陽光あり、白樺を、青空を仰ぎてたのし。思ひは帰国の日の遙けきをめぐる。

一月二十日

十一時より給養本部にて、給養に関する相談、打合せ、ジマイフ入り来る。夜臼杵通訳（注、ハルビン学院の助教授と聞いた。ロシア語の稀なる堪能者。ロシア文学にも精通。本名臼杵喝郎。）と過ぎし日の思出を語る。

すめろぎはいかゞおはすと東の空をろがみてひた祈るかも  
とらはれて力及ばぬいきどほりみ国の空に届けとぞ思ふ  
国のため流すべかりし赤き血はよも濁らじなその飯はむとも

一月二十三日

雪はだれ降る。人々の除雪作業、本日も盛んなり。夕刻になりて身体些かだるし。加藤

青山（讓）氏の尺八を聞く。「千鳥の曲」、秘曲「寒月」「懐月」。颯々の風韻、白樺の林を流れたり。

一月二十五日

身体けだるく夕刻つひに床に臥く。風邪らしき、アスピリン服用。熱、三十七度

一月二十六日・二十七日

風邪・臥床。

一月二十八日

入院。

二月一日

(1) 丸太組みたる穴倉の

壁ぎはにある木のベッド

とらはれの家に病えて

わがあけくれを過すところ

(2) 氷る小窓に日のさせば

雪の国なる稀日和

白樺林に青空ゆ

光流れむなつかしや

(3) ぬばだまの夜は禍の夜

臭虫幾百出で来り

やみこやす身のともし血を

むさばり吸ふも情なや

(4) ストープの火の影見つめつゝ

思ひはまたしも幾千里

こえて家辺をゆきめぐり

いねられぬ夜を恋ひあかす

(5) 木立に荒ぶ夜嵐の

うらぶれてこそ今あれど

春たちくれば天地を

どよもす息吹生れ出でむ

×

ふりしける雪また埋む

朝夕の大雪山

地底つらぞとにひそやかに生く

百草のきびしき命

二月六日

血沈（注、検査のことか。）の運びにならず、夕刻入院者重なりてにはかに退院となる。雪どけの道、ぬかるみを踏みて帰ればうれし。春近きかな、病ひも癒えたり。宿舎にてわが退院を祝し、白飯炊きて唄ふ。

二月十二日

雪深き国かな。今朝も落ちぬ。掃いても掃いてもつきぬ雪、後の語り草とならむ。午后劇場にて「さくら劇団」の公演を見る。童謡その他、「春雨」の三味線、踊り、長唄「越後獅子」など面白し。夜、久しぶりに電気つく。これもうれし。何すともなく、このごろ日過ぎて、腑甲斐なしと思ふ日もあれど、生くるかぎり、この世にあることを究めばやとの心掛け忘れじと思ふ。十二時より二時までの間不寝番。

二月十八日

G・G・A（注、抑留者のための文化団体か、記憶あいまい）をのぞき、雨宮（注、同期の中尉、

東大国史学科卒、雨宮義人）・桜井（注、同期の中尉、東北大法学部卒、桜井保之助）両君と語る。夕刻、第一炊事にて田口・西垣両氏描く壁画見る。河野参謀、風邪ひき。山崎入院す。

二月二十七日

日本人クラブの件につき松元中尉と語る。かれは一高の中退、先輩なり。

三月三日

桃の節句の日なり。家族は帰れるや。一月末日までに帰還せりとの噂もあり。「日本人クラブ」にて、元チェック人、現ソ聯政治部員スイツツル氏とゆき合せてその話しを聞く。夜劇場にて千秋楽の納会を見る。「春雨」「奴さん」、再び感銘あり。

三月九日

曇天。午前偶々日本人クラブにて、守田（注、参謀守田省吾）少佐と松元中尉の対談を聞



く。「らあだの声」(注、リーダーなる收容所の民主化運動の機関誌)の反響、雑音きこゆ。

三月十四日

雪の道踏みて諸連絡。Ⅲにて工作隊渋谷少佐と語る。夕刻阿部君来り、G・G・A 展覧会につき意見あり。高級副官(注、広瀬三郎中佐)とゆきて見る。日本人クラブ「我等の声」を出す。民主的傾向増強せり。炊事のジマイフの言なりとて、英米のソ聯に対する期限付回答要求の外交折衝ありたりと。

三月十九日

第二回接種。伐採隊にゆける加藤通訳(ペリポトシヤ)、昨日糧秣受領とてタンポフに来れる由聞けるを、本日突如営倉(31号)に入れられたりとて、皆さわぐ。毛布飯盒を届ける。

三月二十一日

彼岸の日。内地は伊豆のあたり早咲の桜咲き出でむ頃かとしのぼるゝ。全員新採り、往

復数十料の雪どけの道ふみてかへる。昼食うまし。岸田国土『落葉日記』その他。夜、6号にて陣歿将校の追悼法要。ついで種村大佐の、ソ英米外交秘話、角逐の顛末聞く。

三月二十四日

雪どけの道の砂路よふるさとの河原の小みちおぼえて恋しき

天地に足らふみ光うれしみと仰ぐ蒼空に樹氷美はし

春を待つ若芽の力君知るや修業証書に涙落ちにき

(注、修業証書、忘失。何か文化講座に類するものを聞いた、その証か。)

三月二十七日

美しき陽光あり。雪どけの水流れて、泥濘日にはげし。英米ソの外交関係、その後詳報なし。いかになりゆくべきや。

三月三十日

朝方も零下を下らず。雪とけたるままなり。雨宮君「郷土に関する覚書」「恋闕の情」を語る。面白し。日本新聞二八号、ハバロフスク発行のこと、明らかとなる。編集の方針もやゝ多方面にわたるやうになりたり。

#### 四月五日

短歌俳句の懇談会開かんと、朝G・G・Aにて平井少佐と話す。午後会報のゆきちがひにて再びゆきて論議す。タンボフ市カガノウイッチ自動車工場に二〇〇名出ることになりぬ。その出発、近日中にある模様なり。ドイツ人らも概ね総動員の模様にて、その举措落ちみず。日本新聞、陛下の御退位、総選挙後にあらんと伝ふ。

#### 四月十三日

『歎異抄』写し終る。キルサノフとかへ転送の長期療養者五十四名出る。またベルギー・オランダ兵帰国、ドイツ人は老人と病人と帰国を許されたる旨、その心中を思へば、うたた同感に堪へず。同室のハインリッヒ、シヨルツも加はると。何とか準備するらしき。

昌太郎死せるを、女房にあたると、夢見ぬ。

四月二十一日

天気絶佳。とみに春めきてノスタルジアの夢多き日。朝上半身裸となりて日浴びて洗濯。昼食は野外にて。午後一時より一高同窓会。

四月二十八日

点呼時より突然所内全員の私物品検査の命令あり。刃物類など禁制品の検出なり。

四月二十九日

天長節あるべき日。朝方東天を拝す。

四月三十日

天気よくつづく。四囲の白樺も浅黄にもえて美はし。終日、明日の準備。直轄木工班作

る燈籠四基、赤く彩られてメイン・ストリートに据ゑらる。緑と映じて美はし。故国の春のしたはしきかな。「春秋」第二輯、露語に抄訳のため持ち来る。

### 五月一日

ソ聯人民の喜ぶメーデーの日なり。○八〇〇G・G・Aの展覧会を見る。○九〇〇舎前屋外劇場にて日本人クラブによる「メーデー祝賀演説会」。一〇三〇より運動場にて相撲競技、Ⅲよく勝つ。久方ぶりに見る日本のスポーツ、見つゝ些か涙落ちぬ。

午後二時より国際オリンピック。一〇〇米、三〇〇米疾走にベルギーのリーベンよく走れる外は、すべて概ねわが勝に帰す。体力の衰へ、やゝ見えたるもその意気は壮とすべし。

### 五月七日

総隊長（注、第三軍司令部高級参謀、谷岩蔵大佐）以下各補佐官、森のコミندانントに呼ばれ、概ね五月十日以降、一切を逐次日本人の自治に委する旨達せられたりと。また下士官

兵と雖も、労役は自発の意志に委すと。在滿邦人、敦賀に上陸の旨、イズベスチアにて。

五月二十日

南京虫、またまた増えて安眠を妨ぐる日つづく。夕刻「日本文化瞥見」成れるを喜びて  
G・G・A文芸班といささかの会食、4号横草原にて。藪蚊はげし。

五月二十二日

夕方、雨宮中尉を呼び、ロシア軍事専門学校に使用すべき日本語教科書、課外読本及び  
日本語書簡文集作製のことを聞く。従来ものは、片山センの女の作る所にて、ロシア文  
直訳のもの、これを改めんとの意図なりと。

五月三十一日

あまり出でず。天窓より新緑もゆる立木の美しさに見入りつゝ、『日本歌学史』読む。ソ  
側要求の書簡文の筆記一部担当。来る日来る日、美しき日はつづくけども、思は変らず。

日々に書き記すこと平板に似たれども、心の底に流るゝノスタルジアの嗚咽をえつ、既にわが血肉の一部となりたるを、後にこれを見む時思ひしのべとのみ。夜小甲中尉（注、北海道釧路出身、国士館専門学校卒、小甲幸一）来り、夜食食うて眠る。

総隊長以下五名、タンポフ道路作業に出る。かへればその報告に賑ひたり。

#### 六月四日

朝六時出発、道路作業に出る。約八軒歩みてタンポフ市に近きところに来る。天気佳し。且つ風ありてしのぎ易し。植物採集に出で来し、ドーラン提げたる女学生たち、付近の池に遊泳する労働奉仕の女たちなど、いささかソ聯の民情に触れたる思ひなり。夕刻一八〇〇終了。砂漠の如き砂道、ふみさくみ、ふみがてにして帰る。終日の労働終れば心地よし。早う臥しぬ。

#### 六月十五日

砂埃はげしき野路にむらさきの大ロシアの花のあはれ咲きたり

囚虜一千どよもし通ふ砂道に咲けるもあはれ野の花ひとつ

砂はやけ水涸れし日々にとらはれの身は喘ぎつゝあはれ萎えんとす

六月十九日

寝つゝ仰ぐ木ぬれに高きむら雲のひろごり止まず雨となるらしき

逝く夏よ雨と降り降り大ロシアの夏日照る野は水からびたり

袖ぬらす朝露恋しや大ロシアの砂埃たつ野路をゆくとき

六月二十日

朝、加松（注、第三軍司令部副官部付、加松章少尉）の労務を手伝ひて表門に出る。午後かけて裏棚に横たはり、『書紀』を見る。近き日に帰還の目途もなく、心暗き日つづく。夜、一時給水混雑して、夜間一時となる。



六月二十四日

曇りてやや暗き日。木ぬれ雫つき落ちたり。

きぞの雨に息つぎたりやこの朝け暗き土窟にこほろぎしきなく

木ぬれよりしづくはなほも落ちやまずきぞ降りてなほ雨ぐもる日も

夕刻一九〇〇よりⅡの第二回文化講座。その第一回「日本文化と風土」に継ぎ語る。筋書を追うて舌些か渋滞せり。

六月三十日

夜半にはかに雨降りて床をぬらす。はつかの軒先に身かがめて眠る。

七月六日

曇りつ降りつ、また晴れつつ、時雨模様の天候なり。たまれる洗濯、女房のこと思ひ出しつつ、終はればいささか晴々し。大佐、兵の個名点呼。これにて所外作業者を除き、すべて終了せるなり。夕刻、野外劇場にて第二回演奏会あり。袂別の記念のためとなり。

七月九日

本部補佐官、森の本部に呼ばれて、明日より四日間、道路作業に毎日一五〇〇名差出の件、また昨年十月末発布の内務規定の件を聞く。ここにも亦例の譎詐げつさ（注、いつはりあざむくこと）あり。その足にて道路偵察にゆけり。

出発、再び延びて落胆あり。夕方例の椽台にありて皆と語る。思ひはたゞ鐵路とともに東にのびゆくばかり。この宵、星見ゆ。

七月十三日

盂蘭盆会まためぐり来ぬ水鳥の発ちのさわぎに落ちみぬ時に

木挽場こびきばの木屑あつめて宵盆の迎へ火たきぬさびしからずや

迎へ火の赤くさゆらに燃ゆるときこえきし年ははるけかりけり

迎へ火のやみ夜ひそけく燃ゆるとき遠妻のあはれ面影にたつ

迎へ火のもえさかりつゝ更けゆけば森の端かけて月さしいでぬ

七月十四日

日本人の作れるラポータ・ゾーネの公園成れるをもて見学す。草深き道ゆけば、いささか心晴れつゝ、音楽を聞く。斉藤通訳より、この国のよも山の話聞く。45号にて陣歿將兵、またこの地にて物故せる22柱のための盂蘭盆会の法要営む。仏教聯盟の主催せる所なり。

本日夕刻、日本語堪能の少佐再び来たり雨宮君に書簡文の一部の書直し、及び再度の日本語教科書の編輯を命じたり。

眠りに入る頃月のぼる。この頃の川柳に、

寝ながらによき月を見る果報者

とあり。

七月十九日

第一梯団出る。個名点呼して逐次出発す。この日暑し。「せぶり」(注、バラツケのうしろに作った椽台)に寝て過ごす。三国(注、名は浄春、僧侶の中尉)・雨宮君ら、みなゆけり。

七月二十八日

午前零時頃、本日出発のこと知らせくる。三時頃起きて本部の会食。重き荷物となる。十時より集合、夕刻までかかりて人員点呼、携行品検査終れど出でず。つひにこのまゝ宿営となる。45号にみたれど、南京虫のため寝られず、板材持ち出して本部横に眠る。星美しかりき。

七月二十九日

再び五時集合、陸続と出る。日出で、漸うに暑し。表門にて收容所幹部に別れを告げ自動車に乗る。朝風よぎりてゆきぬ。心地よきかな。いづくにありても待ちこがれて夢にも忘れえざりし喜びの今日の日、つひに来れる。駅にて特別車を定められていささか整備す。主力遅れて午後四時頃着、この間昼寝など。夜半十一時出発と聞きつつ眠る。

八月二日

朝突然下車を命ぜらる。驚きと悲しみ、言ふ方なし。キズネルといふ駅なり。荷物まと

めて下りぬ。第三梯団もここにて下車せる模様、立木にその旨書き留めてあり。昼食を炊き食ふ。これより八十料行軍と。鐵路より離れて遠きところ、如何なる理由にて送るとするならむ。行軍に堪ふる荷物のみまとめ、あとは倉庫にあづける。十五時出る。小野崎少佐、荷物輸送係としてあり。荷物やや重きに過ぎたり。十数料地点にて日暮れぬ。歩哨道を知らず、心細きこと言ふばかりなし。十二時ごろ予定宿営地に着く。疲れ果てぬ。総隊長以下先行しあり。夜霧深き草むらに寝ねぬ。

### 八月三日

出発は明早朝二時と決まり、終日休養。よき日なりき。水豊けきところいこひあり。洗濯しました水浴、心地よき言はん方なし。一年ぶりなり。クワス（注、酸性強い乳製品）買って飲む。また武井（注、第三軍武井光少尉）、玉子を集めて食はず。夜九時一旦就床。

### 八月四日

二時準備完了、三時出発す。やうやく夜明けて朝露美し。八時半、予想より早く予定地

着、二十二粒なり。午后、夕立沛然来りて、一同ぬれ鼠となる。うすら日射せど乾かず、ぬれたまま敷きて臥す。

八月五日

例により三時出発。タタールの部落眺めつつゆく。家作り服装など興味あり。本日恐らくは二十五粒を超ゆべし。長き畑中の単調な道、右足神経痛のごとく痛みて辛<sup>つら</sup>し。十時半やうやくに着く。日ざしはげし。三時、飯到着。かつて3A司令部にありし近藤少佐あり、飯、水、パン配給を行ふ。十六時頃再び食事到着。之を頒ち、その車により本部出発。……

(エラブカ生活断片)

九月二十二日

日ごとに時雨れて、花壇の花も色あせ、人らもリュックの底より冬物とり出で、身にま

とひ、逝く秋の気配しるきこのごろなり。久しく絶えたりしその日の誌し、今日より再び始めむと思ひ立ちぬ。

今日も亦霧のごと雨落ちて、ぬかるみ靴を汚す。霧雨既に幾日か続きけむ、この地今雨期と聞けり。この朝け農耕に一五〇〇名出だすべき旨命ぜられて、労務の者かけづり廻る。

きぞの夜いかなる夢を見たりけむ、この朝裾のものとりかへて、遠妻の面影ほのかなり。昨日はカザンより谷大佐、四十日振りにて帰り来られたり。例のごとく雨ふりしきる朝なりき。その夜は、旧ラーダの者ども大隊より職場より集ひて、一夕の演芸を催しぬ。

すみやかに東の方にむかふ噂もなく、この秋も更けて冬越すらしき。あはれ、来む春の、夢のごとすみやかに訪れよかし——農耕出でよの声を聞きつゝ見あぐれば、空曇りて、黒き大地のぬかるみ思はず。

八時半出で、終日農耕、時雨模様の日。台地に上りて見れば、エラブカの街、けぶらひて見ゆ。馬鈴薯掘り拾ひて、夕刻闇せまるころ帰る。この宵停電して手<sup>た</sup>どきを知らず。

X

すみやかに東にむかふ噂もなくこの秋も更けて冬こそすらしき

うつろなる思ひにありてそのかみもかゝる折ありしと暗き部屋ぬちに

石だゝみ白亜の家並土をなみかきねにかこみて咲ける草花

石作り白亜の家に烏打帽の大人びし児が走り入りたり

農耕の道ゆきゆきてかへりみれば雨にけぶり立つ十字架の塔の

天と地の果てつらなれる広野原しぐれて烏のむれたつばかり

時雨れつゝ広野原ゆく日本人のむれありなべて首を垂れたる

時雨の雨にけぶらひ塔の街エラブカの街の目下まなしたに見ゆ

時雨れやまぬ広野畑にひねもすを芋掘りやまらず涙ぐましも

暗き屋は親待つとふにあらなくに日暮れせかるゝ時雨の道を

九月二十三日

雨はげしうは降らねど晴れやらぬ深き雨気、靴をぬらし、部屋ぬちたばこの煙をこもらし、うったうしき日なり。今日もまた農耕千人を超える出で、畑にいそしむ。虜囚の月



日重なりて、この日ごろ些か思ひたのめることあり。日本にして洋の東西兼ね具して立つの可能性、その日遠けれど、たしかなる光仰ぎて些か胸ふくらむ思ひあり。

午后かけて雨勢やゝ募る。

### 九月二十四日

時雨ふる塔の十字架高みかも烏のむれのとまりがてぬる

廁の小窓ゆ時雨の空のぞきくものすほそく揺られ止まらずも

### 九月二十六日

時雨の、冷き雨にぬれそぼち芋掘りつかれぬせんすべをなみ

虜囚とらはれの身のすべなさよ背を通り雨にぬるれど芋畑さらさず

### 九月二十八日

久にしてものかきたりし高まりに味覚えずて熱きかゆ吸ふ

ひもじさをそのまま、眠るこの日頃飯たくまきのとだえがちなる  
ひもじさをかゝへて眠る宵々はたらちねの母のくりや恋こほしむ  
土曜日の定例掃除にはきあつむ落葉にはかに散りまさりつゝ

九月二十九日

今日も暗き雨模様の日。外国人ら四十名あまり帰り来る。ルーマニア人はダモイなり  
と。夜に入りて、ハバロフスクよりとて、樺太満洲の役人その他の人々五十名あまり着き  
ぬ。

午後管理局長（注、ソ連人。收容所長の上役か。）の話あり。要求するところ、(1)軍紀秩序  
の維持、(2)真ままじめな作業、(3)文化的行動。

弘報中隊鈴木（注、福島県出身、鈴木美之吉少尉）君らの手になる『道草』第一輯持ち来  
る。ラーダの『春秋』にあたるものなり。

九月三十日

トーカーの声なきいぶせき絵の如く男女の姿を見たりき  
映画見て出づればしぐれのぬかり路収容所につゞく道かへりゆく  
この宵の夜会の設けか青きセーターのロシアをみな化粧けはひしいそぐ

十月二日

かばね送る荷車門を出でたるらし轍わだちの音のきこえずなりたる  
原木の輸送に汚れし車もて奥つきにゆくかいやはての路を

十月三日

きぞの雨は強く降りけむこの朝け青き落葉をはきがてにする

十月四日

あつきかゆすゝり終ふれどぬくもりの足にとゞかず秋闌けにけり

十月八日

遅き夕餉待ちがてぬ間に夜は更けて表に出づれば月あきらけき

十月九日

飯を食ひ湯に入ることごと背を重ね並みゐることになれて久しき  
天空に黒き火花なす大群の鳥の舞の乱れて妖しき

十月十日

しぐれ空はだかの立木に夕まけて鳥のむれの鳴きさわぎたる  
落葉して木のうれ淋しくなりしよりしぐれ日落ちず鳥のさわげり  
さらでだに食ひもの乏しきところにて鳥さわぎて何を食ふなる

十月十二日

河野参謀、首席補佐官となりて来る。

十月十四日

あられ雪吹きたまりつゝ雪空の重くたれたる冬さりにけり  
来る月の日経だちははるけしかへりみるすぎこし方は夢の如くに  
かへりみる遍歴の日々雨風にうたれ生きたり強からなくに

十月十五日

ダモイの噂、また一しきりなり。一は炊事より、一は農耕作業隊より。その実現を祈り  
つゝはかなきいとなみにとり紛れ生くるなり。

十月十八日

たれこめて夕暮はやきあけくれの家いはべ辺恋しき冬さりにしを  
地獄より恐ろしといふエラブカにロシアに二度の冬をむかふる

十月二十一日

朝戸出の息霧にたち天つ日足り樹氷さやけき真冬さりにけり

十月二十二日

夕餉とると暗きぬかるみに足ぬらし今幾度かかよはばかへらむ  
若草の妻の作れる夕膳のとりよろしき恋ひつゝぞをる

妻とある夕餉のたのしさうづの如き思ひにたへて食堂に並ぶ

十月二十三日

長雨にみどころをなみ小犬ひとつ扉のかけにうづくまりてをり  
長雨に安床どはなきかひねもすをさらばへし犬の扉口とをさらず

十一月三日

六時半集合。首席以下東天を拝す。明治節の佳節に当れるなり。夜、二階にて大隊長会同あり。階下にては集合ありて、斎藤通訳の話、藤田少尉の野球の実況放送（注、余興）

など、愉快なりき。荒木来ていささかも炊きつくる。

十一月七日

ソヴィエット連邦革命記念日休日第一日目。六号舎にて工芸展、また音楽会などあり、これより三日間休みと。

十一月十三日

三号館階下診療所となるため二階に移る。そのため忙し。夜、收容所より、大隊長要員として大佐三名、また、カザンより大佐七名帰る。牧・種村・式部大佐などなり。情報もたらず。われらの帰還は来春五月、また十一月四日よりニューヨークにて日独に関する平和会議始めりと云々、その他。

十一月十五日

十時より納骨安置式。曇天。延べて五五〇柱。仮の奉安ながら、式終れば心休らふ覚

ゆ。

昭和二十二年（一九四七年）

一月初旬

国恋ふる二年こえて東<sup>ひんがし</sup>ゆ日かげゆたけき春は来むかふ  
友らいぎ早も大和へ雪国のおろしあかけて春たちけり  
今年はと人も言ふなるわれもいふその春たちて心きほふも  
窓日かげやゝに明るき顔並めて五勺のビールに年ほぎにけり

一月某日

高光る明治のすめろぎの大き御代の歴史をよめば涙せきあへず  
大き御代明治の歴史の文字の上に涙流れてよみあへぬかも  
つゝしみて明治の歴史よむ時しわがゆく道ははるけかりけり



大いなる明治の歴史よをぢなくてとらはれある身になげきつるかも  
大き御代明治の民のうまごらにわれらあらずやねのみし哭かゆ

一月十八日

母恋ふる情こころも苦しく見はるかすあら野は暗く雪まひ下る

天津テンシンに禍わざはひあひけむ妹の運命さだめたどれどたどき知らなく

一月二十五日

上陸せば先づ一杯ひとつきの日本酒をと言ひつゝはやも二年すぐせし

ものなべて足らはぬくらしになれ来つゝ酒なきわびしさいやしがてぬる

酒のまぬしらふのしづみに二年を心も狂はですごしきしかな

しきしまの大和の国の恋しきは琥珀こほくの酒のうましきにこそ

酒のうたほがひのうたを作りつゝわづかに慰む酒なき歌に

国おこすいとなみはげしきときにしてせめても許せ酒恋ふ心を

母刀自とうからやからと思ふどちとほがひつくさば死ぬも安けむ  
若草の妻の手づから酒のますその宵恋ひて恋ひやまずかも

一月三十一日

記念祭イーブ。(注、旧一高出身者の集まり。)そのかみのこと思ひ出でつつ、今宵酒なき  
イーブ。時刻遅れて夜の十時より食堂にて関谷閣下以下九名集ひぬ。

夢中作

ことすみしつかれにほゝけてありしときわが肩なでゝ問ひし妻はも

二月十一日

玻璃戸白くはりつく霜に祝の一字けざやかに彫る紀元節の朝  
春たちぬ紀元節はきぬ国にかへるうはさしきりにわき起りたる

二月二十七日

夕餉して出づれば春の暖気ありそゞろあるきをやゝにたのしむ  
雪どけの窓に灯うるむ夕なりあたゝかき空気をむねはりて吸ふ  
雪どけにうるむ灯窓の家ありて黒き人かげ出入すひそけく

雪どけのしづくひねもす軒ぬらす日は幾度か表に出づる

靴底にきしきしなりて雪ぬるむ樺太の春を友のいふなる

樺太の春のおとづれかくのごと踏む雪鳴りて来るとふかなしき

温みたる夕べうれしみ見はるかす野はまだ雪なり唯白々と

大空につゞく雪原夕べ立てど灯ひとつともらずむなしくかへるも

すみわぶる冷き石の家も夕べうるむ灯火のゆゑにかへりゆくかも

雪融とくれど夕寒みかもひとときを雪原ながめてかへり来しかな

三月八日

塔のそばの林を月の出でたるらし氷れる玻璃戸はりどのさやに明るく

停電すすなはちはり戸ゆ水のごと月光さしきぬさやけき一瞬

三月十日

管理局長の帰還に関する内示として伝達されたり、記念すべき日。大隊長の声もはづめり。十万の兵ら既に帰還せりと。スターリンは、日本に関する平和会議前に日本人将兵を帰還せしむることに決せりと云々。

三月十二日

彼岸の中日のための献詠歌

しきしまのうまし国原今のはに見もと欲りけむ思へば泣かゆ  
国を見ずうせにし魂も水とこへのみ国の命にかゝるとこそきけ  
たゝかひも国のためこそ矛盾すても国によりてぞやすらげくませ  
みたま捧げかへりゆく日も近づきぬと今ぞ告げなむ彼岸のまつりに

三月十四日

桃の花めをと紙びなの掛軸を買ひしぞ思はゆ新妻来しころ

白き酒祝ひたうべてよき酒にうたげすべかり桃の節句は  
内裏びな五人囃子に菱の餅ぼんぼり恋しき桃の節句や  
賀茂まつり葵まつりに桜踊りかゞよひかすむ京の恋しや  
桃の花五節の姫が緋扇もてまひはやしけむその昔思ほゆ  
水車めぐり桃の花咲く山里を心いたみて旅ゆきたりき

(注、半年余白。)

九月二十五日

ある朝のやゝ静かなる食堂に飯待つ間にして弟思ひき  
とらはれの生きのまぎれに年若く逝きにし弟を思はず久なる

九月二十九日

時雨のあめの夜床に足冷えて眠りあさければ遠妻恋しき

九月末ごろダモイの夢漸ううつゝとならむとする頃

友らいぎ早く大和へ波止場路の柳はすでもみぢたららずや

流水の流るゝごとく立ち出でむとふロシアの司の言のよろしき

注、日記はここで終つてゐる。この年の晩秋から日本への帰還が始まったが、わたしにとっては虜囚としての苦難はむしろこれより始まったのであった。

エラブカには、A・B二つのラーゲリ（捕虜収容所）があり、Bラーゲリは佐官、Aラーゲリは主として尉官のみを収容してゐたが、昭和二十二年（一九四七）の十月ごろか、わたしを含めて、いはゆる反動組の凡そ三、四十名は、佐官の方へ隔離移転されることになって、Bラーゲリで食堂や洗濯などの雑役に使役された。尉官は佐官よりは総体に若く、佐官達はわれらを後輩として何かとかばってくれる場合があつた。

翌昭和二十三年（一九四八）夏、われら洗脳足らざる反動組は佐官の一行と共にシベリアに輸送されたが、帰還組と切り離され、ここでさらに二度の年越しを強ひられるはめとなったのである。

捕虜収容所第二十一分所と記憶してゐるが、そこは兵隊上がりのアクチープの牛耳るところで、毎日ラポータ（わたしの仕事は主に建築用のブロック作りであった）で帰ってくる、はげしい反動するしあげが待ってゐるところであった。文字どほり心身を磨り減らす日が重なつたのである。

抑留の始めからこのシベリアの日がつづいたら、ほかの極めて多数の将兵たちと同じ運命をたどつて、シベリアの土となつてゐたらうと思はれる。

いまから二年ほど前、友人から贈られた辺見じゅん氏の『収容所クワイゲリから来た遺書』を読み、まさに息を呑む思ひをしたことであつた。

## (二) 捕虜読書録

わたしのソ連よりの帰還は、昭和二十五年の一月下旬であった。わたしの郷里の、新制中学校の当時の校長は、隣家の宮下清計氏であって、この人は早くからわたしの母に、息子が帰ったらよそへ出さずにわが校に出るやうにと言ひふくめてゐたやうで、わたしはその年の四月から村の中沢中学校に勤めるやうになった。この一文はその翌年、郡下の教育会の会誌に投稿したものである。

わたしが帰郷したころは、農村も農地解放問題その他で農民組合など地域の左傾化が激しく、わたしも近親より言動を謹むやう注意された覚えがある。

本稿もそのやうな配慮と抑制が働いてゐるやうである。もう一つ、ことわっておかねばならぬことは、抑留者として、このやうな読書の余裕のあつたのは、最初の収容所（ロシア共和国タンポフ州ラーダ）で冬を越して、翌昭和二十一年（一九四六）夏、



タタール自治共和国エラブカ收容所に移ってからおよそ二年間であった。昭和二十三年（一九四八）夏、シベリアに輸送されてからは、前稿のはし書に記したやうに、はげしい労働と民主化運動に身心疲弊して、読書どころではない一年半ほどを送ったことであつた。

ロシアの冬は長い。常冬をゆく雪の国である。わが信濃教育が、寒さに鎖された冬の夜長の爐辺に発達したといはれるやうに、われわれが親しむ十九世紀ロシアの小説に於けるはてしない饒舌は、凡そ一年のうち七ヶ月は深々と雪に埋れて、ペーチカとサモワール（注、湯沸装置）のほとりにすごす人々によって生れたものとうなづかれるのである。

われわれが、まことに長い抑留生活のうちに、自発的にかちえた最大の喜びは読書だつた、読書のみであつた。このやうに言ふと、大ていの人々が、捕虜というやうな環境に読

書の余裕や便宜があつたかと訝しがるのが常であるが、事実あつたのだし、しかも考へやうによつては、この世に於て稀にしか見出しえないやうな必死にて有効な読書三味であつたと言ひうるのである。全部左むけした（もちろんソヴェート人自身は真つすぐに向いてゐると思つてゐやうが）国是の中に於て、これはソビエト人の示した並々ならぬ恩恵と寛容であつたに違ひない。

然し最初の年、ウラルをはるかに越えてヨーロッパ地帯に深く入りこんだ森の中で送つた最初の冬は、漸くに活字への飢ゑをはげしく感じ出したが、思ふやうに本に打込むことはできなかつた。第一に電燈がない。日中でも薄暗い土窟のバラックであつたから。そしてまた明日にもダモイと不可能をのぞむ焼くやうなノスタルジアにいつも心が騒いでゐたから。更にまたロシアの冬の日の短かさ！ 北緯五十度をはるかに北に越してゐるこの辺は、日の最も短かいときは、太陽は朝九時ごろ出たかと思ふと、もう三時ごろにはどこかに行つてしまふ。しかも日本の北陸の空模様をやうに、大ていは薄暗く底冷えする雪空である。次の年われわれは、汽車に数昼夜を寝て、更に八十料の行軍をして、エラブカといふ辺陲の小さな町に移動した（移動させられた）のである。この町は、その昔革命以前

は、わが信州の長野市に似た一つの宗教都市とも言ふべき体裁を持つてゐた。今はむなし  
い廃堂となり、時には倉庫に使はれ、牛や馬が遠慮なく入りこんで、不潔なものを垂れ流  
してはゐるが、かつての繁栄をしのばせる天にも聳える幾つかの大伽藍が、はげしい浮世  
の動乱を秘めて、ひっそりと静まりかへつてゐる。われわれの住んでゐる建物のそばを、  
ボルガの一支流たるカマ河が静かに淀んで、いづこに行くともわからぬ鷹揚わうようさをもつて大  
平原を流れてゐた。

このやうな環境にわれわれは三回の冬を送り迎へた。この度はともかく電燈があつた！  
停電や故障はしょっちゅうではあつたが、またラポータ（注、労働のこと）はあつたが、全  
体としてはさうはげしいものではなかつた。この期間にわれわれは方向を指示されぬ随意  
的な読書の日々を持つた。生きる道を、いつ死んでも安心瞑目できる救ひを期待しながら  
読書へと沈潜したのである。

さて、そこには一体どのくらゐの書物があつたらうか。收容所は二つに分かれてゐて、  
自分の住む方は約三千人、もう一つの方は約五千人の、概ねもと将校のみの集団であつ  
た。二つの收容所の間は、いくらか距離はなかつたが、交通は自由ではなかつたので、従

って本の融通はきかなかつた。そして自分の方はと言ふと、たしかな推測ではないが、五人に一冊の割としても六〇〇冊は優にあつたに違ひない。書物目録を作つて、回覧の便をはからうとしたことは再三だつたが、いろいろな事情でつひにこれは出来なかつた。

それでは一体どのやうな種類の書物があつたらうか。——昭和二十年八月上旬の満州における戦闘開始、停戦、武装解除、血と汗にまみれた異常な混乱、ひきつづく現地監禁（この間にあとでロシアの奥深く運び込まれた書物の大部分が準備されたわけだが）、生きるか死ぬのか、明日にも日本に帰れるのか、雪のシベリアに流竄（るぞん）（島流し）の身をさらすのか、悉皆わからぬ運命の岐路を経て、結局は引きつづく長いロシアの抑留生活となつたのだが、このやうな心境と環境にあつたわれわれが、どのやうな種類の書物をつひに身を離さず持つていつたか？——これはたしかに一つの好個な白紙戦術（注、軍隊の用語。何の予備条件も示されない戦闘計画）？ともなり得ようか。

思ひもかけぬ天地顛倒の動乱にあつて、信じてゐたものは、はかない偶像としてぼやかかり、たしかに目の前にあつたものが、懷疑と不安と焦燥の霧の中に消え去らうとする、あまつぎ剩へ生死のほども何物も保証してはくれないのだ……かくしてそれは多くは哲学書

であり宗教書であった。このやうな種類の本は、ほんのちよつと前までは、傲れる植民地の日本人の平常の生活に於て、本箱の塵の中に眠つてゐたに違ひない。そして皮肉にも彼らはこのやうな運命に於て再び日の光を浴びることになつたわけだ。

第一に西田幾太郎博士のさまざまな著作集とその門下と覚しき人々の西田哲学解説書。特攻隊予備軍として育てられた二十歳前後の青年の間に、西田哲学は、大した勢ひで、しかも嘗てこの書を読んだいかなる情熱にも劣らぬ熱烈さで、一つの手から他の手へと渡つていった。あの無類の難解さにも拘らず大衆の前で時には朗読され、日常の人々には到底考へ及ばぬ事ながら、数百頁を数へる活字の一つ一つが手写された。もとより書物なるものは海中の眞珠の如く乏しく、人は天上の星の如く多い。何物かに全力をあげてぶつつからねばすまされぬ青年の生きんとする命の情熱は、浩瀚難解な書物の筆写に於て燃焼された、と言つたら事些か大げさに過ぎるであらうか。自分にしてからが、その昔汚い原稿は眺めただけでもうんざりしたのだが、このやうに書写されたものを見るのが平常化されると、しまひにはむしろ原書それよりも何か迫力ある稀覯本のやうに思はれてくるまでになつた。ともかくそこには文字が綴つてある。しかもそれに連続した一つの立派な意味を

現はしてゐるのだから、否、ゐる筈だから。西田哲学が、このやうな地上稀に見るナイーヴな讃仰者に、果してどれだけの血肉を与へたか確めるよすがもないが、筆者に関する限り、それはパンを求めてさまよふ旅人にとつての高嶺の花であり、戦ひを外にのどかな京の街の書齋での観念であつたと、身の恥をさらすことにならうとも、告白せざるを得な  
 5。

不幸にして西田哲学は反共的であつた。すくなくともそのやうに影響したのであつたから、それは現代ソヴエートの国土に咲くべき花ではない。西田哲学の徒と、ロシアに於ては正統の嫡子たるコミニステイツク日本人との間に、はげしい論争が行はれ、それは収容所の壁新聞を賑はしたものであつた。

次いで禅宗の語録公案類。『大同無門関』の如きは解説の著者を異にするものが三種あつた。弘法大師の『三教指帰』。法然親鸞（ふじやう）の法文集。日蓮の『立正安国論』その他。道元の『正法眼蔵』の一部及び懐奘（ふせう）の『正法眼蔵随聞記』。吉田松陰のもの、また松陰に関するものあまた。カント『純粹理性批判』の上巻もあつたし、しまひには昔なつかしい『幼学綱要』の初版本さへ出てきた。聖書の如きは言ふまでもない。



回覧は自づと出来た一定のルートを通つて、概ね規則正しく水の流れのやうにつづいた。今もなほその道を説くと聞く富永半次郎翁の法華經の講義録 *Vayadhamma sankharā*。生きてともかくも日本の土を踏むといふことが、捕虜たるわれわれ一人一人の地熱のやうに身をはなれぬ当面最大の願ひであつたのだから、その点にのみ関して言ふならば、この書は多くの功罪を作つた。然し何れにしても叙上の佶屈聱牙（文章が難解で読みにくいこと）の書を一通りでも読めたといふことは、何れかに対して深甚の感謝を捧ぐべき事でもあらうか。

文学書に關して言ふならば凡百、到底いちいち名をあげて記す煩に堪へない。一九四六年から四七年にかけての冬の間に、思想的指導の先進機関であつた『日本人クラブ』の肝入りで冬季文化講座が開かれたが、その時筆者はまことにをこがましくも文学部門を担当して、更にをこがましくも『明治文学史』を講じたことがあつた。講義は断続して三十有餘時間になつた。その原稿は、自分の七、八年前の記憶の上に所在の材料を組立てたのであつたが、ともかくも要所要所に作品の實際を引用しつゝ、いけただけ、それほど日本文学に關してもかなりおびただしい書物があつたことは想像していただけると思ふ。（但し叙

上でもわかるとほり、国文学史の類は一冊もなかつた)

明治文学発展史上の時代区分の如きも、粟田寛氏の『日本文化史』その他二、三の日本史類書を参考にして勝手に立てたのだが、帰ってから文学史を繙いて見て、先づ先づ当を得てゐた事を思へば、凡そ人間のこと想をこゝにひそめる時材料の乏しきは言ふに足らぬとまで思ひ上るのである。正岡子規の唱道した『写生』の修練の意義や芥川の文藝時評のすばらしさをつくづく身に沁みて覚えたのもこの時の事であつた。

それではロシア（正しく言ふならばソヴェート同盟）その国のものについて言ふならば、直接的な読書は先づ皆無であつたと言ふ外はない。自分は前から現在に至るまでロシア文学は好きである。あの十九世紀初頭プーシユキンに始る燦然たるロシア小説文学を世界最高峯の一つとして推賞するをばからぬ者だ。「その国に来て」（このやうな題目でかつて收容所の新聞にロシア文学の思出を書いたことを思ひ出す）つとめてぢかに十九世紀以前の、日本では読めぬ作品に接したいと願ひ続けたが、つひに思ふやうにはいかなかつた。ロシア語に極めて堪能な通訳もゐたが、テキストを手に入れることが終始できなかつたやうだつた。後になつて一九四八年以降ハバロフスク時代に、普く收容所にゆきわたつ



た邦訳バブレンコフの『幸福』（第一第二部）、『征服された民』（著者は忘れた）前の現代ソヴェートの傑作の二、三を読んだ外、例の『日本新聞』によってソヴェート文学の唯一にして最大の手法たる社会主義リアリズムについて聊かの概念のみを知りえたに過ぎない。プーシュキンのタチャーナ（『オネーギン』）を、ドストエフスキーのアリョーシャ（『カラマゾフの兄弟』）をこの目でこの身で知りたいといふあはれな、しかもアナクロニステイックな筆者の夢は、スターリン第四次五ヶ年計画をまさに完遂せんとする凄じいエンジンやベルトの響きによってあまりにも当然に消し去られたのである。

和辻博士の『風土』『日本古代文化』等に触発され、異国の丘のほとりに読んだ『萬葉集』、日本の空気の中にあつては、かつて氣のつかなくつたやうな日本の風物の一つ一つが、このやうな「ヨーロッパ的風土」のさ中であつて、いかに痛烈に身をさいなんだか、そのやうな感懐についても尚多くの語りたい事があるが、もはやこの辺で十九世紀のロシア貴族の如き饒舌は切上げねばなるまい。ソヴェート同盟は本年既に革命第三十三週年記念を迎へるほどに成長したのだから。

（昭和二十五年十二月 上伊那教育会『上伊那教育』第四号）

### (三) 邂逅

本篇はドキュメンタリーの体裁をとつてゐる。

舞台は、前段は敗戦時の満洲国（現在東北三省）延吉、中段は、前々篇「日記抄」また前篇「読書録」と同じの、ロシア共和国タンポフ州ラーダ及びタートル自治共和国エラブカであり、後段は戦後十数年あとの長野県伊那の地である。

本篇の主題は、ヨーロッパ、ソ連邦に投入された被抑留者（捕虜）集団及び個人の心理的生理的状况と、その自棄頽廢を救ふ契機をなした実在の一人物を描かうとしたものである。

しかし、これがヨーロッパ・ロシアでなく投入されて間もなく零下三、四十度に達し、ろくな収容施設もないシベリアの天地であつたら、死と直面する急迫の状況下で、惨憺たる別の運命をたどつたことであらう。

快男子といふ名に値する存在において、堤温つひなほ以上の人物を自分の周辺や体験の中に見つけ出すことは甚だ困難である。もつとも日常かれと起居をともにして生活すれば、あるいはもつと別の面を発見することもあるに違ひない。

ぼくがかれを知つてゐる、もしくは知つたのは、一言にしてその人物を評するならばさうしたことばで概括するより外言ひやうもない、いくつかの強烈に印象的な事実を通してであつたせいもあらうかと思ふ。

かれにとって、ぼくは決してごく近い親しいといふ存在ではない。かれと直接至近のところ起居をともにしたこともなければ、相対して永らく語つた記憶もない。かれのことを始めて知つたのは、満洲における大東亜戦争敗戦の時期で、その後ソ連の捕虜収容所で、ある期間収容所を同じくして暮したことがあるだけである。同じ収容所と言っても、関東軍の将校ばかりの八千人からの大勢で、半地下バラックにもぐらの集団のやうに暮してゐて、しかもかれとは宿舎を異にしてゐた。生活上の接触といふ点からすれば、ぼくのこれまでの生涯にも、親しさといふ点でかれ以上の存在がそれこそ何百何千とあつた。

客観的には、こんな淡い関係にありながら、ぼくがかれによって与へられた印象なり感

動なりを忘れることができない。さうして何よりも先づ、かれの本当の姿を知つてゐるものの一人はぼくであるといふ確信を何となく抱懐してゐるのである。誰よりもと言へば無論僭上なことばであるが、かれの魂と言はるか志と言はるか、かれの行動を一貫するものはたとへ何年会はなからうとも、いつもぼくの心に通じてぼくのすぐそばにあるといった感懐を放つことができないのである。

そしてそれは、たとへつたない表現であつても、ぼくの口を通してぼくの筆を通して、できるだけ広く世間の人々に知ってもらふことを求めてやまないものがある。

だから、これからあらあら記す堤温の印象は、文字どほりぼくの印象であつて、事実とちがつた多くの記憶の誤りを犯すことになるに違ひない。しかも時期が、ソ連軍の不意の侵入によつて敗戦の状態において迎へた停戦武装解除、一挙にして起つた日本人の権力の壊滅と生活の崩壊、大量の避難遁走などの、まことに異常な混乱と興奮のつぼの中のそれ、これを受けとめる個人の心象や記憶も、いきほひ平静正確を期しえなかつたのは止むをえないのである。といつて、関東軍国境守備隊付の一中尉のことなどめぼしい記録類に残るべくもない。ぼくは、だから、ぼくの記憶のみに頼つて大胆にかれのグリンプスを

描いてみたいと思ふばかりである。

### カチドキ山陣地の勇士

昭和二十年（一九四五）八月下旬、満洲間島省延吉市に駐屯してゐた第三軍司令部はソ連軍の命によつて司令部庁舎を追ひ出され、市内の旧歩兵連隊兵舎に移り、そこに概ね延吉市を中心とした隷屬部隊の兵員の一部と、着のみ着のまゝで続々と前線地帯から引きあげてくる老若男女の邦人を収容してゐた。この雑多な集団は、一日二食の雑炊をすゝることを仕事として、茫然としてしかも混乱した毎日を過してゐた。

すでに武装解除は完全に厳しく行はれてゐた。武器の一切を剝奪された日本軍は、爪牙を剥ぎとられて檻に入れられた狼の群れのやうに、朝夕の点呼の外は、特別の用向きものを除いて、狭い兵舎に雑魚寝をし、空虚で放心したやうな日々を送つた。

衛兵所や兵營の四周には、いつの間にかソ連兵が配置され、かれらは、われわれの存在などかつて念頭に上せたこともないやうな無関心な態度で、中にはわれわれがマンドリンと呼んだ自動小銃を握つたまゝ、草原に寝転んでゐるものもゐた。

押収した大小の兵器は、それ以前に南方や内地や中国に莫大な数量を移送してしまつた後とは言へ、かなりの量に達したであらうが、それをどのやうにして運んでしまつたものか、狭い柵内に軟禁されてゐるわれわれの窺知できるところではなく、いつの間にか影も形もなくなつてゐた。たゞ柵外の小高い丘には数台の日本軍の軽戦車が、雨露にさらされたまゝ、打ち捨てられてあり、そのかたはらを巨大なT V戦車が、大象が野犬を見おろすやうな傲慢な轟きをひゞかせて通ると、いよいよみすぼらしく身をちぢませるやうで、あたかもこの豆タンクが現在のわれわれ自身の象徴のやうに見えるのである。

昨日まで日本馬と呼ばれ、われわれのしもべであつた軍馬は、ソ連兵を乗せて疾駆するのであつた。手綱一本のはだか馬に乗つたかれらは、滅茶々に馬腹を蹴つて縦横にわれわれの眼前を駆けめぐつた。思い切つて振り落して気絶でも即死でもさせるがいゝと歯をきしらせてゐるわれわれの目にも、ソ連兵の騎乗は、巧みとは言へぬながら、いかにも人馬一体のものなれた荒々しさを見せた。

近 遊 われわれが司令部庁舎から歩兵連隊兵舎に移されたその時から、軍司令部の機能は完全に失なはれた。なぜならば、その時から通信伝達機関の一切がわれわれの手から切り離さ

れ、隷下配属下の部隊の殆んどすべてが、その所在すら知ることができなくなつたからである。またその日から、野戦貨物廠の持つてゐた食糧その他の資材がソ連軍に接收され、われわれはその日から一粒の米さへもソ連軍当局の憐れみにすがる外方法のないところに追ひ込まれた。

武器を奪はれ戦闘態勢を放棄し、柵内へ閉ぢ込められたわれわれのできることは、またせねばならなかつたことは、司令部をたよつて遁入してきた夥しい一般邦人と軍人家族に何とかして生きつなぐべき食糧を与へ、また時折泥酔して強暴化し、女を出せと拳銃をつき出しながら乱入してくるソ連兵から、女たちを守ることであつた。

かうしてわれわれは、当時はまださうしたけがらはないことばで自分らの現状を肯定することは到底できなかつたけれども、既に一時を一般非戦闘員といつしよにゐるといふに過ぎない完全な捕虜であつた。だから、そこには既に自虐的な卑屈さや空虚な自暴自棄や建制の崩れや、また何とかして自分とわが妻子だけは生きて助かりたいと願ふ利己的なずるさが息づき始めてゐたが、しかしそれを誇張することは、わが記憶に忠実である所以を逸することになると思ふ。



冬も早く、従つて秋も早い東滿の丘陵に、朝夕もう心なしか冷えっぽい風の吹きたつ頃であつた。時たま放心したやうに、かつての日本軍の營庭に出て仰いだ、あの、底の抜けたやうな空の青さをいまでもつて忘れることができない。にはかに鉄条網を張りめぐらした營庭の柵外には、見なれた丘や野や、黄色っぽい道やくすんだみすぼらしい滿人の家々や赤煉瓦の軍隊の庁舎や官舎がながめわたされた。しかし何といふ突然の転変であらうか！

つい昨日まで、われわれは自動車や馬やまた歩いて、自由にそれらの上や間を通り、自分の設計のまゝに自分自身の生活を持つことができたのだ。いまはわれわれの目に触れるそれらの一切が、われわれを拒否し、われわれを極めて限定された域内に閉ぢこめてゐる。なまじその範圍ではわれわれが自由に遊歩できるかなりの広さの營庭があつて、そこから昨日までと少しも変らない山野や延吉の市街地の一角が見えわたされるだけに、失はれた自由や百八十度転回の境遇への痛感が、われわれの胸をかきむしるのであつた。

そのころものした一句をぼくはまだ記憶してゐる。

三十齡 虜囚の月に号泣す



元來あまり勇氣のないぼくなんぞは、さうした境遇に陥ると、特に空氣のやうに無氣力になり、臆病根性のとりこになったことを自らに対する恥辱感とともに脳裡深く刻み込んでゐる。深夜乱酔したソ連兵が、女ばかりの宿舎に押し入って、ピストルを擬しつゝ襲ひかゝらうとするとき（實際さうしたことはかなり頻繁に行はれたのである）運悪くその場にお合はせたら、見もしらぬ日本人の女のために、その銃口の前に立ちはだかつてその貞操を守ることがあへてしたかどうか——記憶の中のぼく自身は、意氣地なさに首を垂れながら否と言ふのである。それは、あのころのことを思ふときいつもよみがへってくる、いはば生理的とも言つていゝほどの苦い反省の一切れである。

堤中尉の国境における勇士ぶりを聞いたのは、おゝよそ右のやうな境遇と心もちにみたころであつた。

敗戦決定の年昭和二十年も、八月尽日に近いころだつたと記憶する。

ある日、赤軍の連絡將校が、ひどい汗くささを発散させながら、収容所の本部にどなり込んできた。かれは顔を真赤にしながらもものすごい早口でわめきたてた。

まだそのころロシア語にたどたどしかつた加藤通訳がからうじて判断したところによる

と、

「ミカドは降伏を命令したのに、カチドキ山の日本軍はなぜ戦闘をやめないのか。」  
と言ふのである。

四人の日本軍参謀にとってそれは初耳であつたが、中にこの旬日の汚辱の思ひに堪へかねてゐた河野参謀は、何か胸の中がすつとして心中にやりとしながら、加藤通訳に言つた。

「加藤、こんな具合に言へ。司令部はカチドキ山への通信連絡方法を持たぬ。ロシア軍はほとんど攻撃して自分で降参させろ。」

加藤軍曹は、汗だくだくになつて、身ぶり手まねまで入れてその意を伝へようとする。やつと通じた証拠に、その赤軍将校は、一層顔を真赤にしてどなつた。

「たくさん砲弾をぶち込んだが降参しない。ソ連はむだに兵隊を殺さない。カチドキ山の日本軍は、夜やってきて手榴弾を投げ込む。ソ連の兵隊が多く死んだ。将校も死んだ。」  
結局のところ、停戦のために参謀をひとり連行するといふことになつた。

近 選  
（以下は河野参謀の話である。正確に言へば、河野参謀の後日の話としてぼくが記憶し

てみるところである。」

河野参謀と加藤通訳を乗せたジープが延吉の飛行場に着くと、そこには、何時の間に準備したのか、ソ連の飛行機が待ってゐた。

機上で連絡将校が言った。

「もしカチドキ山の日本軍が降伏しないなら、お前は銃殺される。」

東寧の飛行場に着くと、再びジープに乗せられてカチドキ山陣地のある国境線に向かふ。

東満洲がソ連領沿海州と境を接するところは、蜿蜒として数百軒に及ぶ山岳地帯で、およそ綏芬河以南十軒にわたって渾春兵団の担当する朝鮮国境に近い地帯を除いて、第三軍隷下第一国境守備隊の陣地帯であった。カチドキ山は、標高千米ぐらゐであつたらうか、その長い山岳陣地帯の主要な一角で、峰の頂きは極めて狭く特にソ連側に向いて急峻な傾斜をなしてゐた。

一体、昭和二十年八月九日早暁の、ソ連軍の満洲侵入は、当時国境地帯に殆んど一兵も残さず日本軍が引きあげてゐて、がら空きであつたため、この国境地帯がいかにほど堅固で

あるかをつひに証明することはできなかったが、航空兵力がほど同勢であるならば、三十糎口径砲ぐらゐまでの砲撃を伴ふ戦闘に対しては、先づは難攻不落であると言つても過言ではなかつた。

地表近いところでは一米ぐらいの厚さを持つペトンの坑道が、まさに蟻の巢のように掘りめぐらされ、爆風によるガス侵入を排除するため要所要所には扇風機までも備へつけてあり、深い谷間谷間の死角を全然なくすために精密に計算された砲の配置がなされ、それは地上また空中から完全に遮蔽されてゐた。何の変哲もない、山肌の草地から、必要に応じて忽ち三十糎榴弾砲が、驚くべきその巨身をもたげるしかけを完璧に施してゐた。

敗戦時における関東軍は、その兵力数こそは最盛時のそれを著しく下まはることはなかつたけれど、現地徴集のにはか兵のための質の低下は著しく、特に南方・中国・内地本土へ身ぐるみ主要兵器を転送したため、その威力はまさに実質的に地に墮ちた、いはばそれは張子の虎であつた。砲一門も持たぬ砲兵隊さへ尠くなかつたのである。

このやうな劣弱態勢となることを予想できた昭和十八年初めから、関東軍は、北満東満の長大なる国境線による広正面作戦が到底成りたゝぬことからして、有事の時吉林に戦闘

司令所を置き、その北と東に、二重の防禦地帯を構築する収縮戦線を設定し、現第一線国境地帯から逐次兵力火器を後退させた。戦況不利のときは、更に後退して朝鮮国境の長白山脈の線に集結し、在朝鮮軍と合流して、最後の抵抗を試みる構想であつたと思はれる。

八月九日未明威力偵察を兼ねた飛行機の爆撃銃撃に始まつたソ連軍の満洲侵入のとき、国境守備隊は殆んどすべての兵隊と兵器をひきあげ、東寧正面の陣地は、地下の無人の廢墟となりつつあつた。たゞカチドキ山陣地に主力引揚後の整理のため、斉藤大尉を長とする八十数名の一箇中隊が残留してゐたのである。しかもこの斉藤中隊もあと旬日で主力に合流すべく引揚準備中であつた。

東滿国境地帯に押し寄せたソ連軍の戦法は、われわれがのちにところてん式攻撃と呼んだやうに、およそ日本軍の常識をこえる奇妙なやり方であつた。長大な国境線に添うてべた一面に兵力を山の裾にはりつけておいて、命令一下、そのまゝ前進攻撃させるのである。抵抗のあるところはその抵抗の量に應じて前進のスピードが落ちるだけで、抵抗のない部分はそのまゝするすると入りこんで来て、隣接友軍との連繫など全く眼中にないかのやうであつた。そのやり方はあたかも一つの物理的現象のやうであつた。それは、ヨーロッパ

ツバの戦場で独ソ戦を戦った物的人海戦術と同じ思想から発してゐるやうにも思はれた。あるいは、密偵や国境監視哨などの報告によつて国境線にはもはや日本軍はゐないことを見きはめた上での処置であつたかも知れない。

八月九日朝、カチドキ山の正面にソ連軍がぼつぼつと姿を現はしたのは、やうやく太陽が上つて深い霧が谷間から晴れ上つた頃であつた。かれらは遠くから手あたりをためすために時々山の頂上あたりに弾丸をうち込むが、起伏する山なみは静まりかへつてゐて、ことりとも音をたてない。数百のソ連兵が山の裾にとりつくころは、この山も無人だと思つたのであらう。銃を天秤てんびんに担いだり背中にしょつたりして、まるで朝の散歩でもするかのやうに、のんびりと急斜面をのぼつてくる。

払曉上空をとびこえるソ連軍飛行機の爆音によつてソ軍侵入を知つた斎藤中隊は、わづかに残つた迫撃砲四門と小銃をたのみにして配備を完了し、満を持して待機してゐた。至近の距離に入るまでできるだけ敵をひき寄せておいて一挙にたゝかうとするのである。

近 二、三米置きに射塚しゃたに就いてゐる兵隊の顔は緊張して蒼味を加へ、銃把じゆうはを握る指がかすかに震へながら、隊長の命令を今や遅しと待つてゐる。

五百米、四百米、三百米と敵は次第に近づいてくる。急傾斜を這ひ上るのであるから時間がかゝるが、やがて先頭が二百米、百米と距離がちぢまった。つひに五十米、今だ！と斎藤隊長が「射て」とはげしい一令を与へる。やゝはなれていた堤中尉が、これを受けて「射て、射て」と伝へる。

迫撃砲四門と数十の小銃が一斉に火だまを吹いて、ソ連兵をバタバタとたふす。文字どほりかれらにとっては、青天の霹靂であつたにちがひない。斃れた仲間をそのままに算を乱して逃げ下る。その逃足の早さ、あつといふ間にかれらの姿は蟻の群れのやうに遠のいた。

それから二、三時間したころ、今度はかなり遠方からはげしく射撃を浴びせながら、増強した兵力が徐々に近づいてくる。三、四百米のところからはなかなか前進しない。第一回の攻撃に痛手をうけたのがかなりひどいたにちがひない。自動小銃ぐらゐではびくともする陣地ではない。兵隊はすべて坑道の中に入れて待機させ、斎藤大尉と堤中尉は交代で敵の近接状況を展望口から視察してゐる。

いくら射つても何の反響も示さないのに、業を煮やしてか、あるいは制圧が成功したと



思ったのか、それから二時間ほどすると、また頂上近くにきた。今度もまた同じであった。迫撃砲と小銃による一斉射撃、敵の遁走。迫撃砲は攻撃縦列の中間をねらったので、逃走する兵は、斃れた仲間を踏んづけながら走るのも見えたといふ。第二回目でやうやく落着きをとりもどした兵隊たちは、精確な照準によってひとりひとりに確実に命中させた。

翌日から敵の猛烈な砲撃が始まった。カチドキ山正面の、かなり深い谷を隔てた丘陵地の向ふ側には、次第に野山砲級の大型砲を集結し始めたらしい。早暁から始まる砲撃は、まさに間断なくカチドキ山の周辺に降り注ぎ、つひには夜間に及んでも砲声を止めなかった。

わが方には敵と同じくらゐの弾着距離を持つ砲是一门もない。しかもその後は歩兵部隊の一兵も近づくものがない。たゞいたづらに敵の砲撃下に穴ぐら生活を強ひられるだけである。

近 廻

敵の一斉砲撃が始まって間もないある夜、堤中尉は、十名ぐらゐの斬込隊を編成し、夜陰にまぎれて陣地を下り、谷川をわたって次第に深く敵地に侵入していった。かれらはて



んでに数発の手榴弾を背負ひ、着剣した銃を負ひ、目じるし用の白い巾広（はぎひろ）のたすきを掛けてゐた。つひに敵の幕営地にぶつつかることができた。この一団は、堤中尉の合図によつて一斉に手榴弾を幕舎に投げこみ、驚いてわめき騒ぐソ連兵の群れの中にとび込んで縦横に銃剣でつきまくるのである。ころあひを見て堤中尉が呼子を鳴らすと、兵らは、予め示されている集結場所に集まる。人員を確かめると、またもとの道をたどつて、数料の自分の兵舎にもどつた。

その翌日からこの、極めて小規模ながら、夜間の急襲にひどくいかりたけつたソ連軍の姿勢を示すかのやうに、カチドキ山目ざす砲撃は一段の激しさを加へた。斎藤中隊の主力は昼間は何のすることもなま、充分眠つた。夜になると、すこしづつ方向と通路をかへてまた山を下りソ連兵を夜襲する。その夜間奇襲隊長は、殆んど連夜堤中尉であつた。

八月十五日正午、天皇の停戦の放送は、雑音でひどく感度がわるかつたが、日本海をこえ、朝鮮の上空をわたつて、こゝカチドキ山陣地の受信機にも入つた。斎藤大尉は堤中尉ほか二三の下士官を呼ぶと、みな意見を聞いた。結局これは、ソ連の巧妙な宣伝謀略の一つの手段であると結論し、依然として斬込みによつて一兵でも多く敵に損害を与へなが

ら持久の態勢をとることを改めて全員に命じたのである。

この日から始まって全滿各地で日本軍は降伏し、ソ連による武装解除やあらゆる資材の奪略、日本軍及び居留民の一定地域への集結軟禁が進行した。

しかし、カチドキ山陣地のみは、何ら降伏の意志を示さず、相も変わらず暗夜意外の地点に出没して、縦横にあばれ廻るのである。

正面のソ連軍主脳部が怒り心頭に発したかを示すやうに、砲撃ももはや全く昼夜を無視して、連日連夜莫大な弾薬量をカチドキ山にたゝき込んだ。しまひには二十糧以上の巨砲をも含めて三十数門を集め、その轟音は、殆んど無人の山谷に気がひのやうに荒れ狂った。

山容ために改まるといった形容は、このやうな場合に使はれるかと思はれた。しかし前述したやうに、無類の堅固さを持つ陣地は、多少土くづれした坑道の一部を除いて、いささかも被害を受けない。たゞ斬込み夜襲によって、数名の兵が敵地で傷き斃れたが……。かくして八月も末日に近づいた。

近  
河野参謀が、ソ連将校に連行されて、カチドキ山陣地に着いた時、斎藤中隊は右のやう

な状況下に、隊長以下意気盛んなものがあつた。

東寧飛行場から国境山岳地帯まで約三軒あまりの平坦地がつゞき、その道が行きついで山に登りかゝるところに、頂上の主力が出てゐる衛兵所がある。その立哨中の衛兵の見える数百米の地点でジープはとまってソ軍将校は下車し、河野参謀に白旗をわたし、カチドキ山の日本軍が停戦に応じたときは、こゝまで見える地点でこの旗を振れと命じた。そしてかれは車を草の中に入れると、道ばたの低地に入つて寝転んだ。

参謀は、とことこと歩いた。後ろを振りかへると、早く行けといふかのやうに、そのソ軍将校が手を振つて指で脅す恰好を見せた。

衛兵は、近づいてくる日本軍将校らしい人影を見ると忽ちに誰たれかした。

「誰だ。」

「おれば軍の参謀だ。河野中佐といふ。隊長に用があつてきたから通せ。」

「何の用だ。」

「八月十五日に日本軍の全部が停戦した。こゝの陣地が戦闘行為をやめぬので、停戦を勧告するためにきたのだ。」

それを聞いて、まだ若い一等兵がいきなりどなりつけた。

「絶対に通さん。たつて通るならぶつ放す。」

「何で通さんのだ。」

「隊長殿が、いろいろな手をつかつて敵がうまいことを言うてくるから気をつけろと言つた。お前はにせ参謀だらう。絶対通さん」

かう言つてその衛兵は、腰に銃をつけ引金に指をかけて構へる。動けば即座に発射する面構へである。

それから参謀はあれこれとこの兵が承知しさうな説明を並べるのだが、かれももう全然口をきかぬ。依然として銃口をこちらの胸に真直ぐに向けたまゝである。

うしろをふりかへると、数百米のかなたながら、ソ連の将校が、草むらから首だけ出して、早くしろといふかのやうに手を振つてゐる。まさに絶対絶命、前進もならず後退もならず、参謀は草むらに腰をかけてぼんやりしてゐた。秋立ちそめた東満の山々の上に白い雲がぼつかりと浮いてゐる。

邂逅

それからどのくらゐ時間がたつたらうか、心なしか太陽の西への傾きが早まったやう

で、参謀は焦慮の思ひにたへかねたころ、二、三の兵がバケツをさげて谷川の水を汲むために衛兵所近くに下りてきた。その中にひとり経理部の見習士官がゐた。かれは近づいてくると、衛兵の前に坐り込んでゐる参謀に気がつき、不審な面持で暫らく見つめてゐたが、急に声をかけた。

「あつ、河野参謀どのではないですか。」

河野参謀が見ると、前に軍司令部で二、三ヶ月間経理部見習士官の集合教育をしたとき  
のひとりである。

「お、君か。」

「いったい何で来られたんですか。」

地獄に仏とはこのことかと参謀は心中小をどりする思ひであつた。——かくてやうやく  
河野中佐は山道を登ってカチドキ山陣地本部に入ることができたのである。

参謀は、齋藤大尉と相對すると、依然として炸裂する砲彈の音を頭上に聞きながら、関  
東軍がすべて降伏せねばならず、事実降伏した状況を話して停戦をすゝめた。

全兵員が召集された。参謀は軍司令官代理として、整列した隊長以下に、天皇の停戦放

送を伝へたあと、

「第一国境守備隊カチドキ山陣地齋藤中尉は、直ちに戦闘を中止し、別命する日時地点においてソ連の武装解除を受くべし。」

と言った。がくりと首をおとした齋藤大尉が抜剣を肩に押しつけたまゝ、「ううっ」と妙な声を出すと、堤中尉が拳で乱暴に眼をこすってどたりと坐った。全兵員がぼろぼろと睡眠不足の目から大粒の涙を流した。いろいろな思ひが一時にかれらの脳中にうづまいたのであらう。

これより前にソ軍連絡將校に白旗で伝へたカチドキ山中隊の降伏の意志が、どのやうにして連絡伝達されたものか、砲声はこのころ既に止んでゐた。

一切の書類や不要品を焼き、兵舎内を清めた齋藤部隊は、背囊を背負ひ完全武装をして山を下った。武装解除の場所に来ると、もうソ軍の一箇中隊ぐらゐが、自動小銃を肩にかけ射撃の姿勢で待機してゐる。野砲級の大型砲も数門若干離れたところに配置してある。

齋藤中隊長は、ソ軍の隊長とおぼしき將校を見つけると、

「武装解除をする前に日本軍の最後の作法を行なひたい。」

と申し入れた。ソ軍の日本語通訳が現はれてその旨を隊長に伝へる。「日本軍の最後の作法」といふのに奇異な目を注いでゐるソ軍將兵の前で、齋藤部隊は、喇叭を吹奏しつゝ、着剣の東方遙拝を行った。

迫撃砲や小銃や拳銃やが屑鉄の山のやうに無雑作に集められてしまふと、ソ軍の隊長が、妙に恰好のつかなくなつて丸腰のまま、整列してゐる日本兵の前に立つて大声を出した。

「斬込隊長、前に出ろ。」

堤中尉が四、五歩前に出た。そして真直ぐにソ連隊長の顔を見た。日に焼けた瘦せ顔の鷹のやうな目をしたこの少佐は、かれより四五寸長身で、(堤中尉はがっちりした短軀であつた。)独ソ戦線からこの東方国境の戦鬪にまはされてきたものか、軍服の襟が汗でひどく汚れてゐた。堤中尉の脳裏をこれまでのかれの半生の一切の記憶が電光のやうに閃き過ぎた。かれはこの少佐の右手が腰の拳銃のサックに伸びて銃口が忽ちに自分の喉もとに向けられることを覚悟した。——しかし急に全然予期しない奇妙なことが起つた。少佐は、二三步前へ出ると、堤中尉の肩を力を入れてほんぽんと二三回たゝいたあと、



「君は英雄だ。ソ連軍は勇気を尊ぶ。独ソ戦はわれわれの勇気で敵を撃破した。われわれは英雄を尊敬する。」

と言ったものである。

それから日本軍齋藤部隊の全員に向かい先づ隊長と握手をしたあと、「この部隊は英雄部隊である。われわれは諸君と握手する。」

と言って、自分もさも愉快さうに笑った。

事実、このソ軍部隊の、降伏した齋藤中隊に対する取扱ひは、きはめて丁寧で、儀礼にあふれたものであった。負傷した日本兵の手当のためには十分な時間を与へ、全員を自動車に乗せ、集結地点に輸送したのである。輸送の途中両軍の兵隊たちはいつの間にか仲よしになって、ソ連兵はかれらの郷土の歌を唄ってきかせ、日本兵は「うまいぞ」といふロシアことばを覚えた。このやうな事例は、あの数百里に及ぶ侵入迎撃戦線のどこにもつひぞ聞くことのできなかつたものである。昨日の敵は今日の友！ それはいはば、小型の且つは逆の形の「水師營の会見」であつた。

近 選 われわれは、右のやうな河野参謀報告談を聞きながら、何と形状したらいゝかわからぬ



思ひで、おのづと涙の流れるのをとどめかねた。鬱屈した感情の一角が解けて流れるかに感ぜられた。国境や民族をこえるものをそこに見た。それはヒューマニズムといふことばで言ひ表はしてもいいのかも知れない。

しかしながら、それは、その事件の後からつづく長い長い捕虜生活、ソ連の内側における囚虜の期間中においては、つひに再び感ずることのできなかつた、珠玉のやうな印象である。

### ラーゲリの歌手

さて、われわれは、特殊な例を除いて、かつて日本民族が経験したことのない大量の捕虜集団となつて、広漠果てしのないロシア平原に投ぜられたのである。それはぼくの場合、ほぼ五年といふ長い年月であつた。

いつたい捕虜とはいかなる存在であらうか。とくにソ連におけるそれは何であつたか。いまぼくは十年以上の歳月を濾過して、そのいくつかの主観的な条件を挙げることによつて捕虜なるものの特徴をぼくなりて概括してみることにする。

何よりもまづかれらは、いつも恐ろしくがつがつと飢ゑてゐた。気持の上でもさうだが特に肉体において慢性の欲求不満にとりつかれてゐた。かれらは寄るときはると倦きもせず食ひものの話を夢中でかはし、夜寝るときはきまつて偶然によつて食ひものといふ宝の山にでつくはしてたらふく空腹の欲をみたす夢を見た。昼間作業に出ても、本能のやうに食ひもののある方向を嗅ぎつけ、何とかその方向に一步でも近づかうとする習性を身につける。この慢性化した飢餓感を形容する最も適切なことばに「喪家の犬」といふのがあつた。ぼくは、うらぶれたおのれの姿に気づくときいつもこのことばをぶつぶつと呟いたものである。

さうした状態が三、四年も続くとかれはつひに、捕虜であつてもたまにえられるはずの満腹といふ生理的飽食感を失つてしまふ。まさに餓鬼道の餓鬼となりおほせるのである。これは文学的な修辭ではない。満腹を感じる神経系か神経細胞が如実にその機能を失なふのであらうか。

選 近  
事実、ぼくなんかも、あるとき、じゃがいも畑の収穫の作業に出され、畑の片すみでとりいれた諸いんの一部をゆでて食ふことを、許されたことがあつた。塩氣もないゆで馬鈴薯が

大量にわが腹中に入った。それは不気味なほど入った。胃袋の容積をこえたとき、げえげえと吐いた。吐いたあとまた食って、つひに何らの満足感もなかった。労働の疲れと、吐き出すために身をしぼる苦みのための疲労で、更に口の中に入れる動作を中止したに過ぎなかつたのである。同じやうなことを生の胡瓜で実験したこともある。

かれら捕虜はまた、うはずつたやうな病的なホームシック患者である。かれらの神経のうち、たとへば望郷神経細胞とも名づけられるべき部分は、まっ赤にたゞれ炎症をおこしてゐて、どんな微細な刺戟に対しても、はげしく反応をおこし痛みを覚え、つひには心臓の異常動悸や貧血のための顔面蒼白をひき起す。

あるものは、ひどくみじめにぼろぼろになって、わづかに原形を保つてゐるに過ぎない紙のお守り札を、いつまでも内ぶところにしてしまつてゐて、文字どほりはだ身離さぬのである。しらみの巢となつて有害な作用を及ぼすやうになつた千人針の腹巻を、まるで自分の肉体の一部でもあるかのやうに決して離さぬものもあつた。かれはもはや無論、それらが危急の場合わが生命を護つてくれるなどといふ魔力を信じてゐるのではない。それを見たリさはつたりするごとに、そのお守りを発行した村の鎮守の森を、ひいてはわが家を思ひ

出すのであり、なかんづくそれらを家を出るときそつとかれのふところにしのばせたり、身につけたりしてくれた妻の手の感触をまざまざ感ずることができからである。

さらにまた、この捕虜集団は、流言蜚語（根拠のないうはさ）あるいはデマを醸し出す心理を研究したり、その伝播速度を測定したり、それらがどのやうに変形しまた拡大されるかを検討したりするための、恐らく唯一絶好の機会を提供する存在であった。いづこかでふと発せられた一語が、恐るべきスピードで口から口へと伝はっていく間にとつともなくふくれあがり、あるいは尾びれ羽びれがついてもとの形と似ても似つかぬ相貌をもつて閉鎖されたこの黒い集団を揺さぶり、あるときは希望の、あるときは悲歎の極限に追ひやるのである。それは一つの台風のやうであった。われわれは、急襲する台風のたびごとに、ちぎれ飛ばされるばかりに揺れ動く木の葉であった。

このデマといふ台風に木の葉のやうに翻弄される心理的条件は、言ふまでもなく、帰還、つまり日本へ帰ることへの熱病的な渴望にあった。故郷へ！ いまでもぼくはこの言葉を書き記すとき、奇妙な心臓の動きを感じずにはゐられない。そして、すべてこのやうな尋常ならざる状態において、希望的観測といふものがどれほど人間の判断を狂はせるもので

あるかを身をもって思ひ知らされたのである。

かくて捕虜なるものは、よく「捕虜ぼけ」と言はれるやうに、独特の痴呆的虚脱状態を呈する。たとへいかほど考へたりあがりたりしても、結局は観念の空転以上には出られぬ環境においては、人間は思考停止に陥るのは当然でもあらう。牛馬のやうに、鞭を加へられ、ば動き、食ひものを置かれ、ばそれを食ふだけで、こと足りるのである。

特にその徴候は、二十才前後の、子どもものやうに若い将校連中に著しかった。かれらは陸軍士官学校で、日本不敗の信心と戦闘技術だけの速成教育を、馬車馬のやうにがむしやうにたゝき込まれただけであつた。さうしてかつて想像にのぼせたこともない、祖国の全面無条件降伏と、自らは捕虜といふ天地逆転の境涯に投げ込まれたのである。

しかも、はふり出された所は、人類史上始めての赤色革命に成功し、共産主義社会を目ざして殆んど三十年の歴史を持つソ連であつた。三十年の歴史は、この国において、全くと言つていゝほど、資本主義国においては見ることできない、異質の人間を作りあげてゐた。そのソ連人が戦争に勝つて、われわれを捕虜として生殺与奪の権を握つたのである。

ソ連やマルクシズムは、ともに天を戴かない敵としてしか考へることのできない、これら陸士五十七期や五十八期生が、このやうな事態において、全く自己喪失にも陥らず、自暴自棄の状態にならないとしたら、そのほうがむしろ不思議であらう。かくてかれらは、自己や自己の生活を支へる一切のものを失って、蒼白く瘦せ衰へ、幽鬼のやうにふらふらと無目的にさまよひ、何といふことなしに、ただいのちをつないでゐるといふ状態であつた。

かうした状況において、カチドキ山陣地の勇士であつた堤温は、忽然として、しかも今度は声楽家として、その姿を現はすのである。かれがさる音楽学院出身の、バリトン歌手であることを知ったとき、ぼくは、ひどく驚き、同時に大いに喜んだ。

総隊本部といふ捕虜集団の司令部の一員であつたぼくは、ぼく自らを含めて、この集団の持つ荒廃した自棄的ムードの暗さがやりきれなくて、何とか切り抜ける方法はないものかとしよつちゆう考へあぐねてゐたところであつた。

近 遊  
あの、赤いほほづきのやうな裸電球がぼつんとついてゐるだけの暗い湿っぽい建物、いつ帰れるかあてもない故郷への夢を夜ごとにむすぶことを唯一の楽しみとしてもぐり込む



冷たい寢床、——さうした捕虜收容所の一角で、堤温の歌った「荒城の月」他もろもろの祖国の歌を聴いた幾夜かの心の昂<sup>たか</sup>まりを、ぼくは今でも昨日のやうに思ひかへすことができる。

実際、堤温の音量も音質も、全くすばらしかった。音楽について無知であり、かつ音痴のぼくは、堤温の声楽について、たゞ感激感激とことばを並べるより外方法のないのがもどかしい。かれの全身から発する圧倒するやうな音響は、われわれの、心を揺さぶり通つて体育館ぐらゐの広さのへやの窓ガラスをビリビリと響き鳴らすほどであった。

聴衆の中には、しばしば泣き出すものさへあった。ぼく自身幾たびか汚れた手拭ひで鼻汁を拭ひ、涙を流したあとの爽快さを味はつたことだらう。

かれのがつちりした短軀には、音楽的エネルギーが充満してゐるやうで、両手を伸ばして絶叫するとき、かれはいまや壇上の一人の英雄であった。外では時に日本内地と同じ満月の白光があつたり、雪がちらちら舞つたり、またあるときは零下二十数度の寒風が吹き荒<sup>すさ</sup>んでゐたりした。

そのやうな、かれの音声によって激発された異常な心の高まりや感動をせめて幾分なり

と実感してもらふために、万人熟知のところであるが、「荒城の月」の歌詞の一部をメロ  
ディを口ずさみながらかきつけてみる。

春高樓の花の宴

めぐる盃影さして

千代の松が枝わけいでし

昔の光いまいづこ

.....

.....

天上影は変らねど

栄枯はうつる世の姿

うつさんとてか今もなほ

あゝ荒城の夜半の月

.....

近 題

かつてカチドキ山陣地の勇者であった堤温の心中には、いまうらぶれて、ヨーロッパ・



ロシアの辺土にさまよふおのれらの境涯に対する深い感慨が溢れてゐたに違ひない。かれはその全腹の悲憤を、郷国の歌に託して、陰暗な虜舎に、嵐のやうな音響をとゞろかせた。―聞きゐるわれわれの魂は、八千軒のロシア平原を飛びこえ、祖国の岸をあらふ日本の蒼波のうへを渡つて、戦ひ破れて山河残る故郷の空をさまよひつゞけ、過ぎ去つた幼ない日々のうへに帰るのであつた。そしてふとまた、ひもじさと寒さに慄へながら、垢と汗にまみれて寝台に横たはつてゐるおのれの現実にかへつては、深い溜息を吐きだすのであつた。

しかし、この天地転倒の逆変に茫然自失し瘦せさらばへて幽鬼のていになりさがつたわれわれにも、きはめて徐々ではあるが、何とかしてまづわが身を生き保ち、明日への希望を思ひ描く余裕がうまれてきた。そしてさらに、何故に日本はこのやうにみじめに敗れさつたのか、大木を腐らし倒した赤蟻の姿は何か、そして再建の方途はいかんといふまで、やうやく正気をとりのどしてきた。われわれは、日本民族の根本にまでたちかへつて、いかなる世界観がこれをたち直らせるに役だつかといふ問題に腰をすゑて立ち向かふ氣力を次第にかちとることができるようになつた。

昼夜となく襲ふ空腹感を忘れるためにも、無期徒刑囚のやうな不安を一刻たりとも放ちたいためにも、われわれは夢中になって互ひに議論し、こぼれ残った活字を貪るやうに拾ひ読んだ。

それは、いま思へばいはばゴマメのハギシリにも似た、空しいといへばまさに空しさそのものであったが、かうした氣力の回復なくしては、われわれはもつと多くの、いまなほロシア平原の草葉のかけに骨をさらす死者を持ったに違ひないのである。

かうしたわれわれの回復には、独ソ戦によって徹底的に疲れ衰へて自国民に食はせる食物もなかつたソ連が、やうやく立ち直りかけてわれわれに与へる給養も次第に改善されてきたことがあづかつてゐる事実も指摘せざるまい。

昭和二十二年秋から、本格的な日本への捕虜還送が始まった。旧関東軍将校集團の第一陣の出發も、このごろであった。極反動と目されたわれわれ一部のはつひに昭和二十五年の春まで止め置かれたが、主力の大部は引き続いて昭和二十三年暮ごろまでに、命保つて故山の土を踏みえたのであった。一刻千秋の思ひを、実に二年三年と重ねたものが、いまや日本海々上に乗り出たときの感慨——それはもはや同じ経験者でなくしては伝へえ

ないところである。そのとき、堤温と收容所を同じくしたものの多くの心には、かれの「荒城の月」の響きが高鳴りわたってゐたに違ひない。

あのころのことを思ふとき、ぼくは一つのぼくなりに納得した真理（あるいは心理と言ふべきかも知れない）を再認するのである。

人は思想的に生れかはり、また新しく生長するためには、かれの根源的な本質から再出發せねばならない。——といふことを。つまり、思想の継木つぎきといふことはありえない。それこそまさに竹に木を継ぐことにしかならないのである。われわれはたとへ理屈に破れても、おのれの心や情に不快な異物と感ずるものを受け入れることができない。たとへ受け入れても、これを消化しておのれの滋養とするわけにはいかないのである。

このやうなわれわれの根源的本質を呼び覚まし、そこから新しく生まれかはり、前進する姿勢と氣力を産みだしたものの、——そのやうに、ぼくはあのころの堤温を評価し、なつかしむのである。

めぐりあひ  
邂逅

昭和三十四年秋のことである。箕輪みのか中学校の最近新築成ったばかりの広大な体育館で、一千人をこえる中学生、それに数百の男女高校生、一部の父母たちを前に、オペラ「手児奈」が演ぜられてゐた。万葉集に見える。伝説の乙女、真間の手児奈をヒロインとする歌劇である。

手児奈が日ごとに踏みならして水を汲んだであらう（「立ちならし水汲ましけむ」と、のちの人が歌った葛飾かつよの真間の井（いづみ）のほとりに、若い青年男女が群がりよって、かの女を賞めたゝへる。同じ里の若い男たちで、かの女を妻にと思はぬものはないので、かれらはお互ひに、出しぬいてかの女の愛を求めるときをしないと、いふ約束を守り、かの女の自由な意志が、生涯の伴侶を求めるときに、みんなでこの新しい一組を祝福しようとして申し合はせてゐるやうである。

この地方に役人となって都から下った貴族の子弟の出現は、これら若者にとって脅威である。かれは美麗な衣服と、金色に輝くりっぱな剣を持って、都風の優美なものごとく、口説くちで手児奈の愛を求め。しかしこの求愛は若者たちがはらはらする期待をもって望んだやうに、斥けられる。

これら土地の若者たちにまじって、ひとりの、他国からきた、姿も力もそれほどはだつてゐないどころか、どこかたよりなげな若い男がある。その男の純ないちづな情愛にほだされて、かの女はつひにその愛をかれに与へるやうである。

はじめはかの女をこの里から奪はうとするこの男に対して、個人ブレイをしないといふ紳士協定まで作つてかの女を愛し守つた真間の若者たちは、当然はげしい憤りに燃えるがかの女の気持とこの青年の純情を知つて、つひにこの一組の新しい関係を認め、心こめて祝福の歌を唄ふやうである。しかしかの女の去つた真間の入江は、降りそぐ太陽の光もうすれ、押し寄せる浪も無気力で単調な響きを送るのみ。あとに残つた若者たちの、リーダーとも見えるひとりが、かの女の去つたかなたの空を仰ぎながら尽きることはない思慕の情を絶叫するところで、このオペラは終りを告げたやうである。

ぼくはこゝまでやうだといふあいまいなことを使つてきたのは、ひとつには無論歌劇といふ舞台形式に慣れてゐないせいでもあったが、ひとつには、劇の途中から、若者たちのリーダーとして唄ひつづけるこのオペラの主演者を、はてな、たしかにどこかで見たことがあつたと気づいて、さて誰であつたかとそのことばかりが気になつてゐたせいでもあつ

た。

耳が音楽的でないぼくは、はてな、あの声はたしかにどこかで聞いたことがあるといふふうには気がつかないで、短身ながらがちりしたからだつき、手をひろげて天を仰いで叫ぶ身ぶり、中にも浅黒くひきしまつてしかも気品のある顔だち、——それはたしかにぼくの脳細胞の一部に印象をとどめてある人物のひとりに違ひないと感じて、識域下の記憶をしきりに呼び起さうと努めてみた。

プログラムを見ると、このオペラ団は二期会といって東京芸術大学の卒業生ばかりで編成されて居り、間もなくぼくは、主演者が堤温といふ人物であることを知った。

堤温、つゝみすなほ、ぼくはこの名を幾度か舌のうへにのせてみた。ぼくの頭はせはしく動いた。十数年殆んど言っていゝくらゐぼくの意識に上らなかつたこの名は、過去の記憶の堆積の中に、影が薄くなって、眠りこんでみたのである。

選 近  
それに、あの時の堤温であると確認することを妨げたのは、かれが昭和二十九年東京芸大卒業となつてゐたからである。ぼくの知つてゐる堤温は、郷里の師範学校出身とかで、昭和二十年には、ぼくより二、三年後の中尉であり、最近において芸大音楽科を出た青年



とはちがふ。当時既に二十六、七才にはなつてゐたであらう。

しかし、やがて、舞台のかれの声とアクションを見てゐたぼくは、右のやうな疑ひがあるにせよ、これはまさしくあの時の勇者でありロシアではわれわれのテナーであつた堤温に違ひないと確信した。堤温だと悟つた瞬間からかれにまつはる記憶が徐々によみがへつてきて、その確信をいよいよ確かなものにしたのである。たしかに、舞台の上のかれは、卒業年次が近い一団の者たちに比して、老成さが目だつことである。

(後になつて、かれが芸大に再入学したことを聞いた。その時芸大受験年齢が二十六才までといふ制限のあつたのを、この秀才のためにわざわざ規約を改変してまで堤温の入学を許可したとのことである。)

ぼくはこの一団のオペラ「手児奈」のあとの合唱やら独唱やらの上演の終るのを待ちかねた。わくわくするやうな胸をおさへかねて、控室兼更衣室になつてゐた中学校の応接間のドアをあけた。入口に衝立ついたがあり、そのすぐそばで、堤温は、こちらに背中をむけて、汗をふき、舞台着から洋服に着かへようとしてゐた。ぼくは、ぶしつけにもその背中に手をあて、呼んだ。

「堤君」

かれは上半身はだかのまゝこちらに向いてぼくを認めると、いきなり立ちあがって両手で僕の手をとった。

「あ！宮脇さん！」

「よくきましたね。あれから何年になるかねえ。」

かれは、直接答へないで、

「あちらではまことにお世話になりました。」と力をこめて言った。

突然の闖入者ちんにょしゃと、はづんだ会話のやりとり**にびっくりし、怪訝けげんな面もちで立ってゐる一**座の若い人たちに、堤温がぼくを紹介した。

中学校長のご厚意で、ぼくはそれから一時間あまり昼食をいたゞきながら、積る話をひどく圧縮した形で**一気いっきにしゃべり合つた。**

近近りも食ひものの乏しさで荒れ果ててゐた。とくに人心の荒廃は甚しかった。これを救すくひ、ともにふるひ立つたためには音楽にまさるものはない。そのためにかれは更に一だんと本式



な勉強を思ひ立って、芸術大学に入学した。

かれが音楽によって立ち、更に教育オペラといふ分野を開拓して、全国の地方へ巡行するやうになつたのには、もう一つの秘めた決心があつた。それは各地を廻ることによつて、かつての自分の部下で戦死した者たちの墓まありをし、またその遺族に会つてねぎらひ、また古い部下の兵隊たちの安否を確かめたいためである、とかれは語つた。そしてその事例を二、三手短かにぼくに話した。

ぼくは、この十数年ぶりの奇遇によつて、かつての堤温がその本来の面目のまゝにさらに美事に生長し、いまやがっちり根を大地にはつてすつくと立つ一本の大木になりつゝあることを確信して、思はず感歎の叫びを発するところであつた。この忙しい一行の出發の時刻が近づいた。ぼくらはしっかりと手を握りあつて再会を約した。

木曾川の清流を聞きながら、河畔の落着いたへやで、かれと一献酌いっけんみながら、心ゆくまで往時を語り将来を話し合ふ機会を持ちたい。それは、いまのぼくの最大の願ひの一つである。

(昭和三十七年八月)

第二篇

日本の風土・自然と文化



(一) 草の露にも通ふところ——古歌・連歌・俳諧を通して

今から二十数年前のことである。わたしは、ソ連の捕虜となって、ヨーロッパ・ロシアのタンボフ州ラーダ、ついでタートル州エラブカといふ収容所に三年有余の生活を送ったことがある。言はずと知れた労働のあけくれであった。

そのあと一年有余のシベリヤ・ハバロフスクの、第二十一収容所生活へとつづくのであるが、右のラーダ・エラブカ地方は、ウラル山脈を越えた、オランダ・ドイツ・ポーランドなどとほぼひとしい緯度を示す北辺の地で、四季のうつりかはりから言へば、ほど短かい夏と長い冬の交替で、和辻風土学から言へば、牧場的風土の一部であるとする地帯である。

郷愁といふものは、この短かい夏の季節に甚しいことを体験したものである。屋外ではしばしば零下三十度をこす酷寒の時期は、不自由な捕虜生活では、生命を維持するのが、やうやくのことで、ノスタルジアの湧きでる余裕がないのであった。夏の晴れた日、特に広い原野で草刈作業などする折は、とぼしい昼げのあと、草原にねそべると、青い高い空

に浮かぶ雲に、あたりに立ちこめる草のいきれに、実際に胸が痛むほどの懐郷の情に全身を揺さぶられることがしばしばあった。

そのころ、幸ひのことに、ぼくの手許に岩波文庫本の万葉集があった。ソ連といふ異国において読む万葉集は、折目正しく四季の変化を持つ日本の風土、ひいては、そこに住む日本民族の心の生活、すなはち日本文化といふものの特質を鮮明に語りかけてくれるやうに思へたのである。

ウラジオストックよりモスクワまでおよそ八千軒と聞いた。ゆけどもゆけども果てを知らぬやうな、ソ連の広大な地域、そこから見る東海の島国日本は、大そう小さく見えた。しかしそこは、四時小鳥の声をきく、人情溢れた、ほんたうの人間の世であるやうに思へた。

この驚くべき風土のちがひは、必ずそこに住む人々の心のあり方のちがひを示してゐるものと考へたのである。マルクシズムは、風土の影響といふものを、その理論の構成上不具合のものとして否定するが、それはかへってマルクス理論のアキレス腱の一つであるにちがひないと思はれた。

作業の休みのある夏の日、万葉集卷二の、大津の皇子がひそかに伊勢神宮に下り、また上り来ませる時、大伯の皇女が作られた歌を読んだ。

吾が背子を大和へやるとさ夜更けて暁露に吾が立ちぬれし

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

「暁露にわが立ちぬれし」―何といふ美しい表現であらうか。その時、わたしは、ひよつと気がついた、ソ連には「露」がない！と。朝早く作業に出て、砂原を通っても、そこには、日本の雑草に似た背丈の低い草が生えてゐるが、みなさばさばと乾いてゐて、昨日の昼通ったときと一向に変わりが無い。いつも乾いた干し魚のやうである。「瑞々し」といふ日本語は、光沢があつて新鮮で若々しく美しいためには、野の若草が露にぬれた姿であることをあらはしたに違ひないと思つた。

才学に長じ、器宇峻達といはれたこの大津の皇子が、朱鳥元年（六八六）九月天武天皇崩御のあと、謀反の事が発覚して、年二十四歳をもつて死を賜はつた（持統記）と見える

が、伊勢神宮参詣は恐らくその直前のころであらう。皇子と同母姉の大伯の皇女は、当時伊勢の齋宮であつた。恐らく皇子の企図は察してゐたであらうと思ふ。姉が弟に「わが背子」といふとき、それは母の情に似たひびきがある。

夜明けの露に立ちぬれて、愛弟を送つたといふのは、暁の露とともに、暁の露を涙にして送つたといふことでもあらう。ヨーロッパ人が、たとへ露にぬれることがあつても、それは道路の撒水車の水しぶきで足や裾をぬらしたと同じく、ただ物理的な迷惑さ以上には出ぬことと思ふ。「露」のないソ連、すなはちヨーロッパ——こゝに日本の捕虜の集団が生きてゐるが、わたしを含めてかれらは何と孤独な存在であることか、と思つたことである。

いままで何の気にしなかつた小さな自然現象たる露、——その名が、もう古く万葉集から、かなり見えるのに、あらためてびっくりした。卷十には、秋雑歌の中に「露を詠ずる」一連さへあつた。

秋萩に置ける白露朝な朝な珠としぞ見る置ける白露

夕立の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ

秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるかも

白露と秋の萩とは恋ひ乱れ別く事難き吾が心かも

吾がやどの尾花おしなべ置く露に手触れ吾妹子散らまくも見む

白露を取らば消ぬべしいざ子ども露に競ひて萩の遊びせむ

秋田刈る仮廬を作り吾が居れば衣手寒く露そ置きける

この頃の秋風寒し萩の花散らす白露置きにけらしも

秋田刈る盧動くなり白露し置く穂田無しと告げに来ぬらし

「置ける白露を珠としぞ見る」、「尾花おしなべ置く露」、「置く穂田なしと告げに来ぬらし」き露、—この露はもうほとんどわれわれの分身でもあり、仲間であるといふ消息。露のないソ連に在って、露といふ日本の四季の一つの自然現象が日本人にとって何であったかをしめしめ思ひ知らされたのである。



もう一つ、そのころ気がついて、いまでも記憶に残ってゐるのは、ソ連のその地にはつひに蟬がゐなかつたことである。つまりらぬことのやうだが、夏が来てまた夏が去らうとしてゐるのに、つひぞ蟬の声が聞けないといふことは、気づいてみると、これも郷愁をひき出すたねの一つであつた。

万葉集の蟬の歌を読んだ感銘はいまは残らぬが、しらべて見ると万葉集に十首ほど見える。

卷第八、大伴家持ひぐらしの晩蟬歌

隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出でたちきけば来鳴くひぐらし

卷第十、夏相聞寄蟬

蛸ひぐらしは時と鳴けどももの恋ふる手弱女たせなめわれは時わかず泣く

卷第十五、安芸国長門の島にして船泊をたてて磯辺に作歌

石いはばしるたぎもとどろに鳴く蟬の声をし聞けば都し思ほゆ（右、大石の蓑麻呂）

沢瀉久孝博士によれば（『万葉集注釈』）万葉集中の十首の蟬の歌は、すべて日暮し蟬のことである由、右の歌で、あとの一首は、これも、「たぎもとどろに鳴」いて、都恋しさをさそふ蟬とすれば、やはり蝸ひぐらしのことではなからうかと思ふ。

これに関連して思ひ起されるのは、『奥の細道』の、山形領立石寺における芭蕉の句

閑さや岩にしみ入る蟬の声

である。この句は、初案、「山寺や石にしみつく蟬の声」から、「さびしさや（の）岩にしみ込む蟬の声」となり、やがてこの形となった。芭蕉の舌上千転の推敲の苦心の跡をしめす句としても有名であるが、この蟬は果して何蟬であらうか。これについてかつて「にいぜみ」か、「ひぐらし」かで論争があったと聞くが、右で見たやうに、万葉時代より、蟬＝蝸は存外に結びついた伝統的な考へがあったのではないかと思はれる。しかも、「奥の細道」のその条の記事は、

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にて殊に清閑の地なり。一見すべき

よし人々のすすむるに依て、尾花沢よりとつて返し、其間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて苔滑らかに岩上の院々扉を閉ちて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみゆくのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の声

となつてゐる。時分もちやうど夕方の蝸の鳴くころである。

蝸の鳴音の哀れさは、永く日本人の心のひだにしみ込んでゐる。籠居のわびしさを忘れようと出でくれば、いよゝ哀れをさそふ蝸が鳴いてゐるといふ家持の歌は、哀れをさそふゆゑに、同じ思ひに慰むのである。時わかず泣く乙女は、時あつて時を選んで鳴くひぐらしを羨みつゝも、同じ恋のおもひになくものとして共通の基盤を持つのである。岩にしみいる蝸の声は、奥深い山寺の寂寞に身を置く芭蕉の心でもある。

同じ芭蕉の句に、

頓とんて死ぬけしきはみえず蟬せみの声

の句がある。そこには、同じく生きとし生けるものとして、死といふ宿命シユバシユイへの共鳴があ  
る。

古池や蛙飛び込む水の音

の句は、ヨーロッパ人にとって、グロテスクな滑稽さを避けての翻訳は不可能であるとい  
はれる。

一切の自然並びに自然現象を、有情無情を問はず、われわれ人間と同じき宇宙の造化と  
見なすことのできる、またたしかにさうしてきた広大な感応世界をわれわれ日本人は持つ  
てゐる幸はせを思ふのである。

中世以降の連歌、これを嗣いだ近世の俳諧の連歌（連句）は、座の文学としてまた集団  
芸術として世界に類例のない、日本民族の文芸ジャンルを確立したのであったが、一座建

立のことが示すとほり、そこに集まる連衆は、「和」の世界を究極の目標にして、相互に心を通はすことを修練したのである。三冊子に、

師（芭蕉）の曰く、俳諧の連歌といふは、よく付といふ字意也。心敬僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、ただむなしき人のいつくしくさうぞき（装束）てならびみたるなるべしと、ある俳師の曰く、付といふ筋は、句、響、俯、移り、推量などど形なきより起る所也。こころ通ぜざれば及びがたき所なり。

日本人は、ものいはぬ四方のけだものは言ふまでもなく、虫魚草木に到るまで相對して語りかけ、その心を心とする伝統を持ってきたのであるが、人の世が変化し複雑化してゆくにつれ、人と人との心が通ふことを実現するは容易ならざることであった。連歌・連句においては、その方途として、連歌師心敬のことばにあるとほり、「前句に心をかよはすことが大切と教へるのである。付句をするに当っては、前句の作者の、その句をものした心持をよくよく察し入ってその上に立って付句を案ぜよといふのである。

句、響、俯、移りなどといふ付句の筋（筋みち）は、一定の形式があるわけではなく、おのづとさうなるのであって、従つて「ところ通ぜざれば及びがたき所」なのである。前句を通して知られるその作者の、いはば心の脈搏・緩急・寛嚴に即応せよといふのである。

即応するといつても、それは同一の、若しくは類似の内容であつてはならない。付句が打越（一つ置いた前句）と「同じ根」を持つことをきらふのであつて打越の「根を切る」ことが大切である。同じリズムで継ぐことがあつても、同じメロディではかなはぬのである。異口同音であつてはならぬのである。

それゆゑに、連歌・連句においては、相手の心とその音色を充分に味識して、その上でちがった音色を発することになり、全体として、すぐれたオーケストラのやうな和（ハーモニー）の世界が現出するのである。

短歌創作とその鑑賞においても、特に唱和してまた一連の歌を詠む場合においては、その状況・心持は、右の連歌・連句創出と共通するであらう。

日本文化は、天地の森羅万象と感応することを主軸とする文化であることを体認するの

である。

〔国民同胞〕昭和五十年六月十日号

## (二) 自然の声を聞く文化

### 鳥とともに

古事記上巻に、八千矛の神（大国主命）が、高志（越）の国の沼河比売の、賢くて美しいのを聞いて、求婚しようと、出雲国からはるばるとその姫の家に往って、

太刀が緒もいまだ解かずて

襲（被衣）をもいまだ解かねば（脱がないで）

嬢子の寝す（寝ていられる）や板戸を押そぶらひ（押しゆさぶり）我が立たせれば  
引こづらひ（むりにひっぱり）我が立たせれば

青山に鶴は鳴きぬ

さ野つ鳥雉は響む

庭つ鳥鶏は鳴く

うれたくも（いまいましく）鳴くなる鳥か



この鳥も打ち止めせねや（ぶったたいて、鳴きやませてくれよ）

と歌はれてゐる。鳥どもが鳴きさわいでわが恋路をさまたげ、しかも思ひの遂げられないまま夜明け近くなったのに、いらだつてゐるのである。恋仇を憎むやうに、鳥どもに悪態いたいをついてゐるのである。

また古事記下巻には、大和高市郡たけち軽の里の民謡とおぼしき一首がある。

天飛あまたむ（天を飛ぶ雁）軽かるの嬢子せとめ

甚いた泣かば 人知りぬべし

波佐はさの山の 鳩の 下泣きに泣く

波佐山の山鳩のやうに、忍び泣きをするといふのである。山鳩の低く、くぐもったやうな鳴きごゑを知るものにとつては千数百年の時空を越えて、いまうつにこの乙女の泣きごゑが聞えるがごとく感ずるのである。

この他古事記には、翡翠や鶴や雉やその他さまざまの鳥があらはれる。

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古へ思ほゆ（万葉集卷三 柿本朝臣人麿）

夕波の立つ浜べにとび交ふ千鳥よ、お前が鳴けば、心もなびくばかりに、かつて壮麗な宮殿のあった近江の都のことが思はれることだ、と千鳥に呼びかけるのである。

過所（関所手形）無しに関飛び越ゆるほととぎすまねく（しばしば）吾子にも止まらず通はむ（卷十五、中臣宅守）

大伴家持は、特にたくさんのほととぎすの歌を作つてゐる。（卷十七、十八、十九）

われのみし聞けばさぶしもほととぎす丹生の山辺にい行き鳴かなも

越中国の国府に近い丹羽山には、家持の下僚で友人の大伴池主が住んでゐたのである。

### 虫とともに

古事記のやうな、国家統一に到る動乱の世界には、はかなくかそかな虫の音は上代人の生活の、内側のもの、すなはち生活環境そのものであつたせいであらう、蟋蟀の歌の始め

て見えるのは、万葉集卷第八、万葉後期の歌人湯原王ゆはらのおほきみの歌からである。

湯原王は、天智天皇の孫、志貴皇子の子で、さはやかで美しい、次のやうな歌の作者である。

吉野なる夏実なつみの河かはの川淀かはよどに鴨鴨を鳴くなる山陰にして（卷三）

青山の嶺みねの白雲朝あけに日に常に見れどもめづらしわが君（同）

夕月ゆふづくよ夜心よこころもしのに白露しらつゆの置くこの庭にわに蟋蟀せせく鳴くも

と、ここでも、夕月夜に、心がしつとりとなびくやうに白露の置いてゐる庭にこほろぎが鳴いてゐる、と初秋のさはやかな月夜の虫を詠じてゐる。このこほろぎは、当時は、いまのこほろぎの一種に限定されず、秋鳴く虫の総称であつたらうと言はれてゐる。

ついで卷十に、

蟋蟀を詠む

秋風の寒く吹くなへ（吹くとともに）わが宿あきぢの浅茅あさちがもとに蟋蟀鳴くも

影草かげくさの生なひたる宿の夕陰ゆふかげに鳴く蟋蟀せせくは聞きけど飽あかぬかも

庭草にわくさに村雨むらさめふりて蟋蟀せせくの鳴く声聞きけば秋あきづきにけり

蟋蟀せせくの待まちち飲のぶる秋あきの夜よを寝ぬるしるしなし枕まくらとわれは（以上四首作者不詳）

この歌、コホロギが待まちつてゐて、待まちち得た秋あきの夜よながら、わが待まちつ君きみが来きないので、寝ねても何なにのかひもない、枕まくらとわたしとは、の意いで、恐おそらくは女性おんなの作者しやうであらう。

当時はカジカ（河鹿）であつたらうと言いはれるカハヅ（蝦）の歌（卷第十）、

み吉野よしのの岩いわもとさらず鳴く河蝦かはづうべも鳴なきけり川がはを清さけみ

神名火かんなびの山下かんなび響とみ行く水みづに河蝦かはづ鳴なくなり秋あきといはむとや

草枕くさまくら旅りに物思ものおもひわが聞きけば夕ゆふかたまけて鳴く河蝦かはづかも

瀬せを速すみみ落おち激なちたる白波しらかみに河蝦かはづ鳴なくなり朝あ夕ゆふごとに

上あつ瀬せに河蝦かはづ妻つま呼よぶ夕ゆふされば衣手えで寒さみ妻枕つままくらかんとか

朝霞あさぎり鹿火屋かひやが下したに鳴く河蝦かはづ声こゑだに聞きかばわれ恋こひめやも（以上すべて作者不詳）

この歌、朝霞は枕詞といはれる。鹿火屋（田に鹿を寄らせないやうに火を焚く小屋）の下で鳴くカハヅのやうに、せめてあなたの声だけでも聞けたら、何でこんなに恋に苦しむことがあらうか、とためいきを洩らすのである。

### 鳥や虫の歌

以上見てきたやうに、われわれの先人は、鳥も虫も、みないのちある（仏教語で言へば、有情の）存在として、その発する声は、人と同じ感情をあらはすものとして、人間も含めて、かれらとともに自然界の一部であると感じてきた。

これはヨーロッパの事情と比べてみると、日本人の（恐らく東洋人の、とも言へるかも知れない）、たぐひ稀な特質と考へられる。

古今和歌集の序文は、この特質を歌論の発端にして、次のやうに述べてゐる。

大和<sup>やまと</sup>うたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繋きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけていひ出だせるな

り。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

(後略)

### 川と鳥のことば

故柳田国男翁の「口承文芸史考」(昭和二十二年一月、中央公論社刊)には、次のやうなことばがある。

自然の音響は、最初から言葉と同様に意味のあるものと、昔の人たちには考へられてゐた。

その一例として次のやうに述べてゐる。

たった一つの例を引くならば、道路の川に沿ひ民居の谷を登りに開かれた結果、水の姿

と響とによって付けられた地名、ドウメキ・サワメキ・キロメキ・ゴボメキの類が、西  
北何れの府県にも到る処の同じ地形に行渡って居る。何メクは「さういふ様子をする」  
といふ古語であつて、これほど率直に各自の印象を打明けた語は無かつた。それ故に万  
人が異議なくこれを受入れたのである。

翁はまた別のところで、昔からあつた「鳥の声の聴きなし」のことを言つてゐる。それ  
は土地土地によつて異なるが、山鳩は「爰こゝえ鉄砲」などと聞きなされる地方もあり、東北地  
方のあるところでは、ある飢饉の年に、炒粉いりこ（麦こがし）を山畑に働いて居る父の処へ持  
つていく児が途中で道草を食つてゐたので、父が飢死してしまつた、この児はそれを悲ん  
でこの鳥になり、テデエコオチエ（父よ粉こを食へ）と啼いてゐるのだ、などの例をあげて  
ゐる。

### 鳥や虫のこゑは言葉

昭和五十年十月六日の朝日新聞は、

虫の声、脳のどこで聴く？

日本人——言葉と同じ左側

西洋人——雑音なみ右側で

といふ見出しで、次のやうな記事を載せた。

日本人は、動物や鳥・虫の声を脳の左半球で聴くが、西洋人は逆に右半球で聴く、と東京医科歯科大学難治疾患研究所の角田忠信講師が実験で確認した。左半球には言語を理解する場所（言語中枢）があるので、日本人は鳥や虫の声を言葉と同じように感じている。しかし、西洋人にとっては鳥や虫の声は雑音。この違いは、日本人と西欧人で先天的に脳のつくりが違うからではなく「子どものときに日本語を話して育ったかどうかで決まる」

と角田講師はいふ。

以下、少々くどくどしいが、日本語の本質、ひいては日本人の思考の特性にも関連することなので、主要部分を引用したい。



## 研究の発端

右耳で聴いた音は脳の左半球へ、左耳なら右半球へ伝えられる。左半球の聴覚中枢は、言葉を聴く言語中枢につながり、右半球より脳の形もやゝ大きく優位脳半球と言われる。脳出血や交通事故で優位半球がやられると失語症になる。逆に脳の右半分は、劣位半球といわれ、ここが故障した場合、西洋音楽や機械音は聴き分けられなくなるが言葉は話せる。左右がこれと全く逆の人もかなりいる。病院でこわれた側の機能を何とかして反対側の脳で補えるように訓練できないか、と実験を繰返すうちに、日本人と西洋人とは聴き方に違いのあることがわかった。

## 実験方法は

調べたい人にステレオのヘッドホンをつけてもらう。その人が一定のリズムキートをたたくと、右耳からリズム通りに、たとえばスズムシの音が聞えるようにする。そのリズムを繰り返させておいて、途中からいきなり左耳にリズムを狂わすような妨害音を入れる。妨害音をだんだん大きくして行って、どのくらいの音量になった時にリズムが打たなくなるかを調べる。左右の耳を交代してどのくらいの妨害に耐えられるかを比較すれ

ば、どちらの耳がスズムシの音をよく聴き分けたかがわかる。

### 測定の結果

西洋人では、左半球（優位脳）は言語音と子音を聴き分ける機能だけが高い。そのほかの音は右半球で識別する。

ところが日本人は、言葉のほかにアイウエオの母音、動物の鳴き声などかなりの音を言葉のなかまとして聴いている。

「その原因は、日本語の母音にあります。」と角田講師。たとえば「イ」という音だけでも、日本語には、医・衣・異・意・井・困・胃……たくさんの意味がある。日本人の脳は「母音は言葉だ」と聴くように訓練されているのだ。

セミは「ジイ、ジイ」、カエルは「ケロ、ケロ」と母音で終わるように表現することで言葉になる。外国語で母音がこんな役割を果たすことは、きわめてまれだ。だから、日本人は、外国人なら右半球で聴き分けるはずのただの音まで、母音で表現することで言語化し、左半球で聴くようになった、というのが角田講師の解釈だ。

### 大きな反響

「角田博士の発見は、きわめて興奮に値するものだ。私は、日本人のように鳥や虫の鳴き声を聴いてすぐに日本語で発音できなかつた」とドナルド・キーンさん。

「文学者がばく然と感じている日本人と西洋人の違いも、角田さんの説明でよくわかる。」と詩人の大岡信さん。

日本学士院発行の科学者から、問い合わせが殺到している。

鳥や虫の声ばかりでなく、自然の音響もことばとして聞きうる日本人の特性は恐らく数千年の昔からで、それは日本人の思考法や世界観まで影響を残さずには置かなかつたはずである。

〔国民同胞〕昭和五十一年三月十日号

(三) 歳時記を読む——日本の四季と季語の美しさ——

故人となった作家の高見順氏は、軽妙洒脱しゃだつな話術の名手であった。かつてその「辞引の話」といふのを聞いたことがある。

『大言海』を見てみると、最初に出て来ることばは、愛（アイ）で、一番終はりはロナ（女）で、つまり愛に始まって女で終はる。人間の一生をしめくくったやうな形になってゐるが、これは何も大槻文彦博士（『大言海』の著者）が作った筋書きではない。それから、大槻博士は、猫がきらひだったらしく、「ねこ」（猫）の項には、「性狡猾じょうかくニシテ云々うんぬん」と書いてゐる。ねこが、家人のすきをうかがつて、魚さかなを盗んで逃げるのは、ねこにとつてはきはめて自然のことと、つまり習性であつて、「狡猾」と言つていいか、どうか、客観的叙述で終始すべき辞書に、ちらりと著者の好き嫌ひが出てゐる点が面白い。

そんな話を一時間ばかり話して、聴衆の爆笑を呼んだものであつた。

これは、いはば「辞引」を「読む」楽しさを語つたものである。

わたしは、まだ辞書を読む習ひを持つに至らないが、何種類かの歳時記は、いつも座右

に置いて時々、ゆきあたりばったりに読む。列車に乗るときは、薄い一冊を携帯するのを常としてゐる。

わたしの知つてゐる後輩の大学教授は、専門は哲学であるが、歳時記に対する愛着は、並み並みならぬものがあるらしく、座右の書ならぬ、「枕頭の書」といつてゐる。毎晩寝るときは、きまつてその一ページ、二ページを繰るといふのである。哲学概論のやうな、空に空を描く空漠くうぼくな学問をしてゐると、身近い具体的な生活感情を盛つてゐる、歳時記のやうな書物にひかれるのであらうと、半ば同情し、半ばわが意を得た満足感をもつて聞いてゐるのである。

### 虎落笛もがりぶえ

わたしの幼少年時代、昭和初期の、田舎の農村の冬は、ほんたうに寒かった。ことに冷たい風の吹く小学校のゆきかへりなど、筒袖つとせの着物の短い丈たけからはみ出てゐる小さい脛すねは、容赦なく風の猛威にさらされ、小さい鼻孔びこうは、たちまち息づまって、後ろ向きになつて、やつと息をつく場合が少なくなかつた。

そんなとき、道ばたの電柱も、ひゅうひゅうと悲鳴をあげ、家近くに来ると、その風は、生け垣や竹垣にも、古びた石垣のすき間にも入り込んで、しゅうしゅうと消えいるやうな、心細い音をたてつづけるのである。

その、からだの底まで冷えつくやうな風の音は、それから何年、何十年たっても、わが記憶のなかに止まってをり、いまでも、冷たい風が、ものに当たってかすかな音をたてるのを聞くととき、あゝ、この風の音は、むかし子どもとき聞いたあの音だなどと思ふ。

いまからもう二十数年前にならうか、俳句（当時の関心から言つて俳諧と言つた方が適切であるが）に興味を覚えるやうになつた時、わたしは、ゆくりなくも冬の季題の一つである「虎落笛しがりぶえ」といふことばにぶつかった。幼少年時代の記憶の、あの風の音が、「もがりぶえ」だと知つた時の、驚喜ともいふべき感動を、いまも持ちつづけてゐるのである。

わたしは、その時、このことばを産み出したことについて、先人たちのすばらしい表現力に感服し、同時に、わたしの持つてゐるあの「風の音」の記憶と重ねて、先人たちの、生き生きとした生活感情がこの身に伝はるのを実感したのである。

歳時記には、この「もがりぶえ」を聞くことのできる、多くの佳句を掲げてゐる。

われわれの想念は、これらの句々に触発されて、この日本の風土を形作る「風の音」とともに、広大な日本列島の空間と時間の世界にはひりこむのである。

一汁一菜垣根が奏かなづ虎落笛

草田男

日輪の月より白し虎落笛

茅舎

涸れし樋のさそはれ鳴りぬ虎落笛

柯城

日本語の中でも、芸術的な珠玉ともいふべきことばの一例として、いま「もがりぶえ」を挙げたが、総じて歳時記は、美しい日本語の宝庫といへるのである。

### 風のさまざま

同じき風であっても、輝かしい春光の中を吹き渡る風は、「風光る」といふ。このことは、すでに江戸時代の俳人たちの句に見えるから、相当古くからの日本語であるが、近代詩にも登場するやうな新鮮な感覚がある。それも概念的造語ではなく、実感の上に立つ点で、先人のすぐれた表現力を感じるるのである。

「春嵐」「春疾風はやて」の語も、稀に西の日本列島を襲ふ、低気圧による荒く激しい風雨の、



生活詩における表現として、活き活きとしたひびきを伝へるのである。

初夏の新緑の木々をふきわたる風を、中国の詩人は「薰風」といった。わが国の俳人は、新樹のさはやかな緑の薫かきりを感じて、これを「風薫る」といふ季語に定着させたのである。また新鮮な色彩に注目して「青嵐」ともいふ。風かをる、あをあらし——日本の夏の風物の一つとして、そこに生きる喜びの頌詞しょうしとも言へやう。

モンスーン（季節風）地帯に属する日本列島のうち、特に本州中央部に当たる関西・関東あたりの気候風土を踏まへてできた歳時記——そこに盛られてゐる四季さまざまの季語に触れると、それとはまさに対蹠たいしよ的な存在である、東北欧のロシアの自然が思ひ出されて、おのづから比較対照されてくるのである。

### ソ連の四季

わたしは、敗戦後満州（現中国東三省）から、ソ連邦に抑留されて、はじめ三年半ほどはウラル山脈を越えたヨーロッパロシアに、ついでシベリアに送られ、そこに一年有餘、都合五年間ほどを、この地球の北極に近い地帯で過ごした。



この地帯の氣候風土の特徴は、十月から四月半ばまである長い冬と、始めと終はりに春と秋をちよつとばかりつけ加えた、二ヶ月ほどの短い夏との交替である。総じてきはめて単調な季節モントナスと日々の繰り返しにある。

十月始めごろ、ある日寒波が襲来すると、木々の葉は一朝にしてからからと黒ずみ、やがて乾き散って、次第に常夜とこよゆく、長い冬將軍が君臨する。冷たく暗いあけくれのうちを越して、やがて四月半ば、洪水のやうな雪溶けが始まり、地表に現はれた黒土に爆發したやうに一斉に草木の芽が萌え出てくる。メーデー（五月一日）は、ここでは何はともあれ、それは春が来た喜びの祭典であった。

### 秋から冬へ

この、亜凍土地帯ともいふべき地域における五年間の生活体験をもつて、歳時記をひもどくとき、温帯氣候に属する日本列島の、精妙繊細を極める四季の変化、それを受ける民衆の、きめこまやかな生活感情の、微妙さなど、かれに比し、これは別世界の樂園かと驚歎の思ひにかられるのである。たとへば、厳冬期には、零下三、四十度にもなる、かの寒

帯地域は、ある日突然寒風が荒れると、たちまち満目しょうじょう蕭条の枯れ野原に変じてしまふ。舞台は一瞬にして暗転するのである。

それに比べて、日本の、秋口より寒い冬に至る期間は長く、徐々に季感をつみ重ねていくのである。「残暑」が過ぎると、「新涼」の「爽やかさ」の好季節がつづき、徐々に「やゝ寒」、「うそ寒」、「そぞろ寒」、「肌寒」を感じるようになり、やがて「朝冷え」、「夕冷え」、「雨冷え」、総じて「秋冷」・「冷やか」さが、「身に入むし」気候になり、「朝寒」、「夜寒」から、つひに真冬の「寒さ」、「底冷え」から「冴さゆる」、「凍こる」、「凍いてる」、「冬ざれ」の風景へと転じてゆく。

しかし、その間にあっても、「小春風」が吹く「小春（日和）」の「冬麗うるら」の日もあって、「春隣（春近し）」と覚える折もあり、人々は、その折々の天候陽気に応じてのあいさつをかはすのである。

### 露さまざさま

ソ連における捕虜の日々は、労働に明け暮れる毎日であったが、暇を見ては、夢中にな

つて、日本の古典を読んだ。ある時、万葉集を読んでゐて、突然、ソ連には「露」がないことに気づいた。

牧草刈りに通つてゐた、短い夏も終はりに近い、ある日のことである。念のため、翌日、草刈り場にゆく道すがら、わざと道ばたの雑草の中に靴を踏み入れても、現場の草むらで手足でさはつても、ばさばさに乾いてゐて、すこしも濡れないのである。

多くの人々には、はなはだ怪訝けげんな感を持つであらうが、日本人たる、抑留漂泊の囚虜の身にとって、この「露」のない、乾燥した草原は、逆にはなはだノスタルジルをかきたてるのであった。

そのせいかどうか、わたしは、いまでも露を好み、露にぬれることを愛する。歳時記もまた、露にまつはるたくさんの、風情のあることばを見せてくれる。

白露、下露、朝露、夕露、夜露、初露、露けし、露散る、露冷え、露しげし、露時雨しぐれなど。中にも、露しとど散るさまをあらはした「露しぐれ」なる一語は、清らかではかなく、しかもするどくて、この語を創り出した日本人の、芸術的天稟てんびんさへ思はれるのである。

## 春泥ほか

季節季節の雨も、そのさまざまの姿に応じて、まことに多様多彩のことば（季語）を持つてゐる。

「雨」を主題とした、あるいは雨の風景をとり入れた、すぐれた随想や小説などによって、いまままでいやであった雨を、雨の情緒を好み愛するやうになつた人々も多い。歳時記のことばや、引用されてゐる、すぐれた句によつても、同じやうな効用は少なくないのである。

「春泥しゅんでい」といふ季語がある。春の泥濘である。ぬかるみといふ、決して心地よくない、時に人を難渋させる現象にまで、美を発見し、いとほしい存在を、好ましい詩材にまで昇華させたのは、これはたしかに俳人の功績と言へるであらう。

春泥に振りかへる子が兄らしや

汀女

ゆく先に日輪うつり春の泥

泊雲

さまざまな環境衛生施設や消毒薬によつて、蠅や蚊や蚋（ぶと・ぶよ）などは、われわ

れを悩ますことが少なくなつたが、「蠅生る」と言ひ、「蟻蠓（まくなぎ・めまとひ）」・「蚊柱」を詠み、「緑蔭の昼餉を蝸が佗しうす」（九十九樹）の愛情は、捨てることのできないことを、歳時記は教へるのである。

（昭和51年10月20日、21日信濃毎日新聞）

第三篇 俳句文学としきしまの道



(一) 俳句文学を尋ねて

(1) 高校教育を去るに当たって

今年昭和五十年の二月に満六十歳を迎へたわたしは、当然のことながら、この三月をもつて、学校勤めを終へることになる。三十五歳といふ、おそ過ぎたる初任者であった。爾来二十五年、その間教頭九年、校長九年といふ、マネージャーみたいなことばかりやってきて、つひにロクな先生にもなれなかつたが、精気ある生涯の大半を過ごしたのであるから、やはりそれなりの感慨がある。

わたしどもの前後は、今次戦争の時期と青春時代が重なりあつてゐるので、生き残つた者も、思ひもよらぬ方向にその後の人生が展開した者が尠くない。わたしなどもその一人であるといつていいと思ふ。

昭和十四年春、大学（国文学科）を出るときまだ若かつた恩師久松潜一先生が、わたし



を呼んで聞かれた。——「君は、海軍兵学校の教官になる気はないか。文理科大学（いまの筑波大学の出身）からも候補者を一名出すことになってゐるが、兵学校には頼んであるから、君が行けば採用してくれると思ふがどうか」

「二、三日考へさせて下さい」と言つてひきさがつてきたものの東大精神科学研究会のメンバーの一人として、東大の学風刷新といふ大それた野望を抱きつづけてゐたものだから、「わたしは、もうちよつと東京にゐたいので、おことわりいたします」と、にべもないご返事を申しあげた。

昭和三十九年秋のことと思ふが、同期の木藤才蔵氏の肝入りで、大学卒業二十五周年集會を持ったとき、久松先生を囲んで、おのおのテーブルスピーチを試みたが、その時、わたしは、

「かういうわけで、先生のご恩情にそむいたバチが当りまして、兵隊五年はともかく、ソ連で捕虜五年、昭和二十五年の一月に、尾羽うち枯らし、べそをかいて、命からがら日本に帰ってきたやうのていたらくであります。大へん遅くなりましたが、今改めてその節の御無礼をお詫び致します」

と申して、久松先生にべこんとお辞議をしたら、一同の爆笑を招いたことであった。

昭和二十五年四月から、生まれ故郷の信州の、山深い新制中学校の教壇に立ったのであるが、これはたまたま当時その中学校長であった、同村隣組の宮下清計氏（最終長野県教育センター所長、現駒ヶ根市教育長）の勧誘によるところであった。

戦後の新制大学の教官組織は、概ね昭和二十三、四年頃にできたやうで、わたしにその落ちこぼれの話のあったのは、昭和二十六年であったか、京都の池の坊短期大学からで、当時の学長佐々木喜市先生は、一高のとき生徒主事として、寄宿寮副委員長だったわたしを記憶されてゐて、友人を介しての意向打診であった。

わたしは、このことで相当迷ったが、つい、これまたおことわり申しあげた。当時の池の坊大学には、「枕草子」研究の田中重太郎先生が居られることを知り、恐れをなしたせみもある。然し、何よりも私を逡巡させたのは、学問研究における十年間の空白であった。

ソ連国境に近い第一線部隊の勤務、作戦行動、初年兵教官、ひきつづいて軍高等官衛参謀部付の仕事、敗戦以後の、ウラル山脈以西のヨーロッパ・ロシアまた極東シベリアにお

ける捕虜生活——それらは人生体験として比類ない寄与を受けたのであるが、学問研究のスタートは、まさに数千歩遅れた地点に立ってゐることを自覚せざるを得なかつたのである。

もとより右のやうな体験を、創作活動に活かす方向もあつたのであるが、かりそめに踏み入つた教壇の世界は、存外に忙しく、また存外に他を忘れて没頭せしめるだけの生きがひもあつて、つい沈潜の余裕ないままに、こまぎれのやうな零細な時間を活用しうるのは、わが周辺の郷土の文芸事象に限られることになつた。

それは初め到底学問研究などといふ名に値しない、雑多な仕事で、たとへば、俳諧について言へば、自ら土俗俳諧と卑下せざるをえぬやうな蒐集を、ほそぼそと続けてきたわけである。どこまでゆけば、広い日本文学史とまじはるか、絶えず不安と心細さのつきまといふ道程であつた。この状態は、それから二十年以上たった今も、それ程改善されたわけではないが、幸ひに「井月全集」の改訂復刻本を出し、また、後輩の高校教員の有志と志をあはせて始めた「加舎白雄全集」、上下二巻（文部省刊行助成金による）の完成を目前にして、わが道必ずしも徒爾（むだ）ならずと感ずることができるようになつた幸はせを思

ふのである。

人並のレジャーを楽しむ余裕など無かった。家族ともどもの慰安ももとより犠牲の上であった。県教委の補任のままに、伊那・木曾・松本・上田・佐久と県内を転々しつつ、いまだ余生の巣づくりもできぬままながら、地方文学史の構想も徐々に見えるやうになり、また俳諧においてもやや広い世界が見えるやうになったことを、せめてもの喜びとするのである。

かへりみて、命すでに無かりしを生きて、教員としても人並以上の厚遇を与へられたこと、そして、曲りなりにも学問研究の道を絶たなかったことを、日本国のいのちの恩寵として、万謝するのである。

『全国高等学校長協会会誌』第二十四号 昭和五十年三月三十一日発行 原題「校長職と学問と」

(2) 加舎白雄全集発刊に際して

俳壇史上の位置

正岡子規は、明治二十年代、生涯の事業として、『発句類題全集』を編まんとして、広く近世の句集類を渉獵せうれつしたが、明治三十二年（一九八八）刊の伊藤松宇（長野県小県郡丸子町生、安政六年—昭和十八年）編『中興俳諧五傑集』に寄せた序文の中で、俳人加舎白雄かやしろについて、次のやうに述べてゐる。――

白雄は深沈にして清廉なり。彼が実着に蕉風を研究したるは、蓼太の浮華に失したるに反映して、却て好一對かへを為す。其句故ことばに古語を用ゐず、しかも紆余（うよ）才があつて余裕あること）にして迫らざる所あり。けだし俳壇の老手なり。

また、昭和三十五年、西沢茂二郎翁（長野県東筑摩郡坂井村）は、まとまつた白雄伝書としては唯一の『俳傑白雄』を出版されたが、優れた近世俳諧研究を残された故高木蒼梧翁が、この書のため一文を贈つて、次のごとく述べた。――

俳諧に天明五傑と言つても、そのすぐれたものは蕪村と白雄であり、しかも蕪村には匠氣の甚だしきものがあるのに反し、白雄には殆どその痕跡をも認められない点で、筆者は白雄に少なからぬ好意を持つものである。(中略) 信濃の俳人中、一茶は束松露香の提唱により一茶同好会起りて研究を点道し、近年純夫の「科野」起りて遺憾なくこれを顕彰し、一茶は信濃唯一の古俳人たるかの観があるが、豈一茶一人のみならんやと言はねばならぬ。

蕪村と相並ぶ天明俳壇の雄であつた俳人加舎白雄は、信州上田藩士で百石取りの武士加舎忠兵衛吉亨の次男として、元文三年(一七三八)八月、江戸藩邸に生まれてゐる。長兄小源太吉重(吉祐改め)らの墓は、今も上田大輪禪寺に在る。かれは五歳で生母に死別、十三歳で更に継母に死別するなど、恵まれぬ幼少年時代を過ごしたらしいが、明和二年(一七六五)、二十八歳、下総銚子あたりに流寓中、松露庵烏明に入門するまでの履歴は、今のところ殆んどわからない。

やがて故あつて、かれは、烏明の師白井鳥酔に直接に師事して、その薰陶を受けるやうになるのであるが、かれが独立の俳人としての地歩を江湖がう(世の中)に示した最初は、明



和六年、かれが首唱して、姨捨山放光院のかたはらに芭蕉面影塚を建立し、その記念句集「おもかげ集」を發刊したときである。爾後広く東西に遊歴しつつ、江戸の春秋庵を本拠として、幾多の撰集・俳論をものしたが、寛政三年（一七九二）、五十四歳をもって没した。生涯娶らず、酒を愛して、ただ俳道一筋に、禪僧のごとき一生であった。

その勢力圏は、関東地方一円、信州、北は奥羽、南は伊勢までの、おほむね東日本に限られたが、かれの俳諧事蹟の一つとして特筆大書すべきは、次代の俳壇を担った俊才を雲のごとく、その門下より輩出せしめたことである。即ち道彦・巢兆・長翠・冥々・碩布・保吉・春鴻・葛三ら、その他注目すべき閨秀作家榎本星布があり、信州では、北信戸倉の



加舎白雄肖像（『俳諧百家仙』所載）

宮本虎枝（古慊）と南信伊那の中村伯先が双璧をなしてゐる。

### 従来その名の著はれなかつた理由

このやうに優れた資質と、顕著な事蹟を持ちながら、何故かれの名が、蕪村のごとく、また一茶のごとく、世に著はれなかつたのであらうか。

その第一は、かれの俳風が、松宇の評言のやうに、老蒼であり、蒼梧評のごとく、殆んど「匠氣」の「痕跡」を止めない底の、朴実で地味な存在であり、いささかも俗耳に媚びず、蓼太のある作品のやうな、世間の喝采を予期しての作為技巧をきびしく拒否してゐるところに存する。

その第二は、かれの生前の撰集類が多く散逸して、世人また研究者の目に触れる機会の乏しかったことによる。撰集のうち、諸種の俳諧文学集に収載されたのは、『春秋稿第五篇』のみで、第一より第四まではかつて活字に復刻されたことはなく、特にその第三篇は、俳文学者も殆んど全く見たこともない「幻の書」と久しく言はれてきたのである。また、その俳論書も、後人の恣意（自分勝手な考へ）による補訂が加はつてゐて、白雄の



真面目を知る上に甚だ不都合な板本が多かったのである。

その第三は、芭蕉の真骨頂を継承せんとして、中興期に白雄がその完成に心血を注いだ俳諧の連歌（連句）を、明治以降の俳人や研究者が全くと言っていいほどに喪失したことによるのである。「発句は門人の中、予にをとらぬ句する人多し、俳諧（注・俳諧の連歌、即ち連句）においては老翁が骨髄。」と言ったのは芭蕉である。この芭蕉が「骨髄」たる俳諧の連歌を失ったことは、白雄理解の主要な方途を失ったことに通ずるのである。

### 白雄俳諧探求の課題

明治以降、右のやうな白雄資料の不備にもかかはらず、主として碩布編「しら雄句集」（寛政五年刊）などに據って、かれの優れた本質を掘り起こした研究者に頼原退蔵・荻野清氏らがあり、最近では、俳誌『杉』誌上に「白雄秀句」を連載した矢島渚男氏がある。

矢島氏の方法は、芭蕉に代表される日本の芸術創作は、主観と客観を明確に分離し、眼を開けて外界を見る、いはゆる「写生」を基本とする西欧近代の創作方法と根本的に違つてゐるといふ認識より出発する。芭蕉の芸術をもっとも忠実に継承した白雄は、俳論『寂

『<sup>しり</sup>菜』において、この点について、

万象をはこんで自己とすべし。

自己をはこんで万象とする事なかれ。

と示したことに注目し、芭蕉的方法に即して、白雄発句を見直さうとするのである。

・白雄俳諧探求における第二の課題は、安東次男氏が『芭蕉七部集評釈』において、七部集における歌仙を剖析<sup>ぼうせき</sup>味到したやうに、白雄連句の卓越性を味識することにある。かれは、芭蕉の天才的な捌<sup>さば</sup>きに準拠して、蕉門立花北枝が作ったといふ「付方八方自他伝」を補備完成した人であったからである。

今般幸ひ文部省から助成を得て『加舎白雄全集』上下二巻が出版できることを、白雄研究の今後のために喜びたい。上巻には、前述の「幻の書」をはじめ白雄生前の撰集、紀行文をのせ、下巻には俳論、発句篇、連句篇などを網羅した。これによってかれの生涯の作品のほとんどすべてを収載することが出来たのである。

(昭和49年8月3日信濃毎日新聞)

(3) 一茶全集編集を顧みて

信濃教育会編・信濃毎日新聞社刊の『一茶全集』が、今回、俳文学会の推薦を経、芭蕉顕彰会申請によつて、文部大臣賞を受賞することになり、この事業の発企より鞅掌奔走した者として、まことにこれ天与の幸慶かと覚え、また過ぎ来し四年有半の歳月を顧み、さらに業半ばにして斃れた監修者兼編集委員尾沢喜雄氏（岩手大学名誉教授）のことを思ふとき、深甚な感慨を禁じえないのである。これは他の編集委員諸氏（小林計一郎長野高専教授、丸山一彦宇都宮大教授・教育学部長、矢羽勝幸上田高校教諭）も全く同じ所懐に違ひないと信ずるのである。

◇ ◇  
そもそも一茶資料集成の歩み、ひいては一茶研究の長い歴史において、一茶の郷土といふ地縁もあつて、信濃教育会と信濃毎日新聞社は、顕著な実績を示してきたのである。

◇ ◇  
信濃毎日新聞社員であつた束松露香が、自己の所属する紙上に、質量ともに本格的で画期的な一茶評伝を、連続百二十五回にわたつて発表したのは、明治三十三年（一九〇〇）

のことで、近代における一茶研究の先駆をなしたものと言ひうるのである。

また一方、信濃教育会が、大正十五年（一九二六）より昭和三年（一九二八）にかけて発行した『一茶叢書』は、九編十一冊に及び、他に別編として復刻本三冊があった。第一編は勝峰晋風に校訂を依頼したが、第二編以下は小池直太郎が担当し、すべて真筆本によって校合し、かつ幾多の新資料を加へたことは、その厳密な校訂と相俟<sup>ま</sup>って、一茶研究を飛躍的に押し進めるに力あつたのである。

現時点ではほぼ完璧な『一茶全集』の編集発行が、この両者によってなし遂げられたことは、右の事実からして、いはば歴史的必然に立つのであるが、その実績を継続推進して、つひに有終の美をなしたことは、特筆すべき快挙と言ふことができる。

われわれ編集委員五人（尾沢委員死去後は四人）は、信濃教育会の依頼という形で編集業務に従つたのであるが、編集委員会は、編集に関してはもとより全く独立自主の見識と方針のもと、自由な活動に終始し得て、それ故の成果を挙げ得たことは、関係者の寛容襟度<sup>たしなみ</sup>の賜物と感謝するのである。

このたびの『一茶全集』の編集に関する結果は、それ故に、功過ともにわたしども編集

委員において責を負ふべきところで、今後久しく大方のご高批を仰ぎたいと思ふのである。

さて、本年一月の「発句索引」をもってすべての発行を終了してから、既に八カ月を経て、やうやく本全集編集の跡をやや冷静にかへりみることできるやうになった今日、成敗をふくめた反省の上になつて、最も印象深かつた事項の二、三について記しておきたい。

第一に、この種の資料を網羅する全集において、先づ悩むのは、研究資料として原文を忠実に残すことと、一般の読者の便を考へての注記・整理・削除とのジレンマである。たとへば『西国紀行』・『享和二年句帖』その他に見える断片的な書き込み類は一茶の覚え書きのメモみたいなもので、これらをすべてけづつて日付（日記）と発句のみにすれば、実にすつきりしたものになるのであるが、研究者としては、かれの読書歴・連句資料などを知る可能性のある材料として捨てるにしのびない。また原文にないルビや注を付することは、時に原文の自由な受けとり方を阻害するのではないかとの危惧を感じる場面も少なくなく、その都度取捨に迷ふのである。



小林一茶の肖像——門人村春雨画

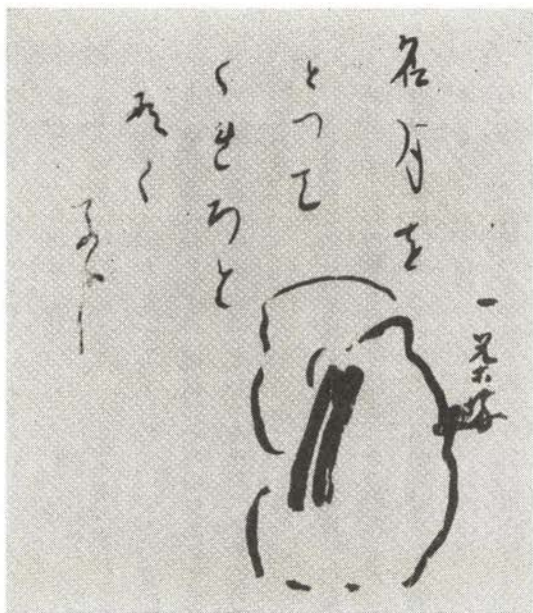


稿本判読の苦勞などいふことは、とりたてて言ふほどのこともない、校訂者の免れえぬ煉獄であるが、貧乏な一茶の場合、すでに使用した薄い紙を裏返しにしてまた書き記したものが少なからずあって、その判読は、困難を極めるのである。今回新たに編入した新資料に当たった編集委員は、解読の苦勞に心身をすりへらす思ひをしたのであるが、すでに一度翻刻したものについては、先人の判読ぶりに感心したり、時にはまちがひを発見することもあって、これを要するに、時をたがへちがった眼で二度解読すれば、ほぼ完全に近い読みができることを知ったのである。

一茶に関心ある大方が知ってゐるやうに、かれが十五歳で江戸に出てから、およそ十年間の消息は、ほとんど全くわからないのであるが、天明七年（一七八七）、葛飾派の竹阿のゐた二六庵で、連俳の秘書『白砂人集』を書写した小林圀橋、天明八年（寛政元年—一七八九）以降今日庵（元夢）にゐた菊明は、一茶の前身である、といふ大たいの了解のもとで、たとへば、発句篇では、今日庵菊明以後の作品を採って、菊明の場合、「菊明とあり」と注記することにしたのである。

この点に関し、監修者でもあった尾沢喜雄氏は、圀橋・菊明—一茶説を疑っておられた

小林一茶の筆蹟



名月をとつてくれろとなく子哉 一茶坊



柏原の全景（正面の山は黒姫山）



が、氏は、今回の出刊事業の、やうやく緒に就いた昭和五十二年の始めに発病され、その年の九月、盛岡において死去せられたので、この点に関し他の編集委員と意見をかはす機会がなかったのは、遺憾のことであった。

また「菊明」のみならず、「一茶」も、かれと時代を同じうして複数（数名）の同名異人が居ることがわかってゐる。特に天明から寛政にかけての一茶研究は、今後の課題であり、発句篇においても、疑はしいものは省いてあるが、編集途上において、この点についての打ち合はせが十分でなかったため、やや混乱を生じた点があったことが、反省されるのである。

本全集掉尾ちうびの匠と巻ともいふべき「発句篇」の編集は、春夏秋冬を四人の委員が分担し、昭和五十三年の秋ごろより始まったのであるが、各人およそ一万枚づつのカードに取り組むこの仕事は、まことに根気と忍耐を要する労働の連続であったと言へよう。かつて彫刻家のロダンが、自分の仕事を労働だと言ったことなどを思ひ出し、自分に言ひきかせながら、翌五十四年の春の日永のころを、毎日毎日、カード相手の忍耐競争に費やすことになのである。足かけ四年にわたる、全集編纂といふ登山道の、頂上近い胸つき八丁を喘あえぎ

喘ぎ登る思ひがしたものである。

言ひ尽くせぬ苦勞もあつて、決して平坦な道ではなかった。しかし、また編集刊行の、それぞれの関係者の、これまた言ひ尽くせぬ協力があつて、始めて本事業は完遂されたのである。

それ故、今日、幸ひにも受賞の栄光をかうむることになったのは、陰に陽に本事業を賛助推進された人々の協力に負ふところと銘肝するのである。

〈「一茶全集」は十二日三重県上野市で開く芭蕉祭の席上で文部大臣賞を受賞する〉

(昭和55年10月9日信濃毎日新聞)

#### (4) 時代と俳人

##### 芭蕉の生き方

昭和二十年（一九四五）終戦より今日まで三十数年を経た。これは明治以降、内戦、外戦を含めて、戦争のなかつた最長記録である。

このごろわが北辺の領土たる国後・択捉島くましり えとろふには、ソ連が軍事基地を設定し北海道の一部たる色丹島にも兵力を配置し、わが民族の運命に甚だ脅威を加へるに到つた。また二十世紀の半ばより、世界の距離は著しく狭められて、石油供給国イランの革命やソ連のアフガニスタン侵入は、われわれにほとんど直撃的な影響力を与へるに到つてゐる。

これらの状況から、徳川幕藩体制下、鎖国した島国日本の、江戸開幕以来明治維新に到る二六〇年余の、いはゆる泰平時代を考へるとき、時代の進展の速度を考慮に入れても、その長時間記録に驚くとともに、いきせき切つて文明を追求してきた明治以降の日本人の通常の歴史的、文化的感覚を超える、その時代の特異性に想到せざるをえないのである。

俳人芭蕉が、その最も充実した時期を過ごした貞享から元禄の初年にかけての時期（一六八四～一六九四）も、日本の外戦たる朝鮮出兵（文禄元年～慶長三年、一五九二～一五九八）からも既に凡そ一〇〇年、江戸幕府唯一の内戦であった島原の乱（寛永一四～一五、一六三七～三八）からも凡そ五〇年の歳月がたつてゐる。

一方、江戸幕府が、その封建体制—徳川体制を維持するために採つた政治的、思想的統制は、蟻一匹の自由な蠢動を許さぬほど徹底的なものであつた。士農工商の身分制度、相互監視連坐制の五人組制度、各種の法度施行などが、政治的統制を保証し、キリシタン禁令・宗門改め・反体制学者僧侶への断圧などは、宗教的、思想的統制を可能にした。二六〇年余の平和は、このやうな統制によつて保たれたのであり、その平和は、このやうな徹底統制下のそれであつた。

このやうな時代に芭蕉は生き、その時代にかれの俳諧は展開したのである。

かれが「終に無能無芸（才）にして、只此一筋（俳諧）に繋る」と記してゐるところが二箇所ある。一つは『幻住庵の記』（元禄三年八月成稿と思はれる）で、その末尾近く次のごとく記した。

つらつら年月の移りこし拙き身の科とがを思ふに、ある時は仕官懸命（役人勤め）の地をうらやみ、一たびは仏羅祖室（仏寺）に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫らく生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。

さらに、このあと、元禄四年（一六九二）初夏ごろ成つたと思はれる『笈の小文』（その實際の旅は、貞享四年（一六八七）十月より翌年四月まで）には、

かれ（風羅坊、自己自身を三人称に扱つてゐる）狂句（みづからの俳諧をいふ）を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。ある時倦うんで放擲はらてきせん事をおもひ、ある時ははすすむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたたかふて、是が為めに身安からず、しばらく身を立てむ事をねがへども、これが為めにさへられ、暫く愚を曉さとらん事をおもへども、是が為めに破られ、つひに無能無芸にして、只此の一筋つなに繋がる。

さうして「この一筋」といふのは、右の文のつづきに見える「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其の貫道するものは一なり」といふ、その一貫した道である。

これは、わたしは、世間並みの世渡る道にうとくて何ひとつ取得もない上に「風雲に身をせめ、花鳥に情を勞する」といふ、世に無用の習癖があつて、わづかに、俳諧の道にながつて生きてをります、といふかれの謙辞である。

これはまた、外から見れば、かれが、西行・宗祇・雪舟・利休と伝統してきた風雅の道に、その自由な創造的世界を見出したことの証言である。

かれは、世捨人であつた。この「世」は、われわれのいふ現実社会である。その捨てぶりには、「こもを着てたれ人あます花の春」（元禄三年元旦）までに到つたのである。この世において暢達することは、早く延宝八年（一六八〇年、三七歳）深川芭蕉庵に退隠するころすでに放棄したのであつた。

芭蕉は、日光參詣の折

あらたふと青葉若葉の日の光

と詠んだが、東照宮輪奐（建築の宏大・壯麗なこと）の美については、のちに平泉中尊寺光堂を渴仰讚歎したのに対し、一言半句もこれに触れなかった。

権勢を振ふ僭主は、かれの好むところではない。かれのシンパシーをひくものは、敗残の木曾義仲であり、判官義経であり、老骨の身の白髪を染めて戦死した斎藤別当実盛であった。そこには、悲劇的な人生があり、民族の詩があるからである。

この不自由な世を侘び侘びて、侘び尽くすことによって、かれは歴史の内面において深く民族の伝統を探って、前人未踏の風雅の世界を拓き、日本文化の精髓となったのである。

#### 蕪村の「稲妻や」の一句

与謝蕪村は、白雄・蘭更、蓼太などとともに、明和・安永・天明ごろにかけて俳諧復興の偉業をなし遂げた俳人である。その時期は芭蕉活躍期から凡そ八〇年乃至一〇〇年あとである。徳川政権が確立してからも一六〇年乃至一八〇年経ってゐる。

その蕪村に

稲妻や波もて結へる秋津島

といふ句がある。『明和五年句稿』（明和五年、一七六八）に見えるもので、旧曆七月二十日の作である。「波もて結へる」は海岸に押し寄せる白い波で垣をとりめぐらしてゐる、といふ意味で稲妻が明滅するとき、パツと明るくなると、この日本列島が白波の垣でとりめぐらされてゐるさまが見える、といふのである。飛行機か何かで高度一万メートルぐらゐの上空からでも見下ろしてゐる風景である。つまり、きはめて空想的な、不思議な句である。

清水孝之氏は「蕪村・一茶」（『鑑賞日本古典文学』中・角川書店）で次のやうに述べてゐる。

飛行機のない時代に、このような空前の作を残した蕪村の創作欲はたくましい限りだ。あるいは舒明天皇の国見の長歌や人麿の「名ぐはしき稲見の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は」（万葉集卷三）あたりに触発されたと思われ万葉的な壮大さがある。現実には、十国峠などの俯瞰景の印象によつたことは、次の例から推定されよう。



「大観山水図」の画家蕪村は、ついに国土の上空高く舞い上がって、この壮絶な一句を成したのである。

いなづまや浪のよるよる伊豆相模（『夜半叟』）

いな妻や秋津しまねのかかり舟（『遺稿々本』）

かな河浦にて

いな妻や八丈かけてきくた摺（『句集』）（注、きくた摺は、磐城国へ福島県へ磐城地方から産した摺模様。）

これは、この句を鑑賞し賞揚する、適切なことばであり、その限りではきはめて常識的である。

これに対し、芳賀徹氏が「秋津しまの映像——日本人の日本像」（学士会「講演特集号」昭和五十四年九月）の中で述べた、この句についての広範で犀利な解釈評言は、傾聴すべきものがあつた。その主な特徴を、一口に言ふならば、この句には作者蕪村の生きた時代の、作者への影響が強くにじみ出てゐるといふ。その時代の影響を蕪村がきびしく受けと

めてできたのがこの句であるといふのである。

まづ第一に「いな妻」といふ季語は、単に初秋の景物の一つではなくて、それは人生のはかなさ、無常感と結びついてゐるといふ。

「秋津島」といふ、日本列島ひいては日本をあらはす語が、蕪村の胸中に入りこんだのは、清水氏と同じやうに「大和には群山あれど」で始まる舒明天皇の歌などからであらうと推測してゐるが、それは、当時宣長などの国学が次第に盛んになってきた時代の影響で俳諧に「秋津島」の語が入りこんだ最初の例が、これであらう。

この「秋津島」が、うち寄せる白波によって、白い縁ゆちどりされてゐるといふ、「上空高く舞ひ上がって」でなければ見られない風景を、蕪村は何によって発想したであらうか。かういふ質問を設定して、芳賀氏は、それは、当時、蘭学が次第に盛んになりだしたところで、かれはいづこかでオランダ系の世界地図で、世界の片すみに海上にちらばつてゐる、豆つぶのやうな日本列島「秋津島」を見たのであらうと推測する。

蕪村の親友であつた上田秋成はオランダ渡りの世界地図を見て、日本は、日出づる国、日はこの国から上がつて世界を照らす、文明の源だなどといふのは、世界を知らぬ愚か者

だ、と言つてゐる。

事実、すでにこれより三十年前元文四年（一七三九）五月には、極東に進出したロシア船が、陸奥から安房沖に出没し、その巨大異様な黒船は、鎖国儉安の幕府当局や庶民に甚しい脅威を与へ、七月には幕府は沿海諸藩に海防を厳にするやう令達してゐる。やうやくわが国の海辺に波風が荒くなりまさらうとしてゐる。林子平の『海国兵談』が書かれたのは、この蕪村句あと二十数年後の寛政三年（一七九一）のことであつた。

かういふ状況下にある「秋津島」と、「いな妻」が結びついたのは、この日本といふ小さな島々は、これからどうなつていくのであらうかといふ不安が、詩人蕪村の心頭にひらめいて、それがこの句を成したからだ、と解するのである。

前述の、清水氏引用の蕪村の句にも、「秋津しまねのかかり舟」の句が見えるが、港に碇泊する舟の風景は局部的であつて、「波もて結へる」ほどの全体像に及ぶべくもない。また「いな妻」と結びつくことによつて、孤影悄然、倏忽（しゅつごつ疾いさま）無常の面影を帯びるのは、一閃の光の中に、一瞬浮かび上がる小さな島々の寄り合ひの全体像でなければならぬ。

俳句といふやうな短詩型文学は元来、風体とか発想とかにその時代の流行や特色を見ることがあつたが、社会的時代思潮的な影響をさぐることはほとんどないと言つていいのであるが、俳句（俳諧）研究における、芳賀氏のやうな方法は、大いに活用する要があると感ずるのである。

### 一茶の「国境」

継母との不仲を案じて、父弥五兵衛が、のちの一茶こと弥太郎を江戸に出したのは、弥太郎十五歳の、安永六年（一七七七）の春のことであつた。

それから天明七年（一七八七）いきよう堀橋の名で、また翌八年（一七八八）菊明の名で、蕉門葛飾派の一隅にその名が浮かんで来るまでの十年間、かれの消息は杳えうとして不明である。

将来のあてもなく江戸へ出たかれは、この間何をしてゐたのであらうか。

ずっと後になつて、文政六年（一八二三）、かれが六十歳の時『文政句帖』の中で、當時のことを次のやうに回想してゐる。

「蘭原やそのはらならぬ箒に、住み馴れし伏家ふせやを掃き出されしは、十四の年（注・實際は十五歳）にこそありしが、巢なし鳥の悲しさは、ただちに疇むくらに迷ひ、その軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜を防ぎ、あるはおぼつかなき山にまよひ、声をかぎりに呼子鳥、答へる松風さへも淋しく、木の葉を敷寝に夢をむすび、又あやしの浜辺にくれは鳥、人も渚の汐風にからき命を拾ひつつ、くるしき月日おくるうちに、ふと諧々たる夷ひなぶりの俳諧を囀り覚ゆ。

この一文、文飾ばかり目立って具体的な生活ぶりがつかまへられぬが、これを要するに定職に安住せず、何ものかを求めて、江戸市中をうろついてゐるうちに、いかなる縁によるものか、山口素堂を初世とする葛飾派の、田舎俳諧を学ぶやうになつた、といふのである。

二百年に近い、驚くほど長く続いた太平の世の今降くだりつつある当時の江戸、ひいては日本国内の状況はどのやうであつたらうか。

幕閣は、田沼意次の牛耳を執るところであつた。幕府及び諸藩の財政逼迫に伴ひ、年

貢を重くすることによって、農民への苛斂誅求かれんちゆうきうが加はり、諸所にしばしば大規模な一揆を起した。また都市においては米価高騰のため町民たちが、豪商うちこはしの挙に出た。

幕府は、しばしば訓令を発して、農民などの徒党強訴を禁じ、強訴がうせ（徒党を組んで強硬に訴へる）逃散てうさん（他領に逃亡すること）の訴人を奨励したが、ほとんど効果がなかった。

また一方、これに加へ飢饉・洪水などの天災は、いよいよ地方農村を荒廃させた。

かくて食ふに困った農民は、職と食を求めて、江戸に集まり、労働力の増加は、いよいよ働き口をせばめ、江戸市中多くの浮浪者が徘徊するに到った。一茶が江戸に出た安永六年（一七七七）五月には、皮肉にも、農民がみだりに江戸奉公稼ぎに出ることを禁ずる幕府の禁令が出てゐる。

江戸に出た一茶の、判然とせぬ十年間は、先づ、このやうな、ほとんど浮浪者に近い生活であったことはまちがひないのである。

当時、多少文字が読めて、多少の文才のあるもので、ほとんど賭けごとあるいは博打ばくちと大差ない俳諧興行の片はしにとりついて、わづかに糊口のたしとするものも尠くなかった。

一茶もまたその一人である。しかも、かれは、他に生きるすべを持たなかつたゆゑに、必死にその道にとりつき、蕉門葛飾派の末席にあつて、その一門や師匠に忠勤し、懸命の勉強をつづけたのである。

一茶にとって幸ひなことは、この葛飾派は、初世素堂以来、二世馬光、三世素丸そまるともに、いづれも武門の出で、身分階級の観念きびしく、举措容儀厳重で、市井の墮落した風儀を許さなかつたのである。

これよりかれの俳諧の生涯が始まるのであるが、文化十一年（一八一四）、故郷に帰つて、弟仙六（弥兵衛）と家屋敷・田畑を二分して持ち、同時に五十二歳にしてやうやく妻帯して生活するに到るまで、二十数年間、家を出てより凡そ三十七年間、文字どほり、ただ生きることに、何とか生活を立てることにその全精力を注いだのであつて、かれの俳諧もまた、その生きる術のためであつたと言ひうるのである。

いはゆる文化文政の始めの文化（一八〇四—一八）初年、一茶が故郷への帰心を明滅させながら、なほ江戸に在つたころ、わが大和島根の周辺は、いよいよ騒然たる趣を呈してきた。ロシアの使節レザノフ長崎に来航、交易を求め（文化元年）、幕府ロシア船来航に



つき諸大名に警戒を命ずる（文化二年）、ロシア人樺太に上陸、松前藩会所を襲ふ（文化二年）、四月ロシア人蝦夷に侵入、幕府仙台会津二藩に命じ出兵（文化四年）、二月幕府、異国船防禦を令する（文化七年）、八月ロシア艦利尻（蝦夷地北西岸）に来る（文化八年）などなど。

世上の珍事奇談を好む一茶は、当然これらの事件の風評の一部を聞き知つてゐたであらう。

### 外ヶ浜

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ

一茶坊

これは『七番日記』、文化九年八月の条にある。雁は秋になると北辺の蝦夷の国を越して、日本の国へ飛んでくる。その雁がやうやく「是より南大日本国」といふ標柱でも立つてゐさうな外ヶ浜（青森県の青森より北、平館に至る海岸、あるいは西外海の深浦より、鱒ヶ沢あたりにかけての海岸をいふ）に着いたのだった。「日本の雁」といふところに、荒い波風の蝦夷外地に対して、安心立命の国土としての、一茶の日本観が見える。神武東征の八咫鳥やたのからすの連想か「是より東大日本国、神国や虻あぶが教へる山の道」の句もある。ちなみ



に、外ヶ浜は、世阿弥作の謡曲「善知鳥」の伝説で、名高いところである。  
一茶の外ヶ浜の句には、この他に

### 外ヶ浜

雁鳴や今日本を離ると

日本の外ヶ浜迄おち穂哉

などがある。何故に「外ヶ浜」といふ場合「日本」といふ語を冠するのか、といへば、これはかれの脳中において外ヶ浜が日本の最北の国境を意味するからである。

これに対し、かれの知ってゐる日本の最南を限るものは、ちくら（筑羅）の海である。すなはち朝鮮と日本との間の海のことである。しかし、この海は「何のかのいふあくたをさらりとちくらが沖へ流して……」（『おらが春』）のやうに御祓用である。

地の果ての、これより異境といふところは、やはり北辺の外ヶ浜で、さだかでないが、北よりする脅威をひそめてゐたと言ひうるのであらう。

### 子規の従軍と皇太后追悼

明治二十七年七月、豊島沖海戦を皮切りに、八月一日宣戦をもって日清戦争が始まった。『寒山落木』、明治二十七年中の正岡子規の「海戦二句」はこの時のものであらう。

帆柱や秋高く日の旗翻る

秋荒れて血の波さわぐ巖かな

これは恐らく近代海戦を、俳句といふ形に載せた最初のものではなからうか。従軍の兵を詠んだ次のやうな句もある。

兵士

あす知らぬ身を韓国の月見哉

征外の兵士を憶ふ

韓<sup>から</sup>に見よ日本を出づる今日の月

従軍の人に送る

生きて帰れ露の命と言ひながら

翌明治二十八年春、子規は従軍記者として満洲にわたった。「四月七日近衛師団司令部  
ト共ニ海城丸ニ乗り宇品ヲ発ス。□日大連湾着、□日金州ニ行。」（『寒山落木』明治二十  
八年）

大連湾に行く海上対馬<sup>つしま</sup>を見返りて

日本のぼつちり見ゆる霞哉

大連湾

大國の山皆低きかすみ哉

金洲

麦畑や驢馬の耳より揚雲雀<sup>あけいばり</sup>

城門を出て遠近きうちの柳かな

古城や堇花咲く石の門

これらは、大陸の戦場を詠んだ、恐らく最初の俳句ではないかと思ふ。

ついで「五月十日金州発、十四日大連湾ヨリ佐渡丸ニ乗ル。十七日船中咯血。廿二日和田岬ニ上リ直チニ神戸病院ニ入ル。」七月下旬には小康を得て退院、八月、広島を経て故郷松山に帰った。十月中旬離郷して大阪、奈良に遊び十月末帰京してゐる。有名な

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

の句ができたのはこの時である。

その年の天長節（十一月三日）には、

大君のあれましし日や菊の花

の句を作ったが、また持病進行して「明治廿九年一月ハ歩行僅カニ出来居リ……二月ヨリ、左ノ腰腫レテ痛ミ強ク唯横ニ寝タルノミニテ身動キダニ出来ズ」（『寒山落木』明治二

十九年)という有様であった。『新聞日本』の明治二十九年二月二十八日号には、

### 戦死者を弔ふ

匹夫にして神と祭られ雲の峰

の句が見える。日清戦争の戦死者を靖国神社に祀<sup>まつ</sup>った折の句であらう。九天の高きに戦死者の霊を仰ぎぬかづく、この戛<sup>かっせん</sup>然たるひびきは、戦死者追悼の句として類ひ稀なものであらう。

ほとんど全く病床より起<sup>た</sup>つことのできなくなった明治三十年の子規の俳句稿が目立つのは、一月十一日崩御せられた英照皇太后(明治天皇嫡<sup>ちやくだ</sup>母)に対する、尽くるなき哀悼追慕の句々である。

### 皇太后陛下御病氣

この寒さ神たちも看<sup>み</sup>とり参らせよ

より始まり

皇太后陛下崩御

召し給ふ御声もなくて寒き夜や  
涙さへ尽きて余りの寒さかな

等々他九句。

大 喪

御車は涙にかすみ見えざりき  
鶯に目ざめたまはぬ悲しさよ

他十八句。

御停止ちやうじ（貴人の死を悼いたみ歌舞・音曲をさしとめること）

御停止や鳥啼いて昼の鐘こぼる

猿引も猿も泣きけり十五日

他一句。「大赦」四句、「国民喪」二句。

この時子規はまた「皇太后陛下の崩御遊ばされたるをいたみまつる」とて、六連七章の新体詩をも作り捧げてゐる。

子規の、以上のやうな、句々を見ていくと、広い世界に向かって万里の波濤を拓開せんと舟出した明治日本の国民的情緒をたたへたドラマの一場面を見る思ひがするのである。

(昭和55年3月15日青々会〈亜細亜大学同窓会〉会報第34号)

(二) 連句・連歌の道<sup>など</sup>を辿る

(1) 『レンガ』と連歌

英・仏・伊・西四カ国語による集団詩

一九七一年（昭和四十六年）の夏、パリのガリマール社から、『レンガ』Renga といふ名の、一冊の詩集が出版された。

レンガ（連歌）といっても、日本の中世以降現はれた文学形式である連歌の説明書でもなく翻訳書でもなく、現代のヨーロッパの優れた四人の前衛詩人、メキシコのオッタビオ・パス、イタリア人エドアルド・サンギネティ、イギリス人チャールズ・トムリンソン及びフランス人ジャック・ルポオによる合同創作詩集である。

この詩集は、そもそも、メキシコ人のオッタビオ・パスの呼びかけによって試みられたものであるが、かれは、かつてインドの大使を勤め、また駐日代理大使の職についた元外交官で、当時『奥の細道』を共訳したこともある知日家であるが、それよりも、シュールレアリスムを嗣ぐ、現代屈指の詩人と言はれる。



サンギネテイ、トムリンソンは、日本では、詩人仲間とその名が知られてゐる程度であるが、現代ヨーロッパ文学の推進役として不可欠の中堅詩人であると聞く。一番若いルポオは、天才的な数学者として令名あるほか、詩人としても知られ始め、自己所属の前衛誌に、専門の日本学者の協力を得て、貫之や実朝の和歌を仏訳掲載した人物である由。

この四人が、一九六九年（昭和四十四年）の四月、パリのセーヌ河畔にあるホテルに一週間こもって、かれらのいはゆる「西洋連歌」を巻いたのである。それは、英・仏・伊・西の、各四方国語の二、六行の節より成る一篇で、I 1、I 7より始まってIV 1、IV 6まで二十七篇、これはまたI 1、II 1、……IV 1といふ横の読み方をして、差支へない構成となつてゐる。

この詩集に、「連歌」なる標題を掲げたのは、言ふまでもなく、西欧社会にかつてなかつた「集団詩」の、始めての試みとして、日本の「連歌」に着眼し、これを範としたからである。

### 日本の連歌とのかかはり

この詩集の巻頭には、著名な批評家のクロード・ロワが序文を寄せ、ついで作者の四人が、それぞれ、この集団詩を作る場面に際しての日本の「連歌」とのか、はりあひについて述べてゐる。

ロワは、「日本文学が我々に提供する集団詩のもっとも古い例」として、例の万葉集の、尼僧と大伴家持の唱和の一首

佐保川の水を堰せき上げて植ひゑし田を

尼作る

刈る初飯はつひはひとりなるべし

家持継ぐ

を挙げ、いくらか連歌史をつづつた上でパスが、この新しい試みに着眼し実行した経緯を述べ、その「目的は、四方から集った四人が、根底から調和を得られるかどうか、それぞれが、君と僕とを堅持しつつ、なお僕らになりうるかどうかを見るためだった」と言つてゐる。(訳文は、序言の部分は代田敬一郎、詩章の部分は中島秀雄、の両氏による。)そして

臂を並べ、膝をつき合わせた四人の仕事、すなわち、四人の合作の詩作の体験から生

まれたものは、この四人のそれぞれの四行詩の総和とはあきらかに別物で、それは一つの纏った詩である。

と言つてゐる。

この西洋の連衆れんじゆのリーダーであつたパスの「中心の移動」といふ序言は、最もよく、自分らの試みた実践の意図を明らかにしてゐる。

「東洋の詩を西洋に移し植えよう」とするのは、「一つの様式を身につけよう」と志すのではなく、むしろ詩作の一体系を働かせようと志していること」で「日本の伝統的な連歌を作るわけではなく、その変身を、その権化ごんげの一つを作ろうとしているのである。」

「私は、(連歌の中に)二種類の親和(したしく共感できる意か)を見分けることができる。一つは連歌を支配する論理的考察から芸術的創造の体験に至るまで、現代詩の中心課題と符合している結合的要素であり、他の一つは、連歌という遊戯の集団芸

術的性格が、作者中心観（芸術は、作者の自我の反映であるという考え方）の危機と、集団詩への渴仰に答えている点にある。」「結合の法則は、一群の詩人が、一つの詩を作り出すことから成り立っている。順番は、数回まわってくる。巡回運動が、少しずつ詩を描き出していくのである。そこからは計画的なものも偶発的なものも、排除されていない。それは計画的に偶然の出現を準備する一つの運動であるとも言つて置こう。私が強調したいのは、連歌が（一般の詩のように）符号の配合ではなくて符号を生み出す詩人の結合であるという点である。」

「西洋の信仰と撞着（つきあたる、つじつまが合はないこと）する思想の実践であるが故に、連歌はわれわれにとって、試練であり、小さな煉獄（れんごく）（天国と地獄の間の罪障浄化の場所）であった。それは競技や競争ではないので、われわれ西洋人の攻撃性は、発露することはなかった。第一、到達すべき目標も獲得すべき賞品も、圧倒すべき相手もないのだから。」

「連歌の式目は、礼法と同じほど厳格に決められてはいるが、その目的は、個人の自然さに制御を加えることはなく、反対に、各人の才能が他人をも彼れ自身をも害せぬ

よう、自由な空間を押し開くことにあったのである。」

以上、必ずしも達意でない直訳文をやや長く引用したのであるが、この「西洋連歌」の試みは、ヨーロッパ語の詩では到底応用すべくもない法式は一切無視して、日本の連歌の精神、つまり詩人ひとりひとりが、その自我を抑制し、時には無にすることによって、より高次の詩的共同態（体といふより、この場合態の方が事実都合ふので、ことさらに用ふる）を作り出さうとしたのである。

この「煉獄」ともいふべき集団創作を試みたあと、かれらは、次のやうな感想を述べてゐる。

「われわれの試みは、当然現代西洋詩の歴史の流れの中に摂取さるべきものである。むしろその主流の帰結であるときえ言える。すなわち、連合詩という考え方、原作と翻訳（われわれの世紀は翻訳の世紀であり、前衛詩人のエリオットやパウンドの仕事は、翻訳というものを、詩的創作と区別しがたい作業であることを明らかにしたとす

る、パスの考え方)を区分する境界線のぼやけたこと、集団詩への渴望などの傾向を見ればよい。」(パス)

「この詩は、各自の固有の作品であるはずだった。けれども今の形では、他の人の書いたものと区別できるものの、なお各自はこの詩にその形式を与えた状態の制約下にあった。各自は、共通の声で話す自分を再発見し、共通の声で話しながら、改めて、各自の自我を再発見するであろう。」(トムリンソン)

「西洋においては、連歌の実施は有益である。連歌は、著者とか、知的財産とかいう考えに対する解毒剤であり、自我や、著書や、著者らしい仮面を批判するものである。……連歌、それは書くにつれて消えてゆく詩、無に帰してどこにも届かない道だ。先途には、何も待っていない、終りもない、それどころか始めさえなかった。すべて道程のみである。」(パス)

### 近代日本における連歌の衰頹すいたい

わたしは、西欧の近代詩や超現実主義詩(シュールレアリスム)に甚だ闇くらいものであ

り、上述の詩人たちも、この『レンガ』を通して知っただけであるが、これら四人の詩人たちの、現代ヨーロッパ詩壇に占める位置からも、日本の連歌の世界を憧憬した、この試みが、今後の西欧詩学に重大な影響を与へずには置かないものと考へるのである。

一方、右のロワやパスや他の人々の、日本の連歌に関する記述には、「仏教と、仏教を予告し、仏教に合流し、また仏教から派生した、さまざまの哲学（道教・神道・禅など）」（ロワ）、「連歌は階級制度の重圧を逃れる一つの方法だった。」（パス）のごとく、危なかつしい一知半解に類するものが混在してゐるけれども、日本人にとって、また日本文化にとって改めて「連歌」は何であつたのかについて、海の外からの貴重な指摘を提供してくれたのである。

周知のやうに、中世以来長い歴史と伝統を持ち、やがて近世、「俳諧の連歌」（連句）として、いやしくも目に一丁字ある、津々浦々の庶民の詩心を長く養つた「連歌」は、明治以降次第に衰微してゆき、ほとんど消滅に近い状態にまで落ちぶれるのである。正岡子規の「連俳（連句）非芸術論」も、その衰運に致命的な打撃を与へたのであるが、これは、俳句革新のため、月並俳諧を斬つた、その返す刀の余勢だつた趣がある。



その後日本の俳壇の主流は、現代連句の創作については一顧一瞥も与へない状況が久しく続いてきた。まして、西欧の詩の流れに棹さす日本の明治以降の近代詩界においては、連歌など、全く無縁の旧物として捨てて顧みなかった。エキゾチシズムによる刺激がないせいか、日本の詩壇には、右の『レンガ』ほどの試みも、現在まで皆無であった。

しかしながら、世界に類のない形式と実質を持ち、創作の方法において、全体と個がともに生きて調和する、集団詩としての連歌連句は、日本人が長養し洗練した特異な文学ジャンルで、日本文化の重要な一翼を担ふものであるから、やがてまた再び、日本民庶の共有財産として復活すべき運命を持つてゐると信ぜられるのである。すでに俳壇・詩壇その他のところで、その機運は醸成されつつあるが、いまは省筆せざるをえない。

### ジャック・ルポオによる「連歌の歴史」——「心敬について」

さて、本書『レンガ』にもどってつけ加へたい一事がある。

前述の四人が、本書の巻頭にそれぞれ序言を載せてゐるが、その中の一人ルポオの分担当は、「連歌の歴史」で、有名な水無瀬三吟の巻頭十句の仏訳から始め、連歌発展略史、式



目のことに及び、連歌師の代表として心敬を挙げ、その略歴と連歌論を抄記してゐる。

前述のやうに、ルポオには、貫之や実朝の研究があり、それゆゑに連歌略史を記す役割を担ったのであらうが、連歌史上ただ一人を推すに當つて心敬を選んだのは、きはめて適切であると言へるのである。

その「心敬の一生」の一文は、文中のたとへばオスカー・ベルンなど、筆者寡聞にして識る所ないが、ヨーロッパの詩人が見た心敬の紹介として興味があるのでこゝに掲げる。

連歌の最初の頂点、最初の完成された美的表現は、心敬の作品である。オスカー・ベルン氏はかう言つてゐる。

「日本の詩が、内面化の最高の水準に達したのは、ほとんど連歌しか作らなかつた心敬においてであつた。二世紀後れてあらわれる芭蕉の詩も、全く心敬の詩精神の域を出ない。」

心敬の伝記は、ほとんど全くわからない。(注、この辺は、その後の研究の進歩により、わからない部分がなほ多い、と改むべきである。) 荒木良雄氏は言つてゐる。「心敬の人生

は、われわれに全く知られていない。何かに覆われている感じで、漠然たる中に、連歌好みの薄幕の色合いの中に、浮かんでいる。ただ、ちらほらと月が雲の切れ目にあられるように、その人生の断片が姿を覗かせるだけである。」

心敬、一四〇六年紀伊国（和歌山県）名草郡田井の庄で生まれる。一四六三年故郷の村へ帰り、内面を明らかにするための、独吟百韻を巻いた。同じ年『ささめごと』といふ大論文を完成する。その中で、彼は自分の詩論を書いている。一四七五年（文明七年）四月、死んだものと思われる。

そのあとの、心敬連歌論の紹介は、「心を通はす」ことを眼目とする、『ささめごと』の趣意を要約したもので、ルポオがこの『レンガ』の合同詩作において実現を期した志向の一端を示してゐるとも言へるのである。

心敬にとって、須要なことは、前句と親しむこと、前句と自分との間に、詩人の全緊張を表現すること、であり、別のことばで言えば、連歌師の努力は前句という自分

になじまないものと、自分の句との距りを、克服する努力にあると言える。

『ささめごと』から三つの断章を引用し、心敬論を終ろう。

——連歌芸術とは、詩や詩の一節を作る技術ではなく、他の人の才能や空想の中へ入りこむための心の修練である。

——あらゆる芸術は、物の心から、作者の心に伝わってくるもののみで作られる。

——作者自身の心の傾斜をたどるのでは、他人の、消すべからざる感覚を、体験することはできない。

### 心敬のことば

われわれは、最後に、日本語で書かれた心敬自身のことばを読んで、この稿を終へることにしたい。

前句に心のかよはざれば、ただむなしき人のいつくしく袋束さうぞきて並びあたるがごとくなり。前句のとりよりにこそ、いかばかりにあきはかなることの葉もらうたき物には

なり侍るとなり、むかしの人の句は、前句の詞すがたをばかたはらになして心をつかく付け侍り。前句の取捨どもかしく見え侍り。近き世には、ただこと葉どもをとり分きてつけ、ひとへに前句のころをばわすれ侍るとなり。〔『ささめごと』〕

わが句を面白くつくるよりは、他人の句をあきらめ侍るは、はるかにいたりかたしと也。(同)

此道は前句のとりよりにて、いかなる定句(ぢやうく)(絞切型でつまらない句)も玄妙の物となり、いかばかりの秀逸も無下のことになるといへり。前句と我句との間に、句の奇特、作者の粉骨はあらはれ侍るべしと也。〔『老のくりごと』〕

〔「国民同胞」昭和五十三年三月十日号〕

(2) 俳諧精神における人生随順——芭蕉紀行より

(一)

俳人松尾芭蕉の生涯において、俳諧の連歌（連句）が、発句（俳句）や、俳文また『奥の細道』などの紀行と並んで、きはめて重要な要素を占めてゐることは明らかである。数量的に見ても、発句およそ二千句に対して、連歌は、歌仙（三十六句をもつて一篇とする）を主とし、百韻（百句）を始め端物（二句の付合を含む未完成作品）まで、すべてでおよそ三五〇篇である。芭蕉の名の見える連句はほとんどすべて芭蕉の捌きか、その捌きでなくともその意見が有力に作用してゐるので、芭蕉の作品として見ることができるのである。

芭蕉自身のことばと覺しい事例を見ても、このことは明らかに看取できる。芭蕉に親炙し、その信賴を蒙り、江戸詰から国許彦根に帰るに當つて、芭蕉から有名な「許六離別の詞」（柴門辞）や、さらに「許六を送る詞」を与へられた森川許六。かれが李由と共編した『宇陀法師』には、

他門の説に云はく、「芭蕉翁は発句上手、俳諧はふるし」と云ふ人あり。先師（芭蕉翁）常に語りて云はく、「発句は門人の中、予に劣らぬ句する人多し。俳諧においては老翁（自称・自分のこと）が骨髄（本当の精神、心の底。あるいは主眼、要点）」と申されける事毎度なり。他門いかで知るべき。先師一生の骨折は只俳諧の上に極まれり。

と言つてゐる。ここに「俳諧」といふのは、俳諧の連歌すなはち連句のことで、わたしといふ存在のエッセンスは、連句にあるとまで言ひ切つてゐる。これを受けたと思はれるが、芭蕉の郷里伊賀上野の門人服部土芳は、その著『三冊子』さんざうしに

発句は門人にも作者あり。附合つけあひ（連句のこと）は老吟（老いたる俳人、自称。）のほねといひ給ひけると、ある俳書にあり。

と記して、許六の説を肯定してゐる。

芭蕉・曾良行脚図（許六筆）



元禄冬自曾良行脚許六謹書

（野間光辰氏藏）



これらのことばは、その「俳諧はふるし」と言はれたことに対する、ことさらな強調であるなど、さまざまな解釈が可能であるけれども、芭蕉が、連句を発句と同等に、あるいはそれ以上に自負尊重してゐることはたしかである。日本の連歌（連句）が世界的視野において注目されようとしてゐる時にあたつて、このことばは、現代連句にたづさはる者にとつて金玉の響きを伝へるのである。

## (二)

元禄二年（一六八九）三月下旬、河合曾良を伴つて江戸を発ち、遠く陸奥の地を經めぐつて、やがて北陸道に入り、同年九月、美濃国大垣までたどりついた、日数にして百五十日、旅程にして六百里（二四〇〇キロ）に及ぶ、この大旅行は、のち元禄七年初夏のころまでに、紀行『奥の細道』としてまとめられた。

日本文学史上未曾有のこの紀行文を形作るに當つて、芭蕉の念頭を去らなかつたと思はれるのは、先行する平安、鎌倉期の代表的な紀行類であつた。すなはち元禄二年よりさかのぼること二年前の貞享四年十月江戸を発ち、翌元禄元年四月須磨・明石を巡るまでをつづつた『笈の小文』の冒頭近くに、芭蕉は次のやうに記してゐる。



抑々、道の記といふものは、紀氏（注、貫之『土佐日記』）・長明（鴨長明・『東関紀行』の作者とされてゐた。）・阿仏の尼（『十六夜日記』の作者）の、文をふるひ情を尽してよ  
り、余は皆佛似かよひて其の糟粕を改むる事あたはず。まして浅智短才の筆の及ぶべ  
くもあらず。其の日は雨降り、昼より晴れて、そこに松有り、かしこに何と云ふ川流  
れたりなどいふ事、たれ／＼もいふべく覚え侍れども黄奇（黄山谷の奇）蘇新（蘇東坡  
の新）のたぐひにあらずば云ふ事なかれ。されども其の所々の風景心に残り、山館野  
亭のくるしき愁も且つは話の種となり、風雲の便りともなして、わすれぬ所々後や先  
やと書き集め侍るぞ、猶醉へる者の妄語にひとしく、いねる人の讒言するたぐひに見  
なして人また妄聴せよ。

未定稿といはれる「笈の小文」のころは、芭蕉も、わが記す紀行は、その昔のすぐれた  
作品の糟粕を嘗めるに過ぎず、従つて人々に妄聴せよ、いかげんに聞き流せと言つてゐ  
るのである。

しかしながら、畢生の思ひを託してなしとげた陸奥の旅をつづるに当つては、芭蕉は何

とかして中国宋代の黄山谷のやうな奇警の才と蘇東坡の文のやうな斬新さをもった紀行を創出したいと願つたであらう。

今日『奥の細道』の腹案、草稿、覚え書などは一切残つてゐないが、この紀行に目だつて見える特徴の一つは、その骨髓と目された俳諧の連歌の手法・呼吸が著しいことである。

『奥の細道』の構成についての、このやうな視点は、昭和十八年に、この旅において芭蕉に随伴した曾良の『奥の細道随行日記』また『俳諧書留』が初めて印刷発売され事実を忠実にメモしたと覚しいその記録に比して、『奥の細道』が、到るところにたくさんのフイクシオンを混へてゐることからもうながされたのである。

わたしも、「芭蕉『奥の細道』の構成について」(昭和五十二年亜細亜大学教養部紀要 第十号)で、全篇を成す章の数また前後の章段の均斉シムイから連歌の形式のうち世吉よよし(八句・十句・十四句・八句、計四十四句)に最も近いことを主張した。そして、平泉中尊寺の記事は、『随行日記』が「五月十三日、経堂別当留守ニテ不開。金鶏山見ル」とありながら、『細道』が「兼ねて耳驚かしたる二堂ニドウ(注、光堂・経堂のこと)開帳す。経堂は三将の像を

残し、光堂は三代の棺ひつぎを納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて、珠たまの扉風とびらにやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚くわくちの叢くさむらと成るべきを四面新たに囲みて、薨いらかを覆うて風雨を凌しのぐ、暫時千歳しげらくの記念かたみとはなれり。」と、きらびやかな文を列ねてゐるのは、能楽の序・破・急の破部分に当る、最も高揚を旨とする場面だからであることなどを記した。また、この旅の性質上、それを欠くと端物はたものとなるべき恋の場面の乏しいことからして、市振の遊女と同宿する場景、「一家ひとついでに遊女もねたり萩と月」の句で終る優婉な一章を創作挿入したことなども挙げた。

右のエッセイにおいて、気づかなかつたりして書き洩らした事例を、さらに一、二ここに補遺したい。

第一に、有名な「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人也」で始まる冒頭の章は、「草の戸も住みかはる代ぞひなの家」の句をもつて終はり、「面八句おもやちを庵の桂に懸け置く」とつけ足してある。杉風の別荘採茶庵さいちあんを出立する時には俳諧連歌は巻かれなかつたので、この表八句はフィクションであること、それはこれから始まる旅の記が連歌仕立じだてであることを暗示してゐるとのやうに推定したのであるが、なほこれには次のやうな、別の

理由をつけ加へることができると考へられる。

その昔、俳諧師は、長途の旅に出るときは、連歌を書き、初折の表の句を残すのが慣例であつたのであるが、別に俳諧の連歌では、初折の表（六句あるいは八句）には、神祇・釈教・恋・無常・述懐・疾病・固有名詞等を禁じてゐる。しかるに『奥の細道』は、表八句とも言ふべき最初の部の、千住・草加の章の次に、室の八島大明神（栃木県国府町惣社）、ついで日光山東照宮参拝のくだりが出て来る。これらの「神祇」は、表八句の済んだあとのこととするのが、式目で定められてゐるので、開卷早々の神祇を考慮して「面八句を庵の柱に懸け置く」と記した所以と考へるのである。

元禄二年八月、北陸道を敦賀に着いた芭蕉は、ついで美濃国大垣に至り、九月六日同地を伊勢神宮の遷宮参拝のため出発、九月十三日内宮、翌十四日外宮を参拝し、その下旬郷里伊賀に着いたのであるが、『奥の細道』は、美濃大垣をもつて旅を終はつてゐる。最終章は次のとおりである。

露（路）通も此のみなと（注、敦賀）まで出でむかひて、みのの国へと伴なふ。駒に

たすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集る。前川子荊口父子、其の外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふごとく、かつ悦びかついたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば伊勢の遷宮おがまんと、また舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

この文章は、一読してわかるやうに、冒頭の「月日は百代の」に始る一文に照らしても、淡々として軽い筆勢をもって記しとどめられてゐる。松隈義勇氏は、大垣において軽い筆致で旅の結びとしたことについて、終はりの文章を軽くするのは、芭蕉の頭に連句の構成の呼吸があつたことによるものであらうと言ひ、大垣は、伊賀上野の故郷に比べて、かれにとつては第二の故郷であること、さらには旅ををはつてもなほ無限に続く旅の路上であるといふふうにして一篇を結ぶのが理想的であるからして、そのやうな運びになつたのだとのやうに述べてゐる（文教大学短期大学部紀要「文芸論叢」18）。

言ふまでもなく、この章は、連歌における最終句、つまり挙句であり、「酒田の余波日なごり

を重ねて、北陸道の雲に望み遙々えうえうのおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里さんじよと聞く。」と記した酒田の章あたりより始まる「急」の部分は、緊張を緩めながら急テンポで収束に向かひ、なほ未来に余韻をひびかせながら、挙句において安らかにフィナーレを告げるのである。

(三)

以上見てきたやうに、『奥の細道』は芭蕉といふ稀有の魂による、長途の旅の見聞体験を、俳諧連歌の骨法や呼吸を活用して展開することによって成った、日本文学史上比類のない紀行である。

俳諧連歌の特性を、紀行文の構成に活用しえたのは、第一に芭蕉自身が俳諧の連歌の名手であり、かつまた第二に紀行といふ文学ジャンルジャンルの特性が、俳諧の連歌のそれと近似してゐることから可能になったと考へるのである。

俳諧の連歌について芭蕉は次のやうに言つてゐる。

師のいはく、たとへば歌仙は三十六歩也。一步もあとに帰る心なし。行くにしたが

ひ、心の改まるはただ先へ行く心なれば也。(三冊子)

芭蕉俳諧の連歌(連句)は、テーマや筋(プロット)を欠くといふ不思議な特徴を持つてゐる。およそヨーロッパの文学作品では想像もつかぬところであらう。日本文学においても、随筆や紀行は、ややこのことに似た自由な展開が可能であるけれども、連歌のやうに徹底して予見できぬ行先といふことはない。

この特異な性格特質は、遠い連歌発生の昔に胚胎はいたいしてゐることで、いまにはかに解明できなけれども、芭蕉の有名な次のことばは、これについて何物かを示唆しきしてゐるやうに思はれる。『笈の小文』の冒頭近くに、

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其の貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時しじを友とす。見る処花ところばなにあらずといふ事なし。おもふ所月つきにあらずといふ事なし。像花かたちにあらずる時は夷狄いてきにひとし。心花こころばなにあらずる時は鳥獸かぞへに類す。夷狄を出で、鳥獸を離れ



て、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

と見える。

「造化にしたがひ造化にかへれ」と示されて、「造化に従ひて四時を友と」しようとするとき、造化には、テーマも筋もなく、ただ「風雅におけるもの」の心によって、花を見、月を見るわけである。

さらにまた人生にも、社会にも、歴史にも、テーマや筋があらうはずがなく、そこにはただ自然随順、人生随順によって、折に触れて花を見、月をおもふばかりである。さらに未来を言へば、ただ生成発展と観ずるのみである。

テーマも筋書も持たぬ俳諧は、それゆゑにこそあらゆる自然表現も人生表現も容れえて、不可測未来の相を現成げんじやうしうると思ふのである。

〔「国民同胞」昭和五十七年七月十日号〕



(3) 芭蕉俳諧と禪

芭蕉における青春彷徨時代

芭蕉が、若いころ、人生いかに生くべきかについて苦悩したことを回想する、有名な一節がある。元禄三年（一六九二）芭蕉四十七歳の夏ごろ、記されたと覚しい「幻住庵の記」の末尾である。

つらつら、年月の移りこし拙き身の科とがを思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉とびらに入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごととさへなれば、終つひに無能無才にして此一筋につながる。

伊賀上野の郷土程度の、豊かならざる家の次男として生れた芭蕉が、奉公した二歳年上の藤堂良忠（俳号蟬吟）に死別してから、二十九歳のとき出府するまで何をしてみたかはほとんどわからないが、世間並みの青年と同じく、どうやって生きてゆくかについて深く思ひ案じたに違ひない。「仕官懸命の地をうらやみ」、即ち武家奉公をして口すぎしようか、あるいは「仏籬祖室に入らむ」、つまり寺に入って僧侶にならうかと、思ひまどった

のは、主としてこの期間のことと推定できるのである。

ここに注目されるのは、「仏籬祖室」の語で、仏籬は、寺のまがきのこと、即ち寺域であるが、祖室は、祖師の室、つまり禪宗の祖達摩だるまの室の意を示すことである。「恵（慧）能禪師語録」に「吾レ三十三ニシテ仏籬祖室ヲ窺フうかが」と見える。（角川書店「校本芭蕉全集」第六卷俳文篇）慧能は中国禪宗第六祖で、六祖慧能と称よばれ、中国禪の大成者で、その系統の南宗禪が、爾後の中国また日本の禪宗の大宗となったのである。

芭蕉の用語のうち注目される仏教語に「無常」あるいは「無常迅速」がある。

#### 無常迅速

頓とんて死ぬけしきも見えず蟬せみの声

この他「無常の観」（『堅田十六夜之弁』）など、「無常」の語は芭蕉俳文に散見するが、懐き装まの『正法眼蔵随門記』に見る道元の、頻用する「無常」の語によって明らかなく、この語もまた禪宗色の濃い語と言ふべきである。

芭蕉の用語または著想についての出典は、和漢両面にわたり尠からざる書目が挙げられるが、注目すべき一書に『錦繡段』がある。室町時代の半ば、京都五山にみた天隱竜沢が

文明十五年（一四八三）、唐宋元名家の絶句を門類に分かつて編纂したもので、その序文を見ると、

「古人曰ク、詩に参ズルハ禅ニ参ズル如シ。詩モ禅モ其ノ悟入ニ到レバ則チ言語ノ及ブ所ニ非ザルナリ」とのやうに詩禅一如の思想がうかがはれる。（佐藤田『芭蕉と禅』）

道のべの木むくげは馬にくはれけり（『野ざらし紀行』）

の句は、前々より芭蕉の禅的教養のあらはれと言はれて居り、また現に昨年五月下旬、文学会訪中代表団の一員として中国へ参った折、「漢俳」の提唱者の一人趙樸初氏（対外友好協会副会長、中国仏教協会会長）は、芭蕉のこの句は、禅宗の影響を受けてゐると重ねて強調された。（亜細亜大学アジア研究所紀要第九号、宮脇昌三「漢俳について」）

『錦繡段』には、この句に関連する詩句として次のものがある。（中村俊定監修『芭蕉辞典』）

可憐榮落在朝昏（槿花 李義山）

槿花一日自為榮（放言 白楽天）

芭蕉の禪的教養については、以上のやうな書籍の愛読の他、二十代青春彷徨のころ、妙心寺あるいは天竜寺で雲水の一人として修行僧の中に立ち交まじつてゐたのではないか（佐藤田『芭蕉と仏教』）といはれる。その真疑を正す道はないが、その決定的影響は、常陸鹿島根本寺の仏頂和尚とのめぐりあひより始まるのである。

### 仏頂和尚とのめぐりあひ

元禄七年（一六九四）十月十二日、大阪で客死した芭蕉の遺骸は、同夜淀川を舟で運ばれ、十三日膳所ぜんぜ義仲寺に着き、十四日、生前の遺言どほりそこに葬られた。その時遺品として残されたものは、旅の携行品たる笠・菅蓑・杖・頭陀づだ（袋）・銅鉢・鉄如意・木硯、衣服として紙縷袈裟しろうのけさ・被風ひか、書物類として小本観音經・古今集序註・百人一首・（応安）新式、それに「奥の細道」（素竜清書本）の六部、なほ出山仏一体（長さ一寸一分—三センチ）あつて、すべてで十五品、いかに芭蕉の生活が簡素に徹底してゐたかを示してゐる。文字どほり無所著無所有の世捨人である。

右のうち紙縷袈裟と鉄如意一本は、仏頂禪師より付与されたもので、鉄如意は長さ一尺

九寸（約六〇センチ）蔦の葉形で、表に「遊行如意如獅子王」、裏に「応漂泊風土桃青需雲岸野衲仏頂書 尚行敬彫之」と彫刻してある。

禅家の遺贈品として最も重いものは袈裟と如意であるといふ。この二品を芭蕉に贈ったといふことは、佛頂和尚の芭蕉に対する眷顧（特別に目をかけること）依託の深重なることを思はせるのである。

この両者のめぐりあひはいかなる縁によるものであるか。

仏頂河南和尚は、八歳の時より鹿島根本寺の冷山和尚に就いて修行すること十年、諸国を巡り、松島瑞巖寺の雲居禅師にも教へを受けた。延宝二年（一六七四）、冷山遷化によって根本寺第二十一世に就かうとしたが、鹿島大神宮宮司から拒否され、寺領百石を半減されようとした。本来、根本寺は、聖徳太子創建、高麗僧惠灌開祖、推古天皇の勅願寺たる名刹、のち弘安年間蒙古来襲に当り後宇多帝は「天下平均 異国帰伏」の勅印（寺宝として現存）を下賜され祈祷を修せしめられた。鹿島神宮の神宮寺ではなく独立の大寺であったが、家康の黒印状が神領の内百石といふ紛はしい書き方であったので、神宮側のこのやうな仕打となつたものと言はれる。そこで仏頂は江戸へ出て訴訟を提起し、九年のち天

和二年（一六八二）つひに勝訴した。この間、仏頂は、江戸出府の際は、根本寺の江戸寺である深川大工町の臨川庵に滞在した。その間に延宝八年（一六八〇）冬より深川芭蕉庵に入った芭蕉と交渉を持つやうになり、芭蕉が仏頂に禅の教へを受けるやうになったといふ。（高木蒼梧俳誌『こよろぎ』昭31三一六）

仏頂和尚は、勝訴の見込みがつくと、根本寺住職を第二十二世頑極和尚に譲って、寺の隠寮に住んだ。

根本寺勝訴の裁定を下したときの社寺奉行は、甲州の領主秋元但馬守喬朝たかもとで、天和元年（一六八一）十一月入封し、甲州谷村辺やむらの三万石を領した。のち川越・山形やがて館林と累進した大名である。

天和二年（一六八二）十二月二十八日駒込大円寺を火元とする大火のとき芭蕉庵も類焼し、芭蕉は甲州谷村に赴いたが、これを導いて世話したのは、秋元但馬守の国家老高山伝右衛門繁文ひら（俳号藥時ひじ）で、これは仏頂―秋元喬朝の関係によるものであらう。また仏頂に参禅した六祖五平もこの谷村に住んでゐたので、これまた芭蕉甲州流寓びんの便びんとなったと思はれる。

## 仏頂の和歌及び偈

こえて貞享四年（一六八七）八月の『鹿島紀行』の旅は、浪客の士曾良と水雲の黄葉僧宗波を伴なって、当時根本寺隠寮に住んだ仏頂和尚をたよつての観月旅行である。ほかの紀行と違って文中に句を織り込むこともなく（巻末に一括して掲げてある）、修禅僧の行脚のやうな宗教色でおほはれてゐる特色を持つ。

「三衣さんえの袋を襟に掛け……柱杖しゆじやう引き鳴らして、無門の関も障るものなく、天地に独歩して出でぬ」の発足は、宋代の禅僧無門慧開の『無門関』の頌ぶ「大道無門千差路有リ 此関ヲ透とほり得バ 乾坤ニ独歩セン」を踏まへての勇奮である。筑波山の男体女体の二峯を見て、「かの唐土もろこしに双剣の峯ありと聞えしは、廬山の一隅なり」と記したのは、前述の『錦繡段』の、来鵠きこく作る所の「天ニ倚よツテ双剣古今閑カリ」より始まる七言絶句「廬山双剣峰」を引いたものである。

その日は、「昼より雨頻りに降りて月見るべくもあらず。麓に、根本寺の先の和尚、今は世を遁のがれて此所に在しけるといふを聞きて、尋ね入りて臥しぬ。頗る人をして深省を發



せしむと吟じけむ、暫く清淨の心を得るに似たり。」と、杜甫の「遊龍門奉先寺」の「覺メント欲シテ晨鐘ヲ聞ク。人ヲシテ深省ヲ発セシム」を引いて、仏頂膝下の謹慎さを示し清淨心を得たと恭敬の心を表はしてゐる。

この時の仏頂和尚の和歌は、

折々にかはらぬ空の月影もちぢの眺めは雲のまにまに

であり、このあと元録二年夏、『奥の細道』の旅において、下野国雲巖寺に仏頂山居の跡を訪れた芭蕉は、かつて聞いたことのある、仏頂の和歌、

豎横たよこの五尺に足らぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

を掲げ、「木啄きつづきも庵は破らず夏木立」と禪師に対する敬愛の情を表はしてゐる。

いま根本寺に残る仏頂和尚の頂相ちんそう(肖像画)に次のやうな偈げを自書してゐる。

乾坤ヲ踏ふミ破ラバ、日月ハ脚痕タリ。仏祖来ルヤ、吾ガ門ニ容レズ。天堂(天国の

意)地獄、到ル処尊ト称ス。咄とつ、一眠いっせん一餐いっせんセン。貞享五辰年孟正(正月の意)廿日

仏頂書

この偈は、いかにも臨濟僧たる仏頂の面目躍如としてをり、前掲の二首の和歌ともども、



この和尚の肺腑をあらはにしてみると感ぜられる。

### 芭蕉晩年に到るまでの風交

仏頂と芭蕉とのつきあひは、芭蕉の没年に到るまで続いたらしく、元録七年春膳所ぜの曲翠かその弟怒誰宛どすいてと推定（時期宛名とも）される芭蕉書面に、

和尚の肝膈（心の中）いまだしかと探られず候間重ねて評判申し遺はすべく候。和尚にも旧臘は寒ぬるく候故御病氣も心能よく、愚庵まで手を引かれて一夕御入り、大道の話止めて俳諧にて半夜に到り候。

梅桜みしも悔しや雪の花

と御申し候。感心致す事に候。

また、同じ時期と推定される怒誰あて書簡には、

御修行相進み候と珍重、唯小道小枝に分別動き候て世上の是非やむ時なく、自習物をくらます処、日々より月々年々の修行ならでは物我一智の場所へ至る間まじく敷存じ候。…  
…仏頂和尚も世上愚人に日々声をからされ候。御尊たまたまなども適々出で申候。（下略）

ここには芭蕉が、仏頂より得た禪精神が見えるやうである。小道小枝に動く分別、物をくらます自智、これが我執、執我的自己であり、積年の修行により到るべきは、物我一智（一如）、自他不二の世界である。

土芳は『三冊子』さんざうしに記してゐる。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞ありしも私意をはなれよといふ事なり。……たとへばものあらはにいひ出でても、そのものより自然じねんに出づる情にあらざれば、物我二つに成りて、その情識に至らず、私意のなす作意なり。

「一切衆生、悉有仏性」を、道元は、「一切の衆生、悉有は仏性なり」と読んだといふ。  
（山田輝彦『明治の精神』）「造化にしたがひ造化にかへれ」と芭蕉は記した。

俳諧において有情無情の森羅万象と相通ずる世界を現成げんじやうすることによって、芭蕉は日本文化の生々發展する精英要素を長養してゐるのである。

（「国民同胞」昭和五十八年五月十日号原題「芭蕉と禪」）

### (三) 再顧しきしまのみち

#### (1) 帝王と詩歌——日本皇室と「しきしまのみち」

第二次世界大戦後二十数年にして、敗戦国日本が示した驚異的な経済発展を契機として、その由つて来たる素因を求めて、日本文化の研究が、いま世界各国で興らうとしてゐるやうである。

その場合、現代日本を作りなした直接の要因は、鎖国を解いて、欧米の近代文化を吸収した明治時代にあることは、国内海外を問はず、研究者においておよそ異議ないところであらう。さらに、この明治時代が、総じて明治天皇といふ不世出の帝王に導かれた時代であつたことも、多くの識者のうべなふ事実であらう。

有史以来、世界各国には、女王を含めて、多くのすぐれた指導者としての帝王が生まれた。明治天皇も、日本文化研究の精英要素として、世界の研究者の注目するものとなりつつある。

薄識寡聞ながら、日本の天皇を帝王若しくは国家指導者研究に加へるとき、きはだった一つの重要な視点のあることを指摘したのである。それは、日本天皇、特に明治天皇は、非常にたくさんの和歌を作られた詩人であるといふことである。

明治天皇は、治世四十五年の間に十万首以上の和歌を詠まれた、すぐれた詩人であった。ここに言ふ「詩人」の「詩」は、ヨーロッパ流の詩の意味のほか、ことばによる論理学、日本の伝統精神や人の道にかかはる倫理道德、さらには人生観世界観に及ぶ哲学をも包含する全人的表現であつて、それは「しきしまのみち」と称よばれるところのものである。

しきしまのみち、即ち歌を詠むことの要諦について、明治天皇は次のやうに示された。

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

思ふことおもふがままに言ひいづるをさな心やまことなるらむ

すなはち、すなほな心をすなほに歌ひ出るのが、歌即ちしきしまのみちの要点であり、基

本であるとされるのである。明治天皇ご生涯の十万余首は、この本道を直進し、精誠を加へられた作品群であった。

明治時代の日本の難局を指導せられたご精神は、鏡のごとくそのお歌に明らかである。

### 正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

右のお歌は、日露戦争のさ中、明治三十七年に詠まれた、「正しく心緒しんしよ（心の動くいとぐち）」を述べられたものである。

国のためあたなす仇はくたくともいつくしむべき事な忘れそ

このご精神は、乃木將軍を通して、敗軍ステッセル將軍に及び、帯刀を許し、果敢なる旅順港防衛の勇將としての礼遇をなさしめたのであった。

今次大戦において、日本は、今度は勝敗所をかへて、国破れて山河あり、慘澹たる敗戦

を迎へた。

明治天皇のお孫に当たられる今上天皇（注、昭和天皇）の敗戦時のお歌――

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

敗戦の年の九月、今上天皇は、米国大使館においてマッカーサー元帥と会はれた。その時どんなお話をされたかは、右のお歌によって、われわれは充分知ることができるのである。その時の、この会見は、双方秘密を守って外聞せぬ約束であつたと洩れ承はる。陛下は今もつてお話にならない。マ元帥の言葉は、昭和三十年九月、故重光葵氏によって発表されたのであつた。

「どんな態度で、陛下が私に会われるかと好奇心をもつてお出会いました。しかるに実に驚きました。陛下は、まず戦争責任の問題を自ら持ち出され、つぎのようにおっしゃいました。すなわち「私は、日本の戦争遂行に伴なういかなることにも、また事件にも全責任をとります。また私は日本の名においてなされた、すべての軍人及

び政治家の行為に対しても直接に責任を負います。自分自身の運命について貴下の判断が如何様なものであろうとも、それは自分には問題でない。私は全責任を負います。私はこれを聞いて、興奮のあまり、陛下にキスしようとした位です。もし国の罪をあがのうことが出来れば進んで絞首台にも上ることを申出るといふ、この日本の元首に対する占領軍の司令官としての私の尊敬の念は、その後ますます高まるばかりでした」

昭和四十九年（一九七四）十一月、アメリカ・フォード大統領が訪日し、やがて離日の折、陛下の詠まれたお歌——

大統領は冬晴のあしたに立ちましましぬむつみかはせしいく日を経て

このお歌は、後日下島連氏（亜細亜大学教授）の名訳によって、当時の安川駐米大使を通じて、大統領に申達されたよしである。

『世界思想』昭和六十一年（一九八六）三月号

(2) 歌人 宗良親王<sup>むねなが</sup>

南北朝時代、文事武事両面において南朝の柱石であられた後醍醐天皇第五王子の宗良親王のことがわが胸奥に宿ったのはいつごろのことであらうか。わたしの生まれた村は、親王が、その青壮年時代およそ三十年間、本拠とした信濃国伊那郡大河原（現大鹿村の内）と、峠一つを越した山つづきにあり、村内には大鹿村と縁つづきの家もかなりあったので、小学校のとき、郷土史の先生のお話もあったに違ひない。しかし、はっきりと自覚的に親王の事蹟を調べたのは、戦後三十年代、長野県上伊那郡誌や同東筑摩郡誌<sup>ちくま</sup>における文学を担当した折である。

昭和四十六年に時事通信社より発行された小田村寅二郎編『日本思想の系譜』上巻に、「宗良親王」の一項が入り、夜久正雄解説により、『李花集』より二十一首親王のお歌が載せられてゐる。このとき、わたしは、岡谷や上田に寓居して寧日なく、依頼された宗良親王を祀る信濃宮の写真も友人から借りて間に合はせたやうな仕末であつた。

それからさらに十数年、昭和六十一年春、わたしは、亜細亜大学から駒ヶ根総合文化セ



宗良親王像



宗良親王を祀る信濃宮

ンター所長に招かれて郷里に帰ることになった。そこでわたしを待ってみたのが、右の大鹿村に残ってゐる、長野県下唯一の、県無形民俗文化財指定を受けた大鹿歌舞伎の後援会の仕事であった。わたしは、駒ヶ根市賛助会の会長を仰せつかつて、翌昭和六十二年三月、文化会館において関係者を招き浄財奉呈式を行なひ、記念の歌舞伎公演を見学したのであるが、そのあと五月三日、大鹿村における恒例の歌舞伎上演に招かれて、つひに長年の夢であった宗良親王を祀る信濃宮に参拝する機会を得たのであった。

小雨そぼ降る中、山深く、念願であった親王の宮に詣でた感激は、その夜わたしに忽ち十数首の歌を生ませしめたのである。

これらの拙き歌どもは、かつて「沢部通信」（国文研会員沢部寿孫氏が同人から寄せられる歌を刷紙として月に一回位出してゐるもの）に載せて頂いたところであるが、再掲を許されたい。

幾十年<sup>そとせ</sup>思ひ慕ひし宗良の親王<sup>みこ</sup>の宮居に詣でつるかな

春雨のややに止みゆく今日この日信濃宮にぬかづくうれしき

みすゞかる南信濃の若者の勤勞奉仕に成りしこの宮

方三間本殿のみのみやしらの霜雪四十年古りにけるかも

敗戦とともに廃れし親王の宮拝殿もなく祓場もなく

ひたすらに吉野の朝廷のおんために生涯終へし親王をしぞ思ふ

李花集と新葉和歌集撰びましし親王のいさをしとこしへにこそ

「君がため世のため」のみ歌高誦せばなほ雄心の呼び覚まさるる

上歳なる信濃宮に詣でつつ御所平なほ雲の上にて

(注、御所平は親王の御隠家を設けたところ。信濃宮よりさらに八軒奥にある。)

宗良の親王の生涯社前にて語りつつ涙とどめかねつも

広き世に打ち捨てられて大鹿の村人たちの守るこの宮

○

昭和六十三年春、その祖先が、南朝方の諏訪社(諏訪氏)の支配下にあつて、宗良親王

とその御子尹良親王(たまたが(ゆきよし))に奉仕したと伝へる黒河内谷右衛門氏(現下諏訪町住)によつて

『宗良親王全集』が編まれ発行された。一千頁を超える大冊で、この書によつて始めて、

親王の歌集『李花集』『信太杜(しのだもり)(宗良親王千首)』及び撰集『新葉和歌集』が一書にまとめ

られ、それぞれの初句索引・編年索引・地名人名索引が整備され、さらに南山皇胤録始め宗良親王に関する諸家の研究が集録され、親王研究の諸資料はまさに完備されたと言つていい労作である。

中世（鎌倉・南北朝・室町各時代）は、文献資料においても一面暗黒時代と言ふほどに寥々たるものたるものがあり、特に地方においては江戸時代以前は多くは皆無にひとしい状況を免れえない所である。

その中であつて、宗良親王は、信濃を中心に、伊勢・遠江・武蔵・越後に転戦しつつ、感懐を和歌に残されてゐて、それはその地の、ひいては日本の歴史・和歌・民俗研究にとつて、砂漠の中の宝石のごとく貴重である。

いま、信濃国でも僻遠の地伊那郡大河原における詠歌と覚しい親王のお歌を拾ひ出して、動乱の世を生きた親王の感懐を偲ぶことにする。

次のみ歌は、親王の始めての大河原入りで、興国五年（一三三四）は、親王の弟君、後村上天皇の治世、親王時に三十四歳であつた。

興国五年信濃国大川原と申す山のおくに籠り居侍りしに、たゞかりそめなる山里のかきほわた

り見ならはぬ心地し侍るに、藪しわかぬ春の光まち出づる鶯の音もむかし思ひ出でられしかば  
かりのやどかこふばかりの呉竹をありし園とや鶯のなく

春ごとにあひやどりせし鶯も竹國生のそのふに我しのふらむ

信濃国伊那郡と申す所にて花見侍りしに、思ひ出で侍りける

散らぬまに立ちかへるべき道ならば都のつとに花も折らまし

ふかき山里にすみ侍りし頃、今は誰かたづぬべきなど心細く覚えしに、郭公の鳴きければ

こと問はむ人には告げよ時鳥われ世の中にありとばかりは

信濃国いなと申す所に侍りし頃、五月雨はれまなかりしに、都へ申しつかはしける

思ひやれき木曾そのみさかも雲とづる山のこなたの五月雨のころ

山深く籠居こもりか侍りし頃、木ずゑに蟬の鳴くを聞きて

山高み世の人ごと聞えぬに何をうつせみ鳴きくらすらむ

信濃国大川原と申し侍りける深山の中に、心うつくしうふり積もりて、道行きぶりの便りも絶

えはてにしかば

稀にまつ都のつても絶えねとや木曾の御坂も雪埋むなり

信濃の宮方は、総勢すぐって、正平十年（一三五五）秋、宗良親王統率下に最後の桔梗ききょうガ原合戦を戦って敗れ、つひに再起の望みを絶たれる。このあともずっと大河原城を中心に、親王を守り仕へた武将は香坂高宗であった。高宗の名は、次の親王の歌以外には、片鱗をも止めない。かれの非躬ひきゆうの忠誠（わが身をかへりみないで忠節をつくすこと）を後世に残したのは親王のみ歌であった。

信濃国大河原といふ深山に籠て、年月をのみ送侍しに、さらにいつとまつべき期きもなければ、香坂高宗などが、朝夕の霜雪を払ふ忠勤もそのあとかたなからん事さへかたはらいたく（注、気の毒に）思ひつづけられて

いはで思ふ谷の心のくるしきは身をむもれ木とすぐすなりけり

○

親王のご歌風については、岩波文庫『李花集』の解説に、編者故松田武夫氏は次のごとく述べてゐる。

親王の御母は、贈従三位為子と申し、二条為世の女であるから、親王は生来歌に対する天分を有して居られたと拝せられる。…加しかのみならず之本書によると、親王は二条為定（御

生母の弟の為道の子）を師としてその道に精進遊ばされたことを窺ふことができる。従つて親王の御歌風は、二条家風と申すべきであらう。然し本集の御歌は、御壮年王事に東奔西走遊ばされた頃の御作で、悲痛なる御体験、切実なる御苦悩の結果、詠み出されたものがある。

次の有名なお歌は、この「悲痛なるご体験と切実なるご苦悩」の一端である。正平七年（一二三二）、時に親王四十二歳）閏二月、親王征東將軍に任ぜられ、伊那郡大河原より武蔵にご進発、足利尊氏軍と小手指原こてさしはらに相戦ふに到つた。

遠国に久しく住み侍りて、今は都の手ぶりも忘れはてぬるのみならず、ひたすら弓馬の道にのみたづさはり侍りて、征夷將軍の宣旨など給はりしも我ながらふしぎに覚え侍りければ、歌よみ侍りし次に

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむ物とは

（李花集）

おなじ頃、武蔵国へうちこえて、こてさしばらといふ所におりゐて、手分けなど侍りし時、いさみあるべきよし、つはものどもにめし仰せ侍りしついでに、思ひつづけ侍りし

君がため世のためなにかをしからむすてゝかひある命なりせば

（新葉和歌集）



右の前書は、『李花集』に「戦場に出で侍りし道すがら、いさみあるべき事などつはものどもに仰せふくめ侍りし次に、思ひつゞけ侍りし」とあり、武士たちに覚悟を促すとともに、ご自身に繰返し大義に殉ずる覚悟を固めてをられるのである。

この戦ひ、宮方は信濃・上野・越後の兵合はせて二万余、終日の決戦に宮方は敗れ、その後南朝方はつひに再び起つ能はざる状況に沈淪するに到つたのである。

かくて南風競はざるままに年を経て、親王は、意を和歌の道にひそめ、伊那郡大河原において、建徳二年（一二七二）ごろまでに『李花集』の稿をまとめられたやうである。やがて文中三年（一二七四、時に親王六四歳）冬、ここを立出でて吉野行宮（賀名生）に入られた。既に後村上天皇は数年前に崩御され、お若い長慶天皇の御世であった。親王は天授三年（一二七七）ここで天皇の思召しを受けて『信太社（千首和歌）』を詠進された。

『新葉和歌集』哀傷の部に見える、わが子の夭折に対する親王の哀悼歌は、この時の留守の間に大河原で亡くなった王子（よみ人知らずと名を秘してゐる）に対するものと言はれてゐる。

長月の末っ方、病ひ重くなりて今日限りになりぬるよし申しおこせ侍りしついでに



いかに猶涙をそへてわけわびむ親に先だつ道芝の露

(よみ人知らず)

かへし

吾こそは荒き風をも防ぎしにひとりや苔の露はらはまし

(中務卿宗良親王)

これを見て次の日の朝つひに無くなりけるとなむ

親王が大和長谷寺において御落飾されたのはこのゆゑと言はれてゐる。かくて翌天授四年、再び信濃に下向されたが、天授六年(一三三〇)、再度信濃を出て吉野に上られ、この度びは河内国山田にご住居、南朝君臣の和歌を後世に残さんとする志により『新葉和歌集』を撰進されたのであった。

いまだ親王全歌集を味到するに到らないのであるが、以上あらあら見てきたとほり、親王のみ歌は、二条風の平明な雅語をもつて、宮廷歌人の到底思ひ及ばぬ波瀾悲痛の人生を表現されてゐる。村松剛氏が、前記『宗良親王全集』の跋文『宗良親王論』に言はれた評言、「宗良親王は、これまであまりにも、吉野の『軍書』のなかのひとりとして論じられて来た。むしろ在原業平から西行をへて心敬、宗祇にうけ継がれてゆく歌の伝統のなかに、歌人としてのこの親王はおかるべき存在だろう。」は、うなづかれるところである。

○

本稿を草しつつ、わたしの胸を去来して離れなかった一事がある。それは、先ごろ崩御なされた先帝昭和天皇のおん事である。

右に挙げたとほり、宗良親王のお歌「思ひきや手をふれざりし梓弓おきふし我が身なれむものとは」は足利尊氏軍との決戦を迎へようとす、信濃国大河原ご出発の折の感慨で、親王四十二歳、二十七歳にして天台座主から還俗げんそくされてより、十数年にわたる東奔西走の戦陣を顧みられての所懐であった。

先のみかど昭和天皇も、満洲事変・支那事変やが大東亜戦争と、おきふし戦争のさ中に心勞せられ、戦運傾く徴候あらはとなった、ガダルカナル撤退の折（昭和十八年）、陛下は四十二歳であられた。

歴代天皇のうち、先帝陛下ほど、長期にわたる事変・戦争に応接、叡慮を悩まされた方はをられないことは、万人の知るところである。あまつさへ、敗戦後一身を犠牲にされて国民を飢餓より救ひ、復興の先達をなされたことであった。幸ひに陛下は在位六十年記念式典（昭和六十一年）に、「最もうれしく感じましたことは、国民の努力によって、戦後

の復興が立派に行はれ、こんにちの繁栄を築きあげたことであります。」と仰せられる日を迎へられたことであつた。

宗良親王は、命運はかない吉野朝の末期、後龜山天皇の京都ご還幸も近い元中（至徳）の初年没せられた。大日本史は「その終はる所を知らず」と記したが、近年醍醐三宝院藏文書により、大河原薨去説が確實視されつつある。

最後に、親王と昭和のみかどの、古稀（七十路）（ななそぢ）を迎へられた感懐のお歌を掲げる。

宗良親王（『宗良親王千首』）

ななそぢ七十年のなみおりかくる浜ひさご久しや我が身しほたれてのみ  
うたた寝の夢にみえつる七十年のむかしをながくなに思ひけん  
七十年のよはひをたもつこれやこのななしの社のめぐみなるらん

（注、「ななのやしろ」は、山王七社の滋賀県坂本の山王神社（日吉神社）のこと。親王幼時より親しみ参られた神社。）

昭和天皇（『歌人今上天皇』より）

七十歳になりて 四首（あけぼの集）

七十ななそぢの祝をうけてかへりみればただおもはゆく思ほゆるのみ  
ななそぢを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ  
よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ  
ななそぢになりしけふなほ忘れえぬいそとせ前のとつ国のたび

〔「国民同胞」平成元年五月十日号〕

(3) 親王余芳と遺蹟

わたしの宗良親王に対する関心はいつごろからか、しかと覚えはないが、最も資料集めに熱心だったのは、昭和三十年前後のころかと思ふ。いま手許には、「宗良親王覚書」「南北朝における諸氏族事蹟」「新葉和歌集作者別類聚」「宗良親王歌集語彙」などの、表紙は既に黄変したノート類がある。

然し、昭和三十六年以降わたしは伊那の地を離れ、高校長退職後は東京の亜細亜大学勤務になった関係で、親王ゆかりの地大河原を尋ねる機会もなく過ごしてきた。そして漸く、生まれて始めて信濃宮に参拝できたのは、四年前の昭和六十二年五月三日のことで、大鹿歌舞伎見学の駒ヶ根郷土研究会の会員諸氏といっしょであった。

その夜わたしは、長年の思ひを果たした感激を十数首の短歌に残しえた（本編(2)に所載）。いまその内の二、三を挙げれば――

幾十年思ひ慕ひし宗良の親王の宮居に詣でつるかな

春雨のややに止みゆく今日この日信濃宮にぬかづくうれしき

ひたすらに吉野の朝廷みかどのおんために生涯終へし親王をしぞ思ふ

「君がため世のため」のみ歌高誦うたせばなほ雄心の呼び覚まさるる

宗良親王の残された自撰歌集『李花集』は戦時下の昭和十六年岩波文庫本として松田武夫校訂本が出刊されてゐるが、いまは絶版として手に入れ難く、また親王の編集によって准勅撰集に挙げられた『新葉和歌集』も稀観きこうの書であるが、幸ひのことに、昭和六十三年春、その祖先が、南朝方の諏訪社（諏訪氏）の支配下にあつて、宗良親王とその御子尹良親王ただなが（よしゆき）に奉仕したと伝へる黒河内谷右衛門氏によつて両書の外『信太杜』しだのもり（宗良親王千首）をも含め、さらに『南山皇胤録』を始め宗良親王に関する資料や諸家の研究をもあはせ『宗良親王全集』が発刊されたことは、まこと画期的なことであつた。

わたしは、旧制高校時代よりその一員である国民文化研究会の機関紙『国民同胞』平成元年五月号に乞はれて「歌人宗良親王」なる一文をしたため、主として大河原における親王のお歌を揚げて、三十年にわたる山村生活に堪へ南朝再興のため精忠を尽された親王をお偲び申しあげたことであつた。

わたしは、昭和六十一年秋より文化センターで月二回の茜会（始め「古典の会」）とい

ふのを担当し、さまざまな古典に親しんできたが、この四月より思ひ切つて宗良親王研究を試みることにしたのである。

その第一回は、右の「歌人宗良親王」に添へて「帝王と詩歌―日本皇室としきしまのみち」(『世界思想』一九八六年三月号所載)を講じた。

第二回は、右の『宗良親王全集』にある村松剛氏の「宗良親王論―跋にかえて」を選んで、ともに学んだのであるが、このエッセイは、わたし自身大いに教へられるところがあった。

先づ冒頭に――

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我身なれんものとは

宗良親王の人生をみごとくにうたいきつた絶唱と思う。

と記し、「南朝皇胤中の最長老として、四十年に近い歳月を宗良親王は戦野ですごす。その間に後醍醐天皇も、はるかに年下の異母弟後村上天皇も崩御され、文中三年に久しぶりで吉野にもどったときには、長慶天皇の御代になっていた。……二人の貴種は互いに面識

がない。このときの親王の歌が、

おなじくば共にみし世の人もがな恋しさをだに語りあはせん

長く生き過ぎたという思いが、親王にあっただろう。吉野もまた、歌人皇子の家郷ではなくなっていた。

かひなしな年のみふりてつもれども行きかへるべき方をしらねば

七十歳をすぎてなお漂泊の生活だった。父帝後醍醐の意志に忠実に、しかも酬いられること少なく生きたことにおいて、親王の生涯は吉野朝でもきわだっている。」

ついで、「続千載集」「続後拾遺集」などからご生母二条為子の歌をひき親王の歌との繋つながりを探り、また父君後醍醐天皇の律動感ゆたかで帝王らしい大らかさの見える御製と親王の和歌との関はりに言ひ及び、やがて、有名な



君がため世のためなにかをしからんすててかひある命なりせば

なる一首が、のちのち幕末の志士から、大東亜戦争の特殊潜航艇の青年士官にまで及んでその志操を支へてゐることを述べるのである。そして最後に――

宗良親王はこれまであまりにも吉野の「軍書」のなかのひとりとして論じられてきた。むしろ在原業平から西行をへて心敬、宗祇にうけつがれて行く歌の伝統のなかに、歌人としてのこの親王は置かるべき存在であろう。」と結んでゐる。

わたしもまた茜会教室で蕉門各務支考の「歌書よりも軍書にかなし吉野山」なる句をひき、「軍書より歌書に慕はし信濃宮」なる即製句を呈示した事であつた。

茜会ではいま『大日本史』における列伝中の「宗良親王」の項を読み、唯今毎週日曜日午後八時よりのNHKテレビ「太平記」（吉川英治『私本太平記』に拠る）を参考にしつつ進めてゐるところである。

○

この稿を一応閉ぢるに當つて、つけ加へたい一事がある。それは茜会の会員たる北原富

士子さんから提示された『李花余芳』なる冊子についてである。わたしの見たのはその第19集と第20集で、発行は信濃宮奉讃会、編集者は下伊那の豊丘村松岡正人となつてゐる。

本冊子は『李花余芳』の名が示すとほり『李花集』の余香余沢を慕ふ人たちの和歌を集めたもので今の世にかやうな集まりがあるのかと甚だ感銘したことであつた。

早速に松岡さんにお手紙を差上げ奉讃会の活動などをお伺ひしたところ、この冊子の編集は第一期は大鹿村の前島村長さんで、第二期（第十一集より第二十集）はこの松岡さんで、主として伊那谷歌会会員を中心としたものであるが、松岡さんが数年前より脳梗塞で就床中で、唯今編集者として新しい人を探してをられる旨の返信を頂いたのである。

宗良親王とふかい因縁のある伊那谷に生まれた、この奇特な歌集の続刊を切に望みながらも、編集者として適任の人の心当りがないので、松岡さんにもご無音ぶいんしてゐる次第である。

いま、集中より二、三の方々の特に親王を偲ぶ作品を摘出したい。

峽かふかく宮が悲願の色染みて紅葉炎え立つ大鹿の山

伊那市 宮島ふじ子

谿深く抛りて再起を計りたる雄凶空しき信濃の宮は

南箕輪村 堀 伊波穂

御所平に宗良親王を護り来し裔すまらの家の軒も傾く

飯田市 後藤 守

紀伊の后きいも信濃の宮も醒め給へ山紫に染まる夕べは

飯田市 村沢多美子

○

右は、わたしが会長の職を仰せつかつてゐる駒ヶ根郷土研究会の会報『郷土』第15号（平成三年八月十日発行）に載せた一文であるが、茜会は、元弘元年（一三三二）十月、後醍醐天皇討幕の計画敗れ、当時天台座主であられた宗良親王も捕へられ、幕府方の長井高広邸に幽閉された折、日吉社に祈願された歌、

いかにせん頼む日吉の神な月照らさぬ影の神の時雨を（李花集六〇四）

これが今残る親王の歌として最初のものとなるが、これを始めとして、事件を辿って親

王の歌を鑑賞してきたわけである。

後醍醐帝、元弘三年（一二三三）、隠岐を脱出、京都に還幸されて建武の新政が開かれたが長く続かず、足利尊氏、鎌倉に下って叛旗をひるがへし、延元元年（一二三六）京都より一旦九州に追はれたが、光厳上皇を奉じて再度入京するに当り、後醍醐帝はひそかに吉野に遷幸せられ、これより五十有余年の南北朝抗争の時代に入る。

このころ比叡山にあった尊澄法親王は、北畠家の勢力下にあった伊勢の一の瀬に下ったが、翌延元二年の秋ごろ、還俗して宗良親王と改め遠江国井伊城に移って東海道の固めに任じた。翌延元三年の春、北畠顕家軍と合流し西征したが、顕家軍が奈良坂・天王寺の戦いで敗れると親王は初めて吉野に入られた。顕家はこの時和泉の石津で戦死し、ついで新田義貞も越前長島で戦死。楠木正成は前々年、東上する尊氏軍と戦ひ敗れて一族もろとも自決したので、南朝の陣営は寥々たるありさまであった。

この年九月、親王は父帝の命により弟君義良親王、北畠親房・顕信父子とともに伊勢大湊を出港し海路東国に向かったが、途中遠州灘で暴風雨に遭ひ一同四散、親王は白羽しろはに漂着し、井伊城に入られた。この時親房は常陸に漂着、義良親王・顕信は尾張の篠島に吹

きもどされ、吉野に帰る。

宗良親王は、吉野にあることわづか数ヶ月、このあと吉野に入られたのは、三十六年あとの文中三年（二三七四）のことである。また翌延元四年（二三三九）八月十六日、後醍醐帝が崩御されてゐるので、父帝とのご対面もこの時が最後であった。

宗良親王は、延元四年九月、駿河の安倍城で興良親王（亡兄護良親王のみ子と言はれる）に対面し、そこに滞在したと思はれ、翌興元元年（二三四〇）七月ごろ安倍城出発、甲斐を経て信濃に入られたが、この時は信濃国でも姨捨山下の滞在であったとされる。一方、この年六月、北条時行（高時の子、延元三年後醍醐天皇より朝敵免除の綸旨を受く）は、諏訪神社の大祝おほはふり諏訪頼継（時に十二歳）の助力を得て伊那の大徳王子城（所在不明）に挙兵、北朝方信濃守護小笠原長亮（長基か）勢を打破り、鎌倉方の援軍にも屈せず、大いに宮方の意気を高めたが、兵糧続かず、十月つひに落城、将兵四散した。

この戦ひは、必ず宗良親王との連繫、またはその下知げちがあったと思はれるが、今日まで皆目不明である。

こののち親王は、この年の暮ごろ、新田氏が守護でなほ余勢を保つてゐた越後の国に出

て、始め寺泊に、のち奈呉浦なごのうらに移られ、日本海の波風にさらされること三年、信濃国伊那郡大河原の里に入られたのが、興国五年（一二三四、親王三十四歳）のことであつた。

この後、親王は、正平七年（一二三二、北朝文和元年）尊氏軍と武蔵野合戦を戦ひ、また正平十年（一二三五）には再度越後の南朝軍を督して木野島・平方原で戦ひ、信濃に帰ると、足利方の小笠原軍と桔梗が原で戦ひ、いづれも敗れて南朝方の態勢たいせいを挽回するに到らなかつたが、このあと吉野の朝廷に復歸されたのは、文中三年（一二七四、北朝応安七）のこと、興国五年より実に三十年の長きにわたる大河原ご滞留であつた。

この間、「朝夕の霜雪を払ふ忠勤」もつて親王に仕へた大河原城主香坂高宗などを頼りに、于戈かんくわの響きなきとは、風月と和歌に心を託し、当代に比類なき『李花集』一卷を残されたのであつた。

去る平成四年六月十二日、わたしは、茜会の班長の木下乃枝さん他の尽力によつて、信濃宮よりさらに数キロ奥の、親王居住の地御所平ごしよたひらにまゐることができたのである。

その地は、山里に育つたわたしにも、山深さが身にこたへるほどの、赤石岳山麓の深山幽谷の地であつた。もと釜沢部落の奥「内の倉」と言ふが、親王ご住居以後御所平といふ

と『大鹿村（大河原と鹿塩両村合併しての名）誌』に見える。近くに弓矢の術を鍛へたところかといふ「的場」、また寺沢・寺屋敷の地名あり、これは天台座主であられた親王の、この地における行法の「長谷庵」跡とも言はれるが、いづれもがけ崩れあるいは大水のため原形を止めないとのことである。

李花集雜歌に

山里にし**のびて**こもりみ侍りし頃、猶みち行きぶりのたよりもしげくなど申して、ふかき山にうつろはせ侍りし時よみ侍りし

山にても猶うき時のかくれがはありけるものを岩のかけ道

このみ歌は、大河原の里から山深くこの御所平にのぼってきて始めて諒解されるのである。

大鹿村の西辺を天竜川と並行して南北に一本の古道がある。この道、北は諏訪から、南は浜松まで、途中火難よけ（火伏せ）で有名な秋葉神社にまゐる道なので、後世秋葉街道と呼ばれたが、当時から旅人が多かった。始め宗良親王を里近くお迎へした香坂高宗



が、このあたり通行人が多いので、親王ご籠居のことを秘すべく、更に奥深い所へと考へ、この御所平へお住居を移したのであらう。「うつろはせ」の「せ（す）」は従っていないゆる使役の助動詞であらう。山の中でも心うき（気がかりなことで心がふさいで晴れぬ）時の隠れ家はあるものだ、この「岩のかけ道（かけぢ、けわしい山路）に住居してみて」と解釈できる。

御所平といつても、いまは草木茂る山地の一部に過ぎないが、そこに三、四坪の木小屋を建て、その傍らに小さな歌碑がある。李花集に見える前文を略して、和歌一首のみを記してあるが、いま前文をも含めて、この歌を記すと、

信濃国大河原と申し侍りける深山の中に、心うつくしう庵一二ばかりしてすみ侍りける、谷あひの空もいく程ならぬに、月を見てよみ侍りし

いづかたも山のは近き柴の戸は月見る空やすくなかるらむ

このみ歌、右に述べたやうに、人里離れた御所平における詠歌とすれば、一層理解し易いのである。前文にある、この「うつくし」は、肉親の小さいものへの愛から、小さなも



のの美しさへの愛と意味の移りゆく姿を示してゐる。深山幽谷の中に小じんまりした山家のさま、そこで見る、穴の底から仰ぐやうな月のさまが歌はれてゐるのである。

御所平を下って釜沢部落に入ると、道の右側の山はだにはりつくやうな形で、ここに宗良親王も合祀されてゐる宇佐八幡宮の社殿があり、その狭い前庭に、小さな木の祠ほくらがあつて、その中に一基の宝篋印塔ほうけつよがある。

大鹿村誌によれば、大正十五年八月、来村した当時の京都大学の天沼俊一博士は、「思うにこの宝篋印塔は室町時代の初期において、南朝関係の人々によつて宗良親王の供養塔として安置したものであらう」と言つてゐる。

宇佐八幡宮の東下の土地を今も寺垣外てらがいとと呼び、もとここに大竜寺といふ寺があつたが、のち上蔵わさくらの宗久寺に合併された。この宝篋印塔はそこにあつたものをこの八幡宮境内に移したものと言はれる。

宗良親王は、大日本史（卷之九十九列伝第二十六）を始め、「その終はる所」未詳みじやうとなつてゐる。従つてその享年も七十五歳乃至七十九歳とさまざまであるが、近年大河原薨去が有力となりつつある。

宗良親王の生涯と和歌にとりくんで一年三ヶ月、わたしたちは、この日の遺蹟見学に、親王に対し、一層瑞々ミツケツしい追憶の思ひを抱いて、明石岳につづく山路を下ったのである。

## 宮脇昌三 略 歴

大正四年（一九一五）二月二十四日、長野県駒ヶ根市中沢二六八六番地に生まる。

東京府立四中（現都立戸山高校）、第一高等学校（文科甲類）を経て、昭和十四年三月、東京大学文学部国文科卒業。

昭和十五年一月、関東軍に入営、二十年、第三軍司令部参謀部（後方）附陸軍中尉にて終戦。同年入ソ捕虜生活五年、二十五年一月帰還。

同年四月より教員（中沢中学校二年・伊那北高校五年）。爾後教頭九年（中箕輪高校・木曾西高校・松本深志高）、校長九年（岡谷東高・上田染谷丘高・野沢北高）。昭和五十年退職。信濃教育会雑誌編集主任（四年）。

昭和五十一年より亜細亜大学講師、五十五年四月より教授、五十六年九月より教養部長。六十年四月より客員教授。

昭和六十一年四月より駒ヶ根総合文化センター所長。平成三年四月より駒ヶ根市文化財団理事。同年駒ヶ根郷土研究会会長。

編著 『中村伯先句集』（上伊那誌編纂会）、『加舎白雄全集』全二卷（共編・国文社）、『一茶全集』全九卷（共編・信濃毎日新聞社）、『井月全集』増補版（伊那毎日新聞社）、『連歌俳諧信濃紀行集』（矢羽勝幸と共編・信濃史料刊行会）、『俳人の書画美術・一茶篇』（鈴木勝忠と共編・集英社）、『井月真蹟集』（伊那毎日新聞社）、『俳人井月探求』（同上）、『井月の俳境』（踏青社）。

創作集 「権兵衛峠」（伊那毎日新聞社）、『邂逅』（同上）。随筆集『教壇折々の記』（玉川印刷）

現住所 〒399-142 長野県駒ヶ根市中沢菅沼（電話〇二六五―八三―七四九六）

平成五年三月三十日 発行

頒価 九五〇円

ソ連抑留と日本回帰

国文研叢書 No.34

著者 宮<sup>みや</sup> 脇<sup>わき</sup> 昌<sup>まさ</sup> 三<sup>かず</sup>

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

〒<sup>104</sup> 東京都中央区銀座七<sup>一〇</sup>一<sup>八</sup>  
(柳瀬ビル)

TEL(〇三)三五七二<sup>一五</sup>二六(代)

FAX(〇三)三五七二<sup>一五</sup>二七

振替 東京 七<sup>一六</sup>〇五<sup>〇七</sup>七番

印刷所 奥村印刷株式会社  
東京都千代田区神田神保町二<sup>ノ</sup>四四  
(石坂ビル)

(既刊) 国文研叢書 (新書判)

|        |            |                                 |      |
|--------|------------|---------------------------------|------|
| No. 1  | 久原正雄著      | 古事記のいのち(改訂版)(原)昭和41年・(改)昭和48年   | 316頁 |
| No. 2  | 高木正高著      | 日本精神史の歴史 親鸞と実朝の系譜 昭和41年         | 279頁 |
| No. 3  | 高木正高著      | 弁証法批判の系譜 昭和42年                  | 241頁 |
| No. 4  | 小田村寅二郎編    | 日本思想の系譜 文獻資料集・上巻(古代・中世) 昭和42年   | 309頁 |
| No. 5  | 小田村寅二郎編    | 日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その1(近世I) 昭和43年  | 317頁 |
| No. 6  | 小田村寅二郎編    | 日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その2(近世II) 昭和43年 | 409頁 |
| No. 7  | 小田村寅二郎編    | 日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その1(近代I) 昭和44年  | 403頁 |
| No. 8  | 小田村寅二郎編    | 日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その2(近代II) 昭和44年 | 381頁 |
| No. 9  | 川井修治著      | 歴史と人生観—マルクス主義の超克 昭和43年          | 283頁 |
| No. 10 | 小田村寅二郎著    | 阪米名著邦訳(明治)集と文獻資料集 昭和45年         | 483頁 |
| No. 11 | 桑原暁一著      | 日本精神史の系譜 文獻資料集 昭和45年            | 310頁 |
| No. 12 | 夜久正雄・山田輝彦著 | 日本精神史の系譜 創作と鑑賞 昭和46年            | 309頁 |
| No. 13 | 夜久正雄・山田輝彦著 | ヨローロッパにおける短歌のすすめ 昭和46年          | 316頁 |
| No. 14 | 桑原暁一著      | 白村江の戦—7世紀・東アジア主義批判論集 昭和48年      | 338頁 |
| No. 15 | 夜久正雄著      | 丸の内におけるマルクス主義批判論集 昭和49年         | 324頁 |
| No. 16 | 桑原暁一著      | 日本におけるマルクス主義批判論集 昭和49年          | 293頁 |
| No. 17 | 戸田義雄著      | 明治天皇御集研究(復刊) 昭和51年              | 320頁 |
| No. 18 | 三井甲之著      | いのち ささげて—戦中・戦後遺文抄 昭和53年         | 354頁 |
| No. 19 | 国民文化研究会編   | いのち ささげて—戦中・戦後遺文抄 昭和54年         | 450頁 |
| No. 20 | 国民文化研究会編   | いのち ささげて—戦中・戦後遺文抄 昭和54年         | 421頁 |
| No. 21 | 加納祐五・三浦貞蔵著 | 社会主義理論との戦い(山本勝市博士論文選集) 昭和55年    | 420頁 |
| No. 22 | 桑原暁一著      | "とっちゃん"先生の国語教室 昭和56年            | 172頁 |
| No. 23 | 小柳陽太郎著     | 戦後教育の中で 昭和56年                   | 298頁 |
| No. 24 | 小山田輝彦著     | 明治の精神—近代文学小論 昭和57年              | 335頁 |
| No. 25 | 松田久正著      | 米英思想研究抄 昭和58年                   | 270頁 |
| No. 26 | 夜久正雄著      | 「しきしまの道」研究 昭和59年                | 320頁 |
| No. 27 | 国民文化研究会編   | 学問・人生・祖国—小田村寅二郎選集 昭和60年         | 350頁 |
| No. 28 | 国民文化研究会編   | 戦後世代からの発言 昭和61年                 | 357頁 |
| No. 29 | 国民文化研究会編   | 戦後世代からの発言 昭和62年                 | 279頁 |
| No. 30 | 廣瀬誠著       | 萬葉集 その漲るいのち 昭和63年               | 328頁 |
| No. 31 | 加納祐五著      | Belief that と Belief in 平成元年    | 276頁 |
| No. 32 | 廣瀬誠著       | 和歌と日本文化 平成2年                    | 326頁 |
| No. 33 | 戸田義雄著      | 祖国と人類の悲願 平成3年                   | 336頁 |









